

ありふれた黒幕のあり  
ふれない日常

96 reito

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これはとある黒幕とその仲間達が織り成す喜劇。

と、まあ堅苦しい前書きは別にいいか……零斗達がただただ普通に生活する場面を切り取った物だよ。トータス？行かないよ？あの阿呆しか召喚されないし、ソッコー死んでエヒトは地球への興味を失うし……とりあえずはみんなハッピーな世界線で事でOKです。

# 目次

新しい朝来た♪希望の朝が♪	1	花見行こうぜ!	112
勉強?んな事より料理すつぞ!	12	父の日には特別な感謝……	121
八重樫家での一幕	25	モデルデビュー?	128
初めまして……私の愛しい人	35	夏だ!海だ!	142
楽しい場にはトラブルが付き物	43	夏って言ったら、海だよなあ!?	154
連れ去れた先は	51	酔いに任せて……	172
特別編:バレンタイン(戦争)	58	Happy Halloween!!	184
湊莉さんちの今日のご飯	65	そのウサギ、異郷から来たりて	193
はじめての……	73	転校生はよく知る二人	201
デートロ!開けロイト市警だ!	87	聖夜の夜は友人と	213
説明を聞いては……ダメ?そう(泣)	100	そうだ、デートに行こう	224
		鞭(一割)と飴(九割)	236

ゆったりとした時間を共に

247

女子会といえは恋愛話！

260

不運（ハードラック）と踊（ダンス）

つち

まった

273

ある少女の神隠し

285

神様にマトモな奴はいない

298

# 新しい朝来た♪希望の朝が♪

S i d e 零斗

黒幕の朝は早い——午前5時には目を覚まし身支度を済ませる。それが終われば朝のトレーニングだ。ランニング5kmから始まり、片手倒立腕立て伏せを100回3セット、スパイダープランクを100回3セット、その後は真剣と同じ重さの木刀を使つての素振りを300回行う。

「ふう……」

筋肉の剛性を高めた後は、筋肉の柔軟さを保つ為にヨガを応用した入念な柔軟運動を行つて、筋肉の剛性と柔軟性を保持している。

「いい時間だな。今日の朝食のメニューは……トーストに、ベーコンエッグ、コンソメスープで。昼食はイカ墨パスタと卵と野菜のパンプキンキッシュ、デザートのラム漬けレーズンのバーンブラックだな」

冷蔵庫や棚から必要な材料を取り出し、調理を始める。

「ご馳走様でした。そろそろ時間だな」

制服に着替え、作った昼食をバツクに入れて家を出る。さて、なるかな。

「零斗、おはよう」

「おはようございます、刀華」

家を出ると玄関の先で俺の最愛の人である、刀華が待っていた。うん、可愛い。

「……ハジメは？」

「まだ家に居るわ」

「起こしに行きましよう、今ならまだ遅刻はしませんし」

「ええ、そうね」

刀華と共にハジメの家に向けて歩き始める……先程から視線が痛い。

「……」

「……？」

どうしよ？ 俺なんかしたかな？

「どうしましたか？」

「……何でもないわ」

「そ、そうですか」

モジモジとしている刀華……何をどうしたら良いのかな？ 手でも繋いだ方が良い

のかな？

スルツ……ニギ「……」

「!? ……」( \*、\* )

ふわりと華が咲く……どうやらお気に召して頂けたようだ。少し頬を赤らめて破顔する刀華。可愛いな、おい。動悸がとまらねえよ……

「……………」

『ママ。あのお兄ちゃんとお姉ちゃん顔真つ赤だよ?』

『あらあら、初々しいわねえ』

『リア充かよ……朝からご馳走様です』

付き合いたてのカップルかよ、俺らは……恥つず……周りの人はほっこりとした視線を注いでくるし、中には茶化すような言葉を掛けてくる奴もいるし……恥つず。



Side 一花

私の名前は東雲 一花（しののめ いちか）、お父さんの転勤で高校を転校する事になった。今日から新しい高校生活が始まる。ちよつとワクワクしながら振り分けられたクラスに入る。

ガヤガヤ（なんでこんなに人が多いの?）

私は教室に入り、辺りを見渡す。すると、黒板にはデカデカとこう書かれていた。

【転校生が来ますー】

はあ……こういうイベント好きそうだもんね、あのちっこい先生。ドアを開けて入ってきたのは三人組の男女だった。一人は髪が白くてオッドアイの男の子、もう一人は眠たげで気だるそうな男の子で最後の一人は背が高く綺麗な女の子だ。

コツコツ「……」

二人は私の横を通り過ぎて行く……

三人が通り過ぎる瞬間に男子の方を見たけど2人揃って美形だった。そして女子の方はモデルさんみたいにスタイルが良い。——それからHRが始まり、自己紹介タイムが始まった。まず最初に自己紹介したのは白髪君だ。

「湊莉 零斗です。趣味はお菓子作りで、得意な事は料理です。よろしくお願いします」  
ペコリ

うーん、普通の挨拶だけど、何か印象に残る感じがあるな。多分それは彼の纏っている雰囲気だろう。次に自己紹介するのは彼の隣にいた女の子だ。

彼女は零斗君の肩に手を置きながら前に出る。彼女が歩く度に皆が目を奪われる。スラリと伸びた足、長い手足、均整の取れた体つき。それに腰まで伸びている艶のある黒いストレートヘア。まるでモデルのよう……って本当にモデルなのかな？ クラスのほとんどの人が見惚れている中、彼女だけは堂々としている。教壇の前に立ち、私



達の方を向いた彼女の容姿は……一言で言えば女神だろうか？ 透き通るような白い肌、整った鼻筋、ぷるりと潤った唇、切れ長で大きく開いた瞳孔の目は吸い込まれそうなほど美しい。

そして何より、この世の物とは思えないほどの美貌を誇るその顔が、彼女を一層美しく見せていた。ゴクリ……誰かが唾を飲む音が聞こえる。それだけでは無い、クラス全員が彼女に釘付けになっているのだ。それほどまでに美しかった。

しかし、そんな絶世とも言える美少女が、無表情のまま喋り出す。

「西園寺 刀華です。趣味は旅行で、特技は裁縫です」

たったこれだけの短い挨拶なのに、何故か聞き入ってしまう魅力があった。西園寺さんは挨拶が終わるとスタスタと自分の席に戻って行った。すると今度は眠たげな男子が自己紹介を始める。

「南雲 ハジメです。趣味は……特にありません。好きな物はラノベです、よろしくお願います」

彼もまた平凡な自己紹介をした。すると、クラスの大半から嘲笑が上がる。

ヒソヒソ（ああ、また始まったよ）

コソコソ（これだからオタク君は）

クラスの大半が南雲君を馬鹿にする。でも彼は何も言い返さない。ただ黙々と席に

戻る。

(可哀想に……)

私は同情した。だってそうでしょ、ただ好きな物を言うだけでバカにされるなんて、私なら耐えられない。

その後も何人かが自己紹介をして、ついに私の番が来た。

私が立ち上がると、さっきまでのざわめきが嘘のように静まり返り、全員の視線が集まる。なんか緊張するな……えっと次は何を話せばいいんだっけ？ 確か名前だけ言つて座ればいいんだよね？ よし！ 頑張れ私！ 私は一度咳払いして口を開く。

「東雲 一花です。趣味は園芸と料理で、特技は生け花です。よろしくお願いします」ペ  
コリ

私は自分の席に戻るとふう……と一息つく。なんとか乗り切った。

あ後は普通に授業が始まって、お昼休みになった。チャイムが鳴ると、担任の先生が教室から出て行く。それを見て生徒たちもそれぞれ行動を始めた。ちなみに私の今日の昼食はサンドイッチだ。パンを半分に切つて中にハムやらチーズやらを詰め込んだ簡単なお手軽メニューである。

「モグモグ」

うん、美味しい。やっぱり自分で作って食べる方が好きだな。

その時だった。突然周りが騒がしくなる。一体何かかと思いい周りを見渡すと、そこには数人の女子に囲まれて質問攻めにあっている湊莉君がいた。

すると、おもむろに西園寺さんが湊莉君に近寄り……唇を奪った。

キヤー——！ 「!?」ポロツ

周りに居た女子達は黄色い悲鳴を上げる。湊莉君達のキスは軽く唇同士が触れるフレンチキスでは無く、しつかりディープキスだ。しかも二郎系くらいど濃厚のヤツだ。

「プハア……いきなりですね、嫉妬ですか？」

「そうだけど？」

「フフ……可愛いですね」

ア、そう言う御関係でしたか……甘ったる。

「はいはい、ごちそうさまでした。周りの子供達が置いてけぼりだよ零斗」

「「いえ、大丈夫です！ ありがとうございまして！」」

それで良いのかあんた達は……にしても美男美女カップルだなあ、南雲君は呆れてるみたいだけど。

ガララツ「零斗——！ 遊びに来たよ——！」

「まったく……何時まで経っても子供っぽいんですから」

「まあ、いいじゃない。見ていて楽しいでしょう?」

「その割には顔がニヤけている様ですが?」

「……スルーでお願いします」

教室のドアが勢い良く開き4人の美男美女が入ってきた。

「零斗! 今日のご飯は!?!」

「はいはい、今渡しますから」ゴソゴソ

湊莉君はカバンから7人分のお弁当箱を取り出し、配った。

「ちなみに今日のメニューは?」

「イカ墨パスタと卵と野菜のパンプキンキッシュです。デザートにレーズンのバーンブ

ラックもありますよ」

「すつご……しかも7人分も……私じゃ出来そうにないなあ。その後、仲良く食事を楽しんでいた。」

放課後になり、私は部活見学に行くことにした。本当は帰宅部でも良かったんだけど、せっかくだし何かやってみようかなと思ってね。まず最初に来たのは料理研究部の見学だ。中に入ってみるとそこはお菓子作りに精を出す女の子達がいた。調理室では部員の人達が作ったであろうスイーツが大量に並んでいた。どれもこれも凄く美味し

そうだ。

「おや？ 貴方は……」

「ふひゆう!？」

「驚かせてしまったみたいですね」

「み、湊莉君……」

いつの間に後ろにいたんだろう？ 全然気づかなかつた。

「部活動の見学ですか？」

「はい、一応」

「……体験していきますか？」

「え？ でも……つて、わ！」

湊莉君に手を引かれて調理室に入る。

「零斗！ 5分遅刻だよ！」

「すみませんね、委員会の仕事が長引いてしまいましたね」

奥の方では昼間に教室に来た4人組と西園寺さんが居た。

「構いません。ちょうど試食していただいていますから」

机の上には所狭しと色々な種類のスイーツが置かれている。その数ゆうに多くても十種類ぐらいある。それでも全部手をつけられていないのは丁寧にデコレーションさ

れているからだろう。その中で一番シンプルなショートケーキを手取る。フォークを入れるだけでサクツと切れ、中には真っ赤に熟れたイチゴが入っていた。口に運ぶとクリームの甘さとスポンジ生地のかなかな酸味を感じる。

「んう〜！ おいしい！」

「フフフ……」

「あゝ！ すみません！」

しまった、つい癖で。そんな私の姿を見て笑っていたのは西園寺さんだった。湊莉君もその隣で微笑んでいる。この二人本当に仲が良いねえ。すると一人の男子が話しかけてきた。背が高いなあ。180センチはあるんじゃないの？

「君、転校生かい？」

「は、はい！」

「そんなに畏まらなくていいさ……私は佐野 恭弥と言います。どうぞよろしく願います」

「スツ

ニギ「東雲 一花と言います！ よろしく願いました……」

あう……緊張して噛んじゃったよお……恥ずかしい……

「どうでしたか？ 料理研究部は？」

しばらくして落ち着いた後、湊莉君は私に問いかけた。あんな凄いもの食べさせても

らったのだから感想を言ってあげないと失礼にあたるよね。私は感じたことをありのまま伝えた。とてもおいしかったこと。見た目も綺麗だったこと。そして何よりも皆楽しそうにしていたことを伝えた。それを聞いていた部員の人達も嬉しそうな表情を浮かべていた。少しだけ胸のつかえが取れた気がする。最後に西園寺さんから入部届を手渡され、記入欄を埋めていった。書き終わると今度は皆の前に連れられた。そして、そこで先程言えなかつた分も含めた感想を全て言った。それがかなり恥ずかしかつたのか、顔を赤くしていたが湊莉君は笑顔で受け入れてくれた。

入部を決め家に帰る途中私は今日一日のことを思い出してみた。あの後も色々あったなあ。美男美女カップルが3組でしょ？ 無駄にキラキラした人から『零斗には近づくかない方が良さ』とか言われたでしょ？ 雑誌にも載っていた現代の美少女侍が同級生……勿論面白かったことは嬉しいんだよ？ ただ、我ままになるとしたらどうかと思うだけだね？ 学校生活はまだ始まったばかりなんだもん。これからきつと面白いことがたくさん有るはずだから楽しみだね。ワクワクしながら帰っていく。

# 勉強?んな事より料理すっぞ!

Side 一花

「あのおー……湊莉さん」

「なんででしょうか?」

「何故、湊莉さんが私の家に?」

「テスト勉強の為ですね」

「じゃあ……なんで、私料理しているのでしょうか?」

「……成り行きでしょうかね?」

「明日はテストですよね?」

「そうですね」

私はテスト勉強がしたいです! とは言い出せない……湊莉君の教え方が上手すぎで料理が楽しくて仕方ないから辞めるにも辞められない。

今作っているは肉じゃがを作っているのだが、その隣では湊莉君が何故かカレーを作っていた。しかも、私よりも手際が良いし……私の存在意義って何? そんな事を考えながらぼつーと鍋の中を見ていると湊莉君は何かを取り出した。それは……



「イ、インスタントコーヒー?」

「御明答……コーヒーを加える事でコクが深まるんです。更にほろ苦さが加えられ、ただ辛いだけではなく深みのある味わいになるのも大きな特徴です」

説明しながらお玉を使ってクルツとかき混ぜると完成したのか火を止めていた。そして出来上がった2つの皿に均等に分けて盛り付けしていた。片方にはご飯をよそい、もう片方にはルーを掛けていた。それをテーブルまで運び終えると遅めの夕食となった。

……うん、美味しい。

やっぱり男子なんだなあ〜なんて思いつつ食べ進めていく。すると、湊莉君がマグカップを差し出してきた。

「そのカレー、コーヒーと合う様に作っています。どうぞ、試してみてください」

「は、はあ」

湊莉君からコーヒーの入ったマグカップを受け取り、言われた通りにカレーを食べた後にコーヒーを飲む。……………うわあ。

口の中に広がっていた辛さが一気に無くなり、まるやかな味に変化する。それに後味に残るほろ苦さ……。これはハマリそうだ。

「如何ですか?」

「凄く合ってます!」

「それなら良かったです」

その後、あつという間に完食してしまった。

「ご馳走様でした」

「いえいえ……」

……沈黙が流れる。この空気に耐えられなくなり、聞いてしまった。

「ど、どうしてここまでしてくれるんですか?」

「えっ?」

「だって、こんな夜遅くまで付き合わせてしまつて申し訳ないと言うか……何と言いますか……」

自分で言っていて恥ずかしくなる。でも、気になってしまったのだ。何故そこまでしてくれるのか。彼は少し考える素振りを見せると笑顔で答えてくれた。

「好きでやつてる事なので気にしないでください。あと、今日泊めてもらう身としてはこれくらい当たり前だと思つていますから」

……ずるいなあ。そういう事をサラツと言える所とか本当にズルイと思う。

「もう遅い時間ですし寝ましようか。僕はソファアを使わせて頂きますので一花さんはベッドをお使い下さい」

「はい!？」

「どうかしましたか？」

「いやいや！ 私が床で良いですよ！ 流石に悪いですって！」

「僕がそうすると言っているのですから遠慮なさらずに使ってください」

「駄目です!!」

つい声を上げてしまった。

「湊莉君を床なんかで寝させるわけにはいきません!! だから、私が床で寝ます！」

「しかし、女性である一花さんをそんな所で寝かせるわけにはいかないですし、そもそも最初からそのつもりですから」

「それでも駄目なものは駄目です!! 私は大丈夫ですから！ 湊莉君はちゃんとしたと

ころで休んでください！」

「……分かりました。ではこうしましょう」

すると、湊莉君は立ち上がり私の後ろに来るとそのままひよいっとお姫様抱っこされた。

「きやあああ!? ?ちよ、ちよつと湊莉君何をしているんですか!? ?下ろしてくだ

さあーい！」

ジタバタ暴れるがびくともしなかった。そして、優しく布団の上に下ろされると部屋

の電気を消され部屋から出て行ってしまった。

「ま、待ってよお〜」

急いで追いかけようとしたが足がもつれてしまい、その場で倒れ込んでしまう。

結局、追いつく事が出来ずに眠りにつくのだった。朝食の準備をしなくてはと思い、リビングに行くのと既に湊莉君は起きていて台所に立っており、こちらに気がついて挨拶をしてきた。

「おはようございます、一花さん。よく眠れたようですね。安心致しました」

「お、おかげさまで。朝ごはんまでありがとうございます」

「いいんですよ。昨日のお礼ですので気にせず召し上がってください」

「はい、いただきます」

「美味しいです!!!」

「それは良かったです」

その後、軽く会話を交わした後学校へ登校していった。

テスト1日目が終わりましたし、結果発表の日の放課後に教室の掃除をしていると、後ろの方から話し掛けられた。

「いっっちゃくん♪ 一緒に帰ろう！」

「あ、藤野さん。こんにちは」

そこに居たのは同じクラスの藤野 悠花さんだ。いつも明るく元気いっぱいの人で男女問わず人気の高い人だ。因みに湊莉君の幼馴染らしい。

「ねえ、今日のテストどうだった？ 自信ある？」

「そうですね……それなりに出来たと思います」

「そっか……じゃあさ、これから駅前のカフェ行こうよ！ そこでお茶しながらお喋りしようよ。ねっ、お願い！」

……うむ。正直、あまり行きたくないのだが、そんな事言える筈もなく渋々了承した。

「わ、わかりました。では、終わったら校門の前で待ち合わせしましょう」

「うん、わかった！ 絶対だよ！」

そう言い残して彼女は去って行った。掃除が終わるとすぐに校門前へ向かうとそこには既に藤野さんの姿があった。彼女の方も私を見つけるとすぐ駆け寄ってきた。

「ごめんなさい、待たせちゃいましたよね？」

「ううん、全然大丈夫！ それより早く行こ！」

彼女に引つ張られる形で喫茶店へ向かった。店内に入り席に着くと早速注文をする。

「私は苺パフェにしよつと。いっちゃんは何にする?」

「え、ええと……チョコケーキで……」

「おっけい! すいませーん!」

店員を呼び止めて注文をした。暫くして、頼んだものが来ると2人で食べ始めた。……そういえば、こうして悠花さんと2人つきりで食べるなんて初めてかもしれない。

「あの、前から聞きたかったことがあるんですけど……」

「なあに? 何でも聞いて!」

「どうして、私と仲良くしてくれるんですか?」

「ずつと疑問に思っていたことを聞いてみた。すると……」

「え、何でだろう……友達になりたいと思ったからかなあ。あつ、勿論いっちゃんの事嫌いじゃないから安心してね」

……いや、別に嫌われているとは思っていないんだけど……でも、少し複雑だ。

その後も他愛もない話をしながら楽しく過ごした。

大きく手を振りながら帰っていった。私は小さく手を振り返し見送った後、家路についた。……湊莉君と一緒にいる時は楽しいけれどやっぱりどこか落ち着かないと言うか変に意識してしまうというか……とにかく気疲れするのだ。だから、こういう風に気軽に接してくれる人が近くに居るといえるのはとても楽なのだ。

テストの結果が貼り出されていたので確認しに来た。……ふむふむ、今回の成績は中の下と言ったところか。まあ、前回よりは良い成績なので満足である。

「おや、一花さんじゃないか。こんな所で会うなんて奇遇だね」

……げ、この声は。

「天之河くん……」

嫌そうな顔で振り向くと、案の定そこにはあまのがわ天之河こうき光輝がいた。彼は私の唯一と言っているほどの苦手とする人物である。

「? どうしたんだ? そんな顔をして?」

「いえ、特に何もありません」

とつとと離れようと歩き出すと、腕を掴まれてしまった。

「ちよつと待ってくれ」

「……何か用ですか?」

「実は君に頼みたい事があるんだよ。もしよかつたら僕の手伝いをしてくれないかい?」

報酬としてそれなりのものを約束しようじゃないか」

……面倒臭いので断る事にした。

「お断りします」

「何故だい!? ? 僕達は同じクラスの仲間ではないか!! 困った事があれば助け合うべきだろー! それとも、君は仲間を見捨てるのかい?」

「そういう訳ではありませんが……。私には関係ないですし」

「それは違うぞ一花さん。僕は君の事を思っ言っているんだ。それに、君だっ助かると思うよ。誰だっ自分の身は可愛いものだからね。さあ一緒に来てくれ」

強引に連れていかれそうになった時だった。突然、誰かに肩を叩かれた。その正体は湊莉君であった。

「何をしているのですか?」

「み、湊莉! お前から言っやれよ。こいつは酷い奴なんだ」

「……貴様は一体何を言っているんだ?」

湊莉君の口調が変わった。どうしたのだろうか?

「お、おい! いきなりどうしたというんだ? そんな怖い目つきで睨んで」

天之河も湊莉君の変わりように驚いていた。

「……」

「無視をするな! 何とか言ったらどうなんーっツ!!」

……あ、これ不味いやっだ。

「黙っている。私の前から今すぐ消えないのなら………殺す」



完全にキレてる。これは下手したら殴り合いになるかも……

「よ、用事を思い出したからこれで失礼する」

そう言うとそのくさと逃げていった。

「一花さん、大丈夫でしたか？」

「え、ええ。ありがとうございます」

湊莉君のおかげで難を逃れる事ができた。その後、彼の怒りも収まったようでも通りの彼に戻ってくれた。

……でも、少し怖かった。

放課後になり図書室に向かった。理由は本を借りるためである。読みかけの小説があったのだがそれが丁度昨日で返却期限が切れてしまっていたのだ。それで仕方なく返しに行くことにした。

(確かこの辺りにあったはず……)

キョロキョロと探し回ると、やっと見つけることができた。ふう〜良かったあ。後は帰るだけだ。そう思い、踵を返したその時、ドンっ!!! 誰かとぶつかってしまった。私は尻餅をつく形で転び、相手は持っていた鞆を落としていた。私は慌てて起き上がり

相手の方を見た。すると、そこに居たのは ……………

「イテテツ……あ、大丈夫?」

「う、うん。大丈夫」

南雲くんだった。私は急いで立ち上がって頭を下げ謝った。すると、慌てなくていいと言われたので顔を上げた。そして、改めて見ると……彼はやはりイケメンだと思つた。身長が高く細身の体型をしている。黒髪の短髪をしており、前髪の一部が垂れている。目は細く鋭い。格好良いと言うよりは綺麗系の顔付きである。そんなことを考えながらボーッと見ていると、バンツ!!! 大きな音と共に勢いよく扉が開かれた。

何事かと思ひ入り口の方を見るとそこには幽鬼の様な形相をした湊莉君の姿があつた。隣で南雲君が小さく悲鳴を上げた……

「……Where did he run away?」

コツコツと足音を立てて図書館内を歩く湊莉君……背後に銃を持ったメイドさん?が見えるのは気の所為だろう。そのままカウンターまで行くと、司書の先生に声をかけた。湊莉君の声を聞いた瞬間、ビクウと体を震わせ怯える様に返事をしていた。……あれは怒っている時の声色だ。しばらく話を聞いた湊莉君はこちらへゆつくりと近づいてくる。

「……Where did he run away?」

（し、東雲さん！ 僕がここに居ることは絶つつ対にバレないように協力してください！）

（わ、わかった……）

小声で話してはいたが、耳の良い湊莉君には聞こえていたみたいだ。目の前に立つ湊莉君。

「Hey <sup>ねえ？</sup> you? list <sup>貴方</sup> en <sup>に</sup> ing? <sup>聞</sup> Check <sup>て</sup> ma <sup>る</sup> te <sup>の</sup>」

しかし、湊莉君は私ではなく何故か隣の席に座っている南雲君を見ていた。湊莉君はおもむろに手を伸ばした。まさか!? ? 殴るつもりじゃ!! ? 私が止めに入ろうとした瞬間、湊莉君の手は彼の頭を撫で始めた。優しく丁寧に、まるで愛しい者に触れるように…… 湊莉君の行動を見て呆気にと取られてしまった。そんな私とは違い、南雲君は顔を真っ赤にして俯いていた。

「あ、あの……何をしていますか?」

「テストの結果がかなり良かったので労おうと思ひましてね」

「恥ずかしいから嫌なんだよお……」

なんだそういうことか……。ビックリしたなあもう。それならそうと早く言って欲しいものだ。その後、満足するまで撫で終わったのか、最後にポンと軽く叩いて終了となった。南雲君は満更でも無いのか満面の笑みを浮かべており、とても幸せそうであつ

た。

## 八重樫家での一幕

Side 零斗

道場内に打ち合う音が響く。

俺は、目の前で竹刀を振るう少女に視線を向けた。黒い髪を後ろで結びポニーテールのようにしている。その顔は凛々しく整っており、可愛さよりもかっこよさが際立つ容姿だ。

「……零斗、手加減しているわね？」

「バレましたか」

俺の返答が気に食わなかったのか、彼女は不機嫌そうな表情を浮かべた。そして大きく振りかぶって斬りかかってくる。それを横に飛んで回避し、すぐに彼女の懐に飛び込んだ。そのまま勢いよく竹刀を振り下ろすと、竹刀では絶対に鳴らないであろう金属音と共に弾かれた。

「腕を上げた様ですね、八重樫さん」

そう言うと、八重樫隼はその顔を嬉しそうにほころばせる。

「さて……そろそろギアを上げましょうか」

「ええ、身体も温まってきた頃だしね」

それから俺は彼女に向かって連続で突きを放つ。しかし、彼女は冷静にそれを見極めると最小限の動きだけでかわしていく。そのまま反撃に転じることなくひたすら避けることに専念していた。これは以前までやっていた試合ではない。だからといってただの訓練でもない。

これは——模擬戦だ。お互いの手の内を知っているからこそできるこの訓練は、相手がどんな動きをするか予測しながら動く必要があるため、実戦に近い緊張感がある。

つまり何を言いたいかというところ……めっちゃくちゃ楽しい！俺は彼女が振るってくる攻撃をギリギリまで引き付けて避けていく。すると、ついに痺れを切らしたのか、上段からの一撃を放ってきた。それに合わせてカウンター気味に打ち込む。

お互いに一歩も引かない攻防が続き、気付けば数十分が経過していた。

次の瞬間、視界の端で何かが動いたのを確認し、咄嗟に身を振った。直後、先程までいた場所を通り過ぎていった物体が床板を砕いて突き刺さる。どうやら蹴りを放ったらしい。

「危ないですね」

「それはこっちのセリフよー！」

思わず吹き声を出すとかささずツツコミが入った。

「そろそろいいじやろう……見学している者達も嘩然としておるわ」

俺達の戦いを止めたのは、道着を着た老人だった。彼はこの剣道場の師範代であり、名前は八重樫 鷲三という。歳は七十を超えているはずだが、鍛え抜かれた肉体にはまだまだ現役でも問題ないというほどの筋肉がついている。

「ありがとうございます」

「ふむ、もう少し早くなると思っただんじやがなあ……やはり若いもんは成長が早いわい」  
「いえ、そんなことはありません。現に私は最後の方はほとんど防ぐことで精一杯でしたし」

「いやいや、何を言っておるか。昔なら今の攻撃を避けただけでも大したものじゃぞ？ それに最後の方はだいぶ余裕があつたよう見えただし……」

いや、まあ昔の感覚は大分取り戻したしよ……身体もかなり出来上がってきてるし……普通は負けない筈なだけで、鷹三さんには勝てなし……どうなってんだよこの人。

「ほう、そこまで謙遜するということはそれなりに自信があつたという訳か？」

「……いえ、全く」

「素直なのは良い事じゃ。よしっ！ 次はワシとやってみるか！」

……勘弁してください、お願いします。結局、俺はその後もう一回だけ付き合わされ

た。しかも今度は全力で……。その日は久しぶりに疲労困憊になった。

ちなみに雫との模擬戦は週に一回程度行っている。最初は断ろうとしたのだが、彼女にどうしても言われてしまったのだ。理由を聞くと、他の道場生と違って雫の相手のできるのは今のところ俺と刀華だけだし、だが刀華は生徒会の仕事や実家の家業の手伝いなんかもあるから最近は来れて居ない。自分と同じくらい強い人との練習はかなり得るものが多いそうだ。確かに彼女の言っている事は一理ある。俺は対人経験だけは豊富だからね。まあ元々剣を使った戦いじゃないけど。

そうして時間は進み現在、時刻は既に午後八時を過ぎている。もうすっかり暗くなつており空を見上げると綺麗な星々が広がっていた。そして俺達はというと——スパーにいた。

「ごめんねえ零斗君、手伝わせちゃって」

申し訳なさそうに頭を下げるのは雫の母の霧乃さんだ。彼女の隣では買い物カゴを持った雫もいる。

今日の夕食の材料を買う為に二人で近所のスーパーにやって来て、俺は荷物持ち役を買って出たのだ。まあいつもの事だし別に構わない。俺が料理するのは二人共知っている為、こうして何かと頼まれることが多いのだ。もちろんバイトがない日にはちゃんとお礼をして貰っているから不満はない。むしろもつと頼ってくれてもいいと思うく



らいだ。普段世話になつてゐる分これぐらいはさせて欲しいと思つてゐる。

さつきまでは惣菜コーナーを歩いてゐたのだが今は肉のコーナーにいる。今夜は何を作るつもりなんだろう。

一応言つておくけど、これはデートではない。

決して一緒にご飯を食べてゐるわけではない。ましてや将来を誓ひ合つた仲間でもない。あくまで友人として食事を作つてあげてゐるといふだけである。しかし、それが分かつてゐても傍目から見たらカップルにしか見えないうような気がする。周りからの視線が非常に痛かつたりする（主に男からである）。特に男性陣の殺気の籠つた目が鬱陶しい。

「まったく、俺達のマドンナに手を出しやがつてあの野郎」

「本当だよ、リア充爆発しろ」

「今度見かけたらタダじゃおかねえ」

「……その御三方、聞こえていますよ」

「「げえ!!」」

少し声を大きくしただけで三人の男子生徒がまるでゴミを見るかのような目を向けてくる。そんな彼らを見て溜息が出る。いい加減学習したらどうだろうか。

「ははは、賑やかな子達ですね」

「すいません、お恥ずかしいところをお見せしました」

「いいえ気にしないでください。彼達がああいう態度をとるのは、きつとあなたの事をそれだけ認めているんですよ」

「いや違うと思います。単に嫉妬しているだけですよ……だってあいつ等、俺に向かつて中指立ててるし……うん、間違いない。」

「そんなやり取りをしながら食材を選んでいく。そして会計をするべくレジへと向かう。さて、今日は一体何を作ろうか。」

「……おい見ろ、あれ……」

「……ん？ ……おおー！」

店員の方が金額を表示しているモニターを見た瞬間、なぜか二人の男が小声で話し始めた。よく見るともう一人も会話に参加している。そして三人ともものすごく嬉しそうな顔をしていた。

「うーわ……マジかよ」

「嘘……でしょ？」

「ひゃっほおおー！」

………いつそ清々しいほどの喜びようである。そして合計金額が表示されるのだが、そこには予想以上の額が表示されていた。俺も雫も思わず顔を引きつらせる。

(こりやかなりの量になりそうだな……)

まあ俺は食べる量がかなり多いから問題ないが、雫の方は大丈夫なのだろうかと思いつつと横を見ると——彼女は何故か笑っていた。というより、もう笑うしかないといった感じだった。その様子から察するにおそらくこれが普通の反応なのであろう。俺は苦笑いを浮かべながら財布を取り出した。

それから家に帰りすぐに夕食の準備を始めた。と言つてもほとんど俺が作ったんだけど。二人はそれをテーブルに持つていくだけだ。ちなみにメニューは焼き魚と肉野菜炒めとサラダと味噌汁だ。まあこれだけあれば十分だろう。

料理が出来上がるとみんな揃つて食事をした。最初は相変わらず緊張していたが、今では慣れたものである。今日のご飯はかなり美味しくできたと思つたけど、果たしてどうかな？ 俺は一口食べてみる。

ふむ、味はまあまあかな。少なくとも見た目に関しては満足できる出来だ。霧乃さんはそんな俺の様子を見ながらクスツと微笑んだ。

隣では、既に自分の分の料理を平らげた雫が、俺の横に移動してきた。何故かこちらをじつと見ている。何をするつもりなんだろうと見ていると、箸で摘んでいた魚をパクツと食べてしまった。しかもそのままモグモグしながら幸せそうに頬を緩ませてい

る。……なんだこの可愛い生き物は！霧乃さんはそんな光景を見てまたクスリと笑っている。

「八重樫さん、おかわりありませんから……そちらを食べてくださいね？」

「……はっ」

俺の言葉を聞いて少しだけ不機嫌そうに席に戻る雫。前の席に居る虎一さんや鷹三さんの視線が怖い。雫は最近になってこういう事が多くなつた気がする。前はこんなに甘えたような行動は取らなかつたはずなんだか……もしや、彼女なりのスキンシップなのか？今まで異性とは縁がなかつたと言っていたし、友達と接する感覚で接してくるようになったのかも。だとするとそれはそれで嬉しいものがある。だから俺もなるべくそういう風に受け答えするように心掛けようと思う。

食事が終わるといつものように後片付けをして、その後はリビングでまったりと過ごす。テレビを見て笑つてみたり、雑談してみたり……。ああくなんて平和的な時間なのだろう。前世では、これほど穏やかな時間は過ごしたことがないかもしれない。

そしてしばらく経つた頃、時計を見たらすでに21時を過ぎていた。さすがにこれ以

上遅くなるのはまずいと思って帰る準備を始める。

しかし、それを聞いた雫が慌てたように言う。どうやら泊まっていけと言っているらしい。だが、さすがにそこまでお世話になるわけにはいかないため丁重にお断りする。

「まだ居ればいいじゃない」

「でももう遅いですし……」

「私は別に構わないわよ？」

「えっと……」

「……私と一緒に居るのは嫌……？」

「っ!？」

潤んだ瞳で上目遣いに見つめてくる。正直言つて反則だと思う。ただでさえ美人なのに、その上涙目のオポジション付きなのだから。こんな事をされたら誰だつて落ちるに違いない。雫は俺の反応を見つつチラツチラツと見上げている。……これは絶対確信犯だ。俺が断る事ができないと確信しているのだ。

「……分かりました。じゃあお言葉に甘えてもう少しここにいます」

「やったあ！」

パアツと表情を明るくさせ、まるで子供みたいに飛び跳ねる雫。本当に楽しそうである。その様子に苦笑いを浮かべながら荷物をまとめ始める。結局、俺はその日も朝まで

雫の家に泊まる事になった。まあいいか。明日も休みだし。

翌朝

耳元で誰かの寝息が聞こえ目が覚める。確認する為に横を見る……そこには気持ち良さそうに眠っている雫の姿があった。昨晩は雫がベットで俺は布団だった気がするんだが……ま、いつか。

俺はゆっくりと起き上がりキツチンに向かう。そして冷蔵庫からお茶を取り出しコップに注ぐ。喉を通る冷たい感触が心地よい。そして再び部屋に戻り、眠る彼女の側に腰掛ける。俺はそつと手を伸ばして彼女の頭を撫でた。サラサラした綺麗な髪だ。そのまま髪を弄んでいると、彼女はモゾモゾと動き始めた。やがて薄らと瞼を開ける。

ボーツとした眼差しで見つめられる。俺は手を離すタイミングを逃してしまい、そのままの状態していると彼女は微笑んだ。それから俺の手を掴み自分の頭へと移動させる。もつと触れという事だろうか？ とりあえず要望通りに優しく撫でてあげると、猫のようになりスリスリしてきた。とても可愛らしい。そのまましばらくの間、彼女を愛で続けた。

## 初めまして……私の愛しい人

Side 零斗

今日は朝からついていない……通り雨でびしょ濡れになるわ、大事にしていた包丁がお釈迦になるわ、妙な連中のせいで特売の卵を逃すわ……本当についてない。

とぼとぼと帰路についている時、路地裏の方でナニかが蠢いた。チラリとそちらを見ると人だった。十二、三歳くらいの少女だろう。ほんの出来心だった。

「貴方……助けて欲しいですか？」

少女は目を丸くして私を見つめる。私は何も言わずにじっと見つめ返す。すると少女は口を開いた。

「……たすけて」

その一言と共に少女は気を失った。どうやら体力の限界だった様だ……とりあえずは家に運ぶかねえ。

Side ???

目が覚めると知らない天井が広がっていた。ここはどこだろうか。声を出そうとしたが上手く出ない。体も重いし頭も痛い。まるで風邪を引いた時のようだ。

「あ、起きた？」

声が出た。ゆっくりと首を回すとそこには一人の男が立っていた。とても優しいような男性だ。

「無理しない方がいいよ。君は二日間寝てたからね」

男はそう言いながら私の頭を撫でてくる。不思議とその手はとても心地良かった。

ガチャ「おや？起きた様ですね」

部屋のドアが開き、そこから白髪の男性が入ってきた。この人も同じ様に優しい感じがする。

白髪の男性はそのままこちらへと歩いてくる。そしてベッドの横まで来るとしやがみ込み目線を合わせてきた。近くで見るとより一層顔立ちが良いことがわかる。白髪の男性は私を見て微笑む。それにしても何故だろう。初めて会ったはずなのに懐かしく感じる……。

「はじめまして。私は湊莉 零斗と言います、こちらは南雲 ハジメ……君の名前は？」

名前……名前はなんだつけ？思い出せない。自分が誰なのかすらわからない。ただ一つだけわかることがあるとすれば自分の名前が嫌いだという事だけだ。

「……ユエ」

咄嗟に出た言葉がこれだった。この名前は嫌いだけど何故か口に馴染んでいる気が



する。

「そっか、それじゃあ改めてよろしくねユエ」

そう言つてハジメがまた優しく頭を撫でてくれる。なんだろう、凄く落ち着く……。

「さあご飯にしましょう。お腹空いたでしょう？」

そう言われれば確かに空いているかもしれない。少し恥ずかしかったけど小さくコクンとうなずいた。それから私は色々なことを聞いた。どうして倒れていたのかとか、親はいないのかとか色々聞かれたが覚えていなかった。

「それは困りましたね……」

零斗と名乗った男は難しい顔をしている。何かを考え込んでいるみたいだが、それよりも今はご飯が食べたい。そんなことを考えているといつの間にか目の前には温かいスープが置かれていた。これは何という食べ物だろうか？見たことのない野菜が入っているが美味しそうだ。

恐る恐るスプーンを手に取り一口食べる……瞬間衝撃が走った！今まで食べたことがないほどに美味しい!!夢中でガツガツと食べていく。あつと言う間に無くなつていく料理に唖然としながらもおかわりを要求する。零斗は苦笑いを浮かべながらも新しいのを用意してくれた。これもまた絶品である。

「ごちそうさまー！」

出された食事を全て平らげてしまった。満腹感からか眠たくなってきた。ふわっと大きなあくびが出る。その様子を見て二人が笑っている。なぜ笑うんだろう？

「いっぱい食べられて偉いね」

「ええ、良いことです」

褒められた。よく分からないけど嬉しい……そのまま再び眠りにつく。次に目覚めた時、隣ではあの二人がまだ起きていて話をしていた。二人は私のことを心配してくれていたらしい。そういえば名前も教えてもらった。レイトとハジメだ。レイトは私を助けてくれて、住む場所を与えてくれた。ハジメは私が寂しくならないように一緒に居てくれると言った。その日から二人のことが大好きになった。

「おはようございませすユエさん」

朝起きるといつも最初に挨拶してくれるのがレイトだ。私が起きたことに気付くとすぐに部屋を出ていく。きつと朝食を作ってくれてるのだろう。その間私は朝の身支度をする。歯磨きをして、髪を櫛で整える。

「よしできました」

鏡の前でクルリと回ってみる。うん、今日もいい感じだ。

「朝ごはんができましたよ」

「わかった」

そう返事を返してリビングへと向かう。テーブルの上に並べられた食事を前にして座ると、自然と手を合わせる。

「いただきます」

まず初めにスープを口へと運ぶ。やっぱりすごくおいしい。次はパンを食べる。こつちもとても柔らかい。次の日も、また次の日も、毎日が幸せだった。でもたまに思うのだ……このままずっとここにいてもいいのかつて……。

ある日、私は思い切つて聞いてみた。どうして私を助けたのか？助けた理由は何なのかを。すると二人はお互いの顔を見合わせてから話し出した。

「ほんの気まぐれですよ。それに『助けて』と言われませんでしたからね」

「零斗がユエさんを連れて来た時は流石にびっくりしたけどね」

どうやら本当に偶然だったようだ。それでも嬉しかった。だって私の居場所ができたとような気がするから。それから私はレイトの手伝いをしたり、ハジメと一緒に出掛けたりした。街にも連れていってくれたりした。どれも初めて見るものばかりで楽しかった。そんな日々を過ごしているうちに半年が経っていた。私はもうすっかり元気になった。最初は喋れなかったけど今では普通に会話ができる。

ピンポン『零斗がいるー？』

「はいはい、今行きますよ」

玄関の方で声が聞こえる。誰かが来たみたい。家零斗が扉を開けるとそこには一人の女性が立っていた。綺麗な人だな……。

彼女はこちらを見ると驚いた表情で固まっていた。そしてゆっくりと近づいてくる。突然抱きしめられる。

「可愛い〜！ねえ、零斗！この子が話してた子？」

「そうです、ほら、ちゃんと自己紹介してください」

そう言われて彼女が離れる。少し名残惜しいと思ったことは内緒にしておこう。

「はじめまして！藤野 悠花だよ！よろしくね！」

そう言つて手を差し伸べてくる。握手というやつだろうか？とりあえず握ればいいんだよね？ 恐る恐る彼女の手に自分の手を重ねる。ギュツと強く握りしめられてブンブン振られた。ちよつと痛かった……。

今度はジロジロ見られている。なんだかくすぐつたい。そんな様子を微笑ましそうに見つめながらレイトが言う。

「それで？ 一体何の用ですか？」

「あつそうそう！ 忘れるところだった！ これあげる！」

そう言いながら何かを手渡してくる。これは……手紙だろうか。

「これは？」

「西園寺家が主催のパーティーがあるじゃん？その招待状」

「……そういえば刀華が言っていましたね」

パーティー？よくわからない。レイトは首を傾げる私を見て察してくれたようで説明してくれる。なんでも定期的に開催されるもので、普段会えない人達とも交流できる場らしい。

「はあ……面倒ですね」

「どうして？」

「……言い寄られる事が多いからですよ。それもかなりの量の人から」

「ああ……」

確かにそれは嫌かもしれない。せっかくの楽しい雰囲気壊したくないし。

「コエさんも来ますか？」

いきなり話をふられた。ううん、どうしようかな。でも行ってみたいな……。チラッと彼女を見る。するとニツコリ笑ってくれた。多分、一緒に行こうと言ってくれてるんだと思う。コクンとうなずくとレイトも笑顔になる。

「どうせならハジメも誘わない？いい気分転換になりそうだし！」

「なら白崎さん達も誘いましょうか……後々何か言われそうですしね」

「……そんなに同伴して大丈夫？」

「問題ありませんよ」

こうして私は初めてのパーティーに行くことになった。楽しみではあるけど、カオリも来るのか……ハジメから遠ざけ無いと取られちゃう。私のハジメに色目を使うのは許さない。

## 楽しい場にはトラブルが付き物

Side 零斗

パーティーの当日になって会場に向かう。もちろんドレスコードがあるので俺が全員分の服も用意した。ユエをはじめとした何名かは緊張している。

まあ、こういう経験はほとんどないだろうしな。

目的地であるホテルに到着して中へと入る。受付で名前と人数を伝えるとすぐに部屋番号を教えてくれた。事前に連絡を入れていたからだろう。

「それではごゆっくりお過ごしくださいませ」

そう言つてスタッフさんは頭を下げた。

「広いー」

部屋に入つて真つ先に声を上げたのは谷口鈴だ。確かに結構いい部屋だ。ちなみに今いるメンバーは俺、ハジメ、ユエ、柘人、恭弥、悠花、白崎、雫、園部、谷口、中村、清水、遠藤、そして東雲さんだ。刀華と鏡花は主催者側だから別の部屋にいる。

「……ん、すげえ」

「ここまで広いとちよつと緊張するわね……」

ユエや雫といった女性陣は部屋の豪華さに驚いていた。俺としてはこんなことには慣れている。

「開始までは時間がありますから、少しゆっくりしましょうか」

「そうだね」

荷物を置いてソファに座る。さすがに高級そうなだけあつて座り心地はかなりいい。

「にしても豪華な部屋だね」

「うん……私達なんかここに泊まってもいいのかしら？」

「大丈夫だと思えますよ？ 主催者の方達が用意してくれたみたいですからね」

「へえーじゃあ遠慮なく使わせてもらおうかな」

中村は呑気にそんなことを言っている。しかしこういった場に慣れていないせいなのかそわそわしっぱなしだった。

それからしばらくすると時間になったようでスタッフが呼びに来た。いよいよ始まるようだ。まず最初に挨拶が行われる。これは今回のパーティーの主催であり今回集まった面々を招待した本人でもある西園寺 宗治さんからだ。

「皆様本日はよくいらつしやいました。当方のオーナーを始め多くの方が出席しておりますのでどうぞ楽しんでってください」



続いて乾杯が行われてから食事が始まった。立食形式なので自由に食べたいものを食べられるようになっていた。

「美味しいー！」

「ほんと、どれも凄く美味しいですね」

女子達は料理に夢中になっている。その様子はとても楽しそうに見える。一方で男子連中はあまり会話には参加せずに食事をしていた。おそらくこういう場所に来ること自体初めてなんだろう。まあ、特に困っているわけでもなさそうだし放っておくか。あ、この肉料理上手いな。

「……………」

ふと視線を感じて顔を上げると東雲さんがこちらを見つめていた。目が合うと慌てて顔を逸らす。

「どうかしましたか？」

「いえ！ なんでもありませんっ！」

声をかけると慌てたように返事をした。やっぱりどこか様子がおかしい気がするが……。とりあえず今は目の前にある料理を楽しむことにした。

「お嬢ちゃん、おじさんと一緒にどうだい？ ……ヒック」

「……………私の連れに何か御用ですか？」

「うるせえな。ガキは引っ込んでろ」

「ほお？」

……早速酔ったオツサン共が絡んできた。しかも相手は東雲さんだ。

「貴方達、彼女は未成年ですからお酒は飲めませんよ」

「あア!? ? テメエ誰に向かつて口きいてんだコラ!!」

忠告してやったというのに逆ギレされた。本当に面倒臭い奴等だ。仕方ない……あまり騒ぎを起こす気はなかったがこうなつてしまえばもう関係ない。俺は席を離れて東雲さんのところへ向かう。そのまま、東雲さんの腰に手を回して抱き寄せる。

「ツ!!／／／」

突然の行動に驚いたのか東雲さんの顔は真っ赤になつていた。周りからはざわめきが起こる。そりゃいきなりこんなことをすれば驚くだろう。

「彼女は私の大切な人なので手を出すような事があれば……分かりますよね？」

威圧しながら告げると男達は顔を真っ青にしながら会場を出ていった。俺達の様子を見ていた人達は拍手を送ってくれた。一部から黄色い歓声も聞こえてくる。

「ありがとう湊莉君……」

「いいんですよ。それより大丈夫でしたか？」

「うん、おかげで助かったよ」

まだ頬は赤いままだが笑顔を見せてくれた。よかった。とりあえずこれで一安心だ。その後は特に問題もなく時間は過ぎていった。途中で何度かナンパのようなことがあつたが全て撃退している。

刀華を探しに会場を歩き回る……お、居た。宗治さんと一緒に来賓している人達と喋っている様だ。聞き耳を立てていると……

「いや〜それにしても刀華君は相変わらず美しいね」

「そんなことはありませんよ」

「またまた謙遜しないでください」

社交辞令の手本みたいな会話をしている。刀華はいつも通りだ。さて、そろそろ話しかけようと思つたところで一人の男が近づいていく。名前は忘れたがあの人もかなりの資産家だつたはずだ。男は馴れ馴れしく話しかけてきた。

何やら話をしているが内容はよく分からない。ただ、その表情から察するに相当下心があるようだ。

「ねえ、刀華ちゃん。この後二人で抜け出して飲み直さないかい？ もちろん奢るから」

「申し訳ございません。私はまだ仕事が残っておりまして……」

「いいじゃないか。たまには息抜きしないと疲れちゃうよ？」

しつこく食い下がる男に対して刀華は少し困り気味だった。助けに行くべきか迷ったがここで出て行けば余計ややこしくなるかもしれないと思いついて見守ることにする。すると次の瞬間、男の手が刀華の腕を掴んだ。そして強引に引き寄せようとする。

「きゃっ!」

流石に見過ごすわけにもいかなかったので急いで駆け寄るとその腕を掴んで捻り上げた。

「いでえ! なんだお前!」

「それはこつちのセリフですよ。嫌がつている女性を無理やり誘うなんて最低ですね」

「ぐう!」

「まあ、どうせ金目当てでしょうけどね。それなら他の女に声をかければいいものを」

そう言つて手を離すと男は逃げ去つていった。ふう、なんとかなつたか……。振り返つてみると刀華が目を丸くしていた。どうしたんだろうかと思つていると急に抱きしめられた。急なことに驚いていると刀華はそのままの状態で話し始めた。

「どうして来たんですか?」

「え?」

「私は一人で対処できると思つていましたが、まさかあんなことをされるとは思つていませんでした。だから、正直嬉しかったです」

そう言いながらさらに強く抱きついてくる。どうしよう。すごく可愛い。普段との

ギャップもあってかなりドキドキしてきた。しばらくすると満足してくれたのか体を放してくれる。それからしばらく談笑した後、部屋に戻った。

「ふー、今日は色々あったなあ〜」

ベッドの上で横になり今日の出来事を思い出す。パーティー自体は楽しめたし、まあ、ちよつとハプニングはあったが……でも、悪くない一日ではあると思う。

ハジメ達は大丈夫かな……と考へていると部屋の扉が開く……この部屋はカードキーが必要な筈なのだ。

(スペアキーはこのホテルの従業員達しか使用は出来ない筈なんだが……それに俺が入ったのが最後だったしカードキーも俺が持つているし……)

警戒しながらも起きているのを悟られないように寝たフリをかます。気配からして複数人でもしかかも男の様だ。ゆつくりと近づいてきて俺を見下ろす形で立ち止まる。そのまま何かを話し始めた。

「おい、本当にやるつもりなのか？」

「ああ、せつかくのチャンスを逃す手はない。あいつは金持ちだしな」

「しかし相手は高校生だぞ？ 下手したら捕まるんじゃない……」

「大丈夫だ。いざとなったら脅せばいい。それに、もしバレても俺達がやったとは思われない」

……なるほど、大体理解した。要するに俺の事を誘拐するつもりらしい。ま、面白そうだし誘拐されてもいっつか！俺はそのまま眠りこけた振りをして男共の好きな様にさせる。道中扱いが雑だったので飽きたらぶっ殺す……ぜってえ殺す。

## 連れ去れた先は

Side 零斗

車に乗せられてから数時間後、ようやく目的地に着いたのか車が止まった。男共に担がれ外に出る。街外れの廃工場だった。中に入るとそこには数人の男がいた。その中の一人に顔を見たことがある奴がいる。確か……刀華に絡んでた痛いオツサンじゃねえか。そいつはニヤリと笑うと話しかけてきた。ちなみに今の俺の状況だが、両手両足をそれぞれ縛られていて身動きが取れなくなっている。

「よお、起きたみたいだな」

「貴方は……刀華に絡んだ人ですか」

「へえ、覚えていてくれたんだ。嬉しいね。さて本題に入らせてもらおうかね」

そう言う懐からナイフを取り出して見せつけてくる。男は笑いながら続ける。その目はまるで獲物を見つけた獣の様にギラついていた。男は口を開くととんでもない事を言い出した。

こいつは刀華を自分の物にしたいから邪魔者を排除したい。そのためにまずは刀華の父親である宗治さんから潰すことにした。そのついでとして俺が狙われたと言うわ

けだ。

つまり、今から行われることはただ一つ。刀華を手に入れるためだけに誘拐したということだ。男は舌舐めずりをしながら近づいてきた。そして、いきなり顔を殴りつけてきやがった。衝撃で床に転げ回ると今度は腹を思いつきり踏みつけられる。

「ぐっ！」

「ハハッ！ いいザマだな！ あの女もこのぐらい無様なら良かったのに！」

「……（こんな感じの反応でいいのかな？）」

「お？ なんだその目つきは！ 気に食わねえな！」

「ぐっ！（お気に召した様で……）」

その後も何度も殴られ蹴られる。まあ、確かにこれはキツイ。普通なら泣いて許しを乞うレベルだろう。だけど、残念なことに俺は普通の人間じゃない。だから、この程度ではなんとも思わない。むしろ、これから起こることを考えるとワクワクしてくる。

しばらくして男が息切れを起こし始めると他の連中に指示を出す。すると一人の女が現れた。

「はい、これ飲んで」

「んぐっ!?!」

女は錠剤の入った瓶を取り出すとそれを口に突っ込んできた。吐き出さないように



口を塞がれる。そして、無理やり飲まされた。飲み込んだことを確認すると女は離れていった。

それからすぐに変化は訪れた。全身の血流が激しくなり、心臓の動きも早くなる。体が熱くなり呼吸は荒くなる。頭の中で何かが弾ける様な感覚に襲われる。

(媚薬……いや、興奮剤の一種か)

どうせそんなところだろうと予想していた通りだ。しかし、この程度では俺は屈しない。と言うか効果が薄すぎて最初の一瞬だけの衝撃で終わってしまった。

「なんだお前？」

「……………」

「チツ、無視かよ。おい、もう殺してもいいぞ」

(えー、マジかよ)

思わず心の声が出そうになるがなんとか堪える。しかし、それを聞いた男達は俺の体を蹴り飛ばし始めた。

面倒なのでされるがままにしておく。

「おい、何黙ってんだよ」

「どうした？ビビッてんのか？」

(うるさいな、少し静かにしてくれ)

「おい、何とか言えよ」

「あ、はい」

「「……………は？」」

腕を縛っていた縄を引きちぎり、男の一人の胸ぐらを掴むと思いい切り引き寄せて顔面に拳を叩き込む。そのまま倒れこむ男の頭を掴んでもう一人に叩きつける。二人同時に倒れると今度は近くにいた女の髪を鷲づかみにして持ち上げる。そのまま壁に思いきり投げつけた。

轟音と共に壁が崩れ落ちる。俺はゆっくりと立ち上がると残りの男達を見据えた。男達の表情には恐怖の色が見える。俺は笑っていた。楽しくなってきたからだ。

「ヒッー」

「くそっー」

男達が襲いかかってくる。それを全て捌いて反撃する。一人、また一人と地面に転がっていく男共。残り一人になったところで一旦距離を取ると最後の男は懐から銃を取り出した。

「死ねやクソ野郎!!」

「それは無理だね」

「なにい!?!」

引き金を引く前に銃身を掴みそのまま握りつぶす。そして、もう片方の手で相手の首を掴んだ。ギリギリと締め上げていく。

「かつ……は……」

男は苦しうにもがくが全く抜け出せない。やがて、意識を失った。手を離すとその場に崩れ落ちた。ふう、と一息つくと周りを見る。全員気絶しているようだ。

「さてと、ここからどうやって逃げようかな」

とりあえず辺りを散策することにした。まず最初に見つけたものは扉だった。鍵がかかっていたが力づくでぶち壊す。

「ここは……倉庫みたいな場所だな……フア!?」

中に入るとそこには大量の武器が置いてあった。ハンドガンからロケットランチャーまで様々なものがある。その中で使えそうなものを探すことにした。しばらく探っていると、奥の方から物音が聞こえてきた。

「誰かいるのかい?それともネズミかな?まあいいさ、どちらにしても始末すればいいだけだしねえ!」

声の主は女性だと思われる。しかもかなり若い。おそらく二十代前半といったところだろうか。俺は急いでその場を離れることにした。だが、遅かった様で女はこちらに向かってくる。手にはショットガンを持っていた。

「あれえ、君誰だい？どうしてこんなところに居るんだい？」

「……」

「まあいいやあ！見られた以上は生かしちやおけないし、ここで死んでもらうよお！」

女は問答無用で発砲してきた。俺は横に飛んで避ける。女はそのまま連射してくる。俺は避けながら考える。

（武器はあるが使えるかは分からんな……なら、逃げるしかないか。だがどこへ？）

考え事をしながらも回避し続ける。女はニヤリと笑うとさらに加速して距離を詰めてくる。

「ほら、ほらほらほら!?そんなもの!？」

「ちっ」

舌打ちしながら攻撃を避け続ける。そして、隙を見て一気に後ろに下がる。すると、女は追いかけてようとしてくる。その瞬間、近場にあったM1911を手取る。そして、素早く構えるとトリガーを引いた。

乾いた破裂音を響かせて弾丸が発射される。女は咄嗟に反応したが、間に合わず肩を撃ち抜かれた。よろめきながらも後退していく。

「ぐあつ……うつ……このガキイイ!!絶対に殺してやる!!」

（まだ元気があるのか）

付き合っていていられないので、マガジンを抜き女に投げる。すると、見事に命中して倒れた。

「あがつ!？」

(よし、今のうちに逃げないと)

M1911を拾い上げると走り出す。後ろからは女の怒号が聞こえるが気にしない。とにかく今はここから離れることが先決だ。途中でバイクを見つけたので拝借することにする。エンジンをかけて走らせること数十分、ようやく家が見えてきた。

「ただいま戻りました」

玄関を開けるとリビングからハジメ達が出てきた。心配していたのか泣き腫らしたような目をしている。俺の姿を見ると抱きついてきて涙を流した。

「ごめんなさい、私のせいで」

優しく頭を撫でて落ち着かせる。それから事情を説明すると全員がホツとした表情を浮かべた。

その後は警察に連絡したり色々大変だったがなんとかなった。ちなみにあの男達は指名手配されていたらしく、後日捕まったらしい。

## 特別編：バレンタイン（戦争）

S i d e 零斗

「……よし、完璧！」

机に置かれた大量のチョコレート菓子を見て呟く。今日は2月14日……そうバレンタインである！そして机にあるチョコは全て手作りである。普通はもらう側なんだから、俺はもらう側では無く、あげる側だと思っている。

「さて、後は袋詰めだな……」

少し大きめの紙袋に丁寧に詰めていく。こういうのって結構楽しかったりするんだよね。そんなことを考えながら作業をしているとあつという間に終わってしまった。

「ふうー」

一息ついて時計を見ると時刻はすでに午前6時になっていた。そろそろ学校に行く準備をしないとな。

「おはようレイト……それなに？」

「おはようございますユエさん、これは『チョコレート』と言うお菓子ですよ。食べてみますか？」

ユエの質問に対して余ったもの一つ差し出す。すると彼女はそれを受け取ってまじまじと見つめたあと口に入れた。その瞬間彼女の目が見開いた。どうやら気に入ってくれたみたいだな。

「『零斗くん！ これ！』」

「ありがとうございます。では私からも……どうぞ」

「『ありがとうございます！』」

（早速かあ……）ドサドサ

下駄箱を開けると大量のチョコやクッキーなどが入っていた。まあ予想通りだけどね……。とりあえず教室まで持っていこうかな。

扉を開くと同時に一齐に視線が集まる。うん、もう慣れましたよこの感じ。席に着くなり山のように積まれているチョコが目に入る。やっぱり多いなと思うつつ自分の鞆からラッピングされた包みを取り出して机の上に置く。

それからも続々とクラスメイト達が俺の前に来てはお礼を言いながら置いていく。正直こんなにももらえるとは思っていなかったんだけど……。でも嬉しいことに変わりはしない。

昼休みになるといつものメンバーが集まって昼食を食べることになったのだが、そこ

でもまた多くの女子達に囲まれた。

「はい零斗君、私の気持ちです♪」

「えっと……ありがたくいただきます」

突然目の前に現れた女子生徒達からのプレゼントを受け取る。中身を確認するとそこには可愛らしい猫の形をしたクッキーがあった。恭弥達にも渡すと早々とその場を後にする。

その後もたくさんの人達に囲まれる中なんとか時間を見つけては一人一人の対応をした。もちろん全員分あるわけじゃないし、中には義理だとわかっているものもある。それでもやはり嬉しく思うものだ。

放課後になり、ようやく解放されたと思つた矢先だった。廊下に出ると数人の男子生徒が待ち構えていたのだ。

彼らはニヤリとした表情を浮かべるとこちらに向かって歩いてきた。嫌な予感しかないんですけど？ そのまま彼らに連れられてやってきた場所は体育館裏だった。

「おいお前、なんであんなにもらつてんだよ!? ? 俺たちにも寄越せ！」

「そうだよ！ 不公平じゃねえか！」

はい出た出ました定番中の定番セリフ。本当にいるんだなこういう奴らは。

しかもこの人数だし……多すぎないか？ 周りには20人くらいだろうか？ 同じ



学年の生徒だけではなく上級生らしき人もいる。よく見れば、風紀委員長様までいるじゃないか。何してんすかあんだ……

そんなことを思いつつも顔に出さずに答える。だってここで断つたりしたら後々面倒なことに巻き込まれるかもしれないじゃん。それに今年はまだいい方だよ？ 去年のこの時期なんてもっとすごかったんだからさ。そんなことを考えながらも彼らに向き直った。

「これは私が貰った物なので、貴方達に渡すことは出来ませんね」

「うるさい！ 黙れ！」

……あれえ？ おかしいな。ちゃんと答えたはずなのに怒られちゃいましたよ？

「先輩達は知らないと思いますけど、こいつは女たらしで有名なんですよ！ だからきつと今までたくさん貰ってきたんでしよう！ そうに違いない！」

うわあ……すっごい偏見だなお前ら。まあ間違つてはいないんだけど……すると今度は風紀委員の人が話しかけてきた。確か名前は……忘れた。彼は眼鏡をクイッと上げると口を開いた。そして一言。

「零斗くん、君はバレンタインデーに女性に贈り物をする意味を知っているかい？」

「確か……『あなたと同じ時間を歩みたい』という意味……ですよね？」

バレンタインに贈るものによつて意味があるというのは有名な話だ。例えばババレ

ンタインに薔薇を贈るのは告白の意味もあるとか……他にも色々あった気がする。ちなみに俺はそこまで詳しいわけではない。

「その通り。そしてそのチョココレートを君に渡しているということはどういうことかわかるよね？」

「……」

「つまりそういうことだ」

「……はい？」

「「「「リア充爆発しろお——！！！！」」」」

その瞬間一斉に襲ってくる男たち。どうやら彼らの目的は俺に嫌がらせをして憂さを晴らすことだったようだ。確かに毎年のことではあるが、これだけの量があると少しだけイラついてしまう。特にあのクソ野郎のせいで。毎年マウント（負け惜しみ）を取ってくるからね……面倒なことこの上ない。

「はあ……仕方がないですね」

襲いかかる男達を軽くあしらいながら呟く。正直あまりやりたくないのだが……これ以上被害が出る前に終わらせるか。

「まったく、ひどい目に遭いました……」

結局全員返り討ちにしてやったぜ。しかし、まさか全員がかりで来るとは思わなかった。それほどまでに恨まれてるのか？ まあどうでもいいけどね。

「やっど……見つけましたよ……湊……莉……くん」

突然声をかけられて振り返るとそこには息を切らしながら立っている東雲さんがいた。彼女はゆっくりと近づいてきて、目の前に立つと大きく深呼吸をした。

「どうしましたか？ 何か用ですか？」

「これを渡しに来ただけです！」

彼女が差し出したのは綺麗にラッピングされた包みだった。

「これは私が作ったクッキーです。よかつたら食べてください。それでは私はこれで失礼します」

それだけ言うと足早に立ち去っていった。その後ろ姿を眺めながら、彼女のくれたお菓子を見つめた。包みを開けると中には可愛らしい猫の形をしたクッキーが入っていた。

「……美味しい」

サクツとした食感と程よい甘さが口に広がり思わず笑ってしまった。しかし、なぜだろう。心が温かくなっていくような感覚になる。

「ありがとうございます。東雲さん」

1人の少女に感謝の言葉を口にする。

## 湊莉さんちの今日のご飯

Side 零斗

「ぶりと鮭を四切れください」

店員さんにそう告げると、彼女は手際よくそれをパック詰めしていく。そして会計を終えて店を出る。その足でそのまま家へと向かい歩き始めた時だった。

「あれ？ 湊莉君？」

聞き覚えのある声がして振り返る。するとそこには……

「東雲さん、こんにちは」

東雲さんがいた。

「お買い物ですか？」

「はい。ちよつと夕飯の買い出しです」

「そうなんですか」

そんな会話をしながら二人で並んで歩く。なんだか不思議な感じだなあ……まさかこんなところで会うなんて思わなかったし。

「あのー……」

「はい?」

何か言いたげにしている東雲さんに首を傾げる。一体どうしたんだろうと思っていると、意を決したように口を開いた。

「私に料理を教えてください!」

突然の言葉に思わず固まってしまう。どういふことなのか分からず困惑している僕を見て、慌てて説明を始めた。

「えっと、自炊するにもレパートリーが無くてですね」

「なるほど、その為の料理を教えてくださいと」

コクリとうなずく彼女を見ながら考える。別に教えることは構わないんだけど……ちらりと横目で彼女の方を見る。いつものようにニコニコとした笑顔を浮かべているけど、どこか不安そうだ。うーん……まあ、いいかな。断る理由もないし。

「いいですよ、私なんかで力になれるなら……ね」

僕の返事を聞いた瞬間、ペアツと表情が明るくなった。

「ありがとうございます! よろしくお願ひしますね!」

「では、早速私の家に行きましようか」

「え!?今からですか!」

「思い立ったが吉日……ですよ」

東雲さんの手を引き、家へと向かう。最初は戸惑っていた様子の東雲さんだけど、すぐに楽しいな雰囲気変わった。うん、やっぱりこの子は笑っている方が可愛いと思う。

家に着いて中に入るよう促す。しかし彼女は玄関の前で立ち止まってしまった。

「どうかしましたか？」

「いえ、その……本当にここで合ってますよね？」

「はい、合っていますよ？」

「とても学生が買えそうに無い大きさの家なんです……」

「FXと株で儲かっているのだからこのくらいはちよつとした出費ですよ。名義は宗治さんですけどね」

苦笑いしながら答える。実際問題として、今の僕はお金には困っていないのだ。むしろ使い道が無い分余らせてしまっていると言ってもいいだろう。

そんなことを考えながら家の鍵を開ける。

「とりあえず入ってください」

「はい……って広っ!!」

家に入った途端大声で叫ぶ東雲さん。確かに広いかもしれないけれどそこまで驚くようなことでもない気がするんだけど……

リビングまで案内してからキッチンの方へ向かう。さて、何を作ろうかねえ……鮭の幽庵焼きにすつか。

説明しよう! 『幽庵焼き』とは、柚子風味のたれにつけ、香ばしく焼き上げた一品。おせち料理の焼き物には、鮭やぶりのように、「上る魚」や「出世魚」をどうぞ。

あと味噌汁でも作れば良い感じになるんじゃないだろうか? そんなことを考えている間に東雲さんの方は準備を進めていたようだ。エプロン姿になった彼女がこちらに向かって話しかけてきた。

「それで私は何をすればよろしいでしょうか?」

「まずは手を洗ってきて下さい」

「了解致しました!」

元気の良い子だなあ。そんなことを思いつつ冷蔵庫の中から必要な食材を取り出していく。東雲さんの準備が終わったところで調理開始である。といってもそれほど難しい作業があるわけでもない。

「まずは……鮭は食べやすい大きさに切る。バットに塩を薄くふり、鮭を並べて上にも薄く塩をふり、10分間おく……この合間に後で塗る柚子ダレを作っておくと後々楽に



なります」

「ふむ、ふむ……」

包丁を手に取り手早く切り分けていく。その様子を見た東雲さんが感心するように呟いた。

「置いておく間に他の物も作ってしまいませんか」

「はい！」

「フッフ、やる気十分ですね」

さて、次はすまし汁だな。冷蔵庫から鶏むね肉を取り出す。皮を取り、肉の部分は適当なサイズに削ぎ切りにする。

鍋に鶏肉とたっぷりの水を入れて火にかけ、沸々としてきたら弱火で蓋をして10分程煮る。

煮ている間に大根・人参は7〜8mm厚のいちよう切り。白菜は芯は削ぎ切り、葉はざく切り。椎茸は5mm厚。いんげんは斜め細切りに切る。

鍋の方を見ると良い感じに煮立ってきている。そうしたら、一度鶏肉を取り出して灰汁やカスを取り除き、鶏皮と大根、人参、白菜の芯を入れて再び火にかける。

沸いてきたら残りの野菜と酒、醤油、塩を加えて野菜が柔らかくなるまで煮る。

「これですまし汁は完成です。そろそろ鮭の方も良さそうですね」

深めのバットに酒、みりん、醤油を入れ、柚子の汁を軽く搾る。そこへ水気を拭いた鮭を並べて柚子をのせ、表面にラップをぴったりとはりつけて7〜8分間つける。上下を返し、さらに7〜8分間つけて汁けをきる。柚子は取り除き、汁はとっておく。

「これで後は焼くだけです……ここまでで分からないことはありませんか？」

「大丈夫です。バッチリ理解できました」

「それは良かった」

そう言つて微笑んでみせる。すると何故か顔を赤くして俯いてしまった。どうしたんだらうと思いつつも仕上げに入る。

フライパンにサラダ油少々を中火で熱し、鮭を並べ、両面を焼く。余ったつけダレを大さじ3〜4加え、熱しながら全体にからめる。

「完成です」

「おお……美味しそうですね」

出来上がった料理を見て目を輝かせる東雲さん。その様子はとても可愛らしくて、思わず笑つてしまう。完成した料理をお皿に移し替えてテーブルへと運ぶ。

「ア、ア、ア、ア……疲れた……」

「お疲れ様です、ハジメ」

「どうして南雲君が!？」

声のした方を向くとそこには、ぐったりとした顔で立っているハジメの姿があった。

「まあ、困惑しますよね。ゲームのバグの修正をしていたんですよ」

「ゲーム……ですか？」

「ええ、ハジメのお父様はゲーム会社の社長なんですよ。ハジメはそのデモ版のバグの修正やプログラムの抜けている部分の補修を担っているんです。かくいう私も手伝いをしていてのですが……今日は特に大変だったみたいですね」

「で、でもなんで、湊莉君の家に？」

「私の家にも機材等があるんです。一応ハジメはヘルプとして呼びました……あ、ハジメ、ユエさんをお呼びできてください」

「わかった……」

そんな会話をしながら料理を並べる。東雲さんの方も準備を終えたよう席についたようだ。

俺達四人は手を合わせていただきますをする。そして俺は箸を手を取った。まずは幽庵焼きを一口食べる。うん、なかなか上手くできたんじゃないか？ 東雲さんの方はどうと…… 一心不乱に食べていた。

「んー！ この鮭おいしい！」

「喜んで貰えて何よりですよ」

「ん、ホントにおいしい……流石」

「ありがとうございます」

和やかな雰囲気の中食事を進めていく。東雲さんは本当においしそうにご飯を食べている。作った甲斐があつたな。

そんなことを考えながら食事をしていると、ふと視線を感じた。そちらを見てみると、東雲さんがこちらを見ていた。

「どうかしましたか？」

「いえ、あの……」

少し恥ずかしそうにモジモジとしている。何か言いたいことがあるのだろうか。

「何でもありません」

「そうですか……それなら良いのですけど。遠慮なく言ってくださいね」

「はいー！」

元氣よく返事をした東雲さんは再び食べ始める。その様子を見てから再び自分の分を食べる。うーむ、もう少しだけ柚の搾り汁入れても良さそうだな。

## はじめての……

Side ハジメ

カチツ……カチツ……カチツ……

時計の音がやけに響いている。周りの人の喧騒は絶え間なく続いているがそれ以上に時計の音が耳に入る。

「……」ドキドキ

僕は今、人生で一番緊張しているかもしれない。いや、もしかしたらこれからの人生でこれ以上の緊張感を味わうことはないかもしれない。それほどまでに僕の心臓はバクバクと煩いくらいに鼓動し続けている。

今日は待ちに待った日だ。僕にとつて一生忘れられない一日になるだろう。そう思うだけでまた更に心拍数が上がる気がした。

「ハジメ君！」

声をかけられて顔を上げるとそこにはいつも通り笑顔を浮かべた白崎さんがいた。少しだけ息切れをしているようで肩が大きく上下していた。

「ごめんね、待たせちゃたみたいで……」

「僕も来た所だから大丈夫だよ」

嘘である。本当は1時間前から待っていたのだけれどそんなことを言ったら引かれてしまうと思つたから咄嗟についた嘘だったのだがどうやらバレてはいないようだ。

そして彼女の服装は普段とは違ったもので淡いピンク色をしたワンピースを着ておりとても可愛らしいものだった。正直なところ似合いすぎていて直視できないレベルなのだがここで目を逸らすわけにはいかないと思いつき何とか視線を合わせることに成功した。彼女は顔を赤くして俯きながら口を開いた。

「えつと……その服可愛いつて思つてくれた？」

「うん！凄く似合つてるよ！」

思つたことをそのまま口に出すとさらに真っ赤になってモゴモゴし始めた。ああもう本当にこの人はなんなんだ!?こんな反応されたらこっちまで恥ずかしくなるじゃないか!!……でもまあそういうところが好きなんだけどさ。

それから二人で映画館に向かつて歩いていくことにした。道中会話はなかったけど別に気まずいとかじゃなくてお互い照れているだけだというのはわかつていた。だって隣にいる彼女がずっとニコニコしながらこちらを見つめてくるんだもの……

流石に耐えられないよね? 映画が始まるまでの時間はまだ結構あつたので適当にぶらつくことにしようと思つて歩き出した時、突然後ろから声をかけられた。

「ねえねえ、その彼女くそんな冴えない奴なんてほつといて俺たちとお茶しない？」  
「そーそー！俺らと遊ぼうぜく」

何ともテンプレートなナンパに遭遇したものである。僕は小さくため息をつくと思つて二人組の男を睨みつけた。すると二人は一瞬怯んで後退りしたかと思うとすぐに威勢を取り戻してきたようであり再び近づいてきた。

「おいお前今のため息は何だコラア!!」

「そーやって調子乗んのもいい加減にしとけよガキイ！」

僕は大きく深呼吸をして男たちに向き合うとはつきりと告げてやった。

「すみません。僕たちこの後予定があるのでお断りします」

これで引き下がってくればいいが多分無理だろう。それでも一応断れただけマシだと思おう。そう考えて立ち去ろうとした時、もう一人の男が殴りかかってくる姿が見えた。

「オラアツ!!」

(しまつ……)

思わず腕を上げようとしたその時、横から伸びてきた手が男の拳を受け止めた。

「暴力とは関心しませんね」

「零斗(くん)!!」

僕たちの目の前に現れて冷たい笑みを浮かべる零斗の姿があった。

「私の友人に手を出すとはいい度胸ですね」

そう言つて男の腕を掴む力を強めると男は痛そうな表情を見せた後、舌打ちを残してその場から走り去つて行つた。残されたもう一人もその後を追いかけるようにして逃げていった。

「怪我はありませんか？」

「僕はないよ」

「私も大丈夫」

無事なことを確認すると彼はホツとしたような顔になつた。

「どうしてここに？」

「刀華とデートしていた所だったんですよ。それで、偶然近くを通りかかったんですよ。そうしたらあなたたちが絡まれていたので助けに入ろうと思つたのですが……」

そこで言葉を区切ると今度はニヤリとして続けた。

「必要なかつたみたいですかね？」

「どうやら最初から見ていたらしい。」

という事は先程のやり取りも見られていたのか……。なんか急に恥ずかしくなつてきたぞ。白崎さんの方を見ると顔を真っ赤にして俯いていた。そんな僕らを見て何を



思ったのか、零斗がとんでもない事を言い始めた。

「デート楽しんでくださいね……では失礼します」

それだけ言うのと踵を返そうとしたので慌てて呼び止めようとするがそれよりも早く彼が言葉を続けた。それはまるで僕たちを揶揄うかのような口調だった。

——ごゆつくりどうぞ。

そんな捨て台詞を残していくとそのままどこかへ行ってしまった。僕たちはしばらくその場で固まっていたが、このまま突っ立っている訳にもいかなかったのでとりあえず移動することにした。

映画を見る前に軽く食事を済ませようとレストランに入ったのだが、店内に入ると何故か僕たちに視線が集まっている気がした。特に女性からの。そしてその原因は隣の白崎さんにあることは間違いないだろう。彼女の容姿は誰が見ても整っていると言えほど綺麗なものだし、そんな人が隣にいたら誰だって見てしまうはずだ。

「ハジメ君どうしよう……」

「えっと……どうって言われても僕にはわからないかなあ」

ただでさえ緊張しているというのにこれ以上僕の精神を削らないで欲しい。それから席に着くまでの間ずっと視線を浴び続けていた。そしてようやく着いた時にはもう精神的疲労感が半端じゃなかったので、食事中くらいは忘れたいと思いき無心になって食

べることにした。

(ねえねえ、あそこの二人なんかいい感じじゃない?) ヒソヒソ

(初々しいねえ……男の方もすごいイケメンで訳じゃ無いけど、優しそうでいいわね  
!) コソコソ

……恥ずかしいよ、しかも前の席に座ってる白崎さんからの視線が痛いよ。食べ終わる頃には視線も感じなくなっていたので一安心した。

「美味しかったね!」

「そうだね。また来ようか」

「うん!」

満面の笑顔を浮かべる彼女に癒されながら映画館へと向かって歩いていく。映画館の中へ入るとチケット売り場には長蛇の列ができており、受付のお姉さんの目が死んでいた。

「うわあ……凄い人だかりだなあ」

この様子だと入場するまでにかなり時間がかかりそうである。

「ん? ハジメ?」

「あ、柊人さん」

声をかけられたので振り返るとそこには私服姿の柊人と悠花さんがいた。

「こんなところで会うなんて奇遇だね」

「本当ですね。お二人はこれから映画ですか？」

「うん、そうなんだけど……チケット取るまでに時間掛かっちゃうかな……」

これだけ並んでいるとなかなか進みそうにもない。

「なら私達のチケットあげるよ！」

唐突にそんな提案をしてきたのは意外にも悠花さんだった。いや待つて？いきなり過ぎて理解追いつかないんですけど？

「いや、チケット買ったのは良いんだけど……私達、恋愛系の映画あんまり好きじゃない……だから、いつその事ハジメ達に譲ろうかなって」

ポリポリと頬搔いて照れくさそうにはにかむ悠花さん。その仕草はとても可愛らしくて思わずドキツとする。

「ハジメ君？」

「ひゃい！なんでしよう！」

白崎さんに突然名前を呼ばれて変な声が出てしまった。彼女は少しムスツとした表情になると僕を見つめてきた。

「何か別のことを考えてたの？」

「ソ、ソンナコトナイデスヨ！」

それにしてもこういう時の彼女から放たれるオーラは何と言うか……上手く言えないがとにかく怖い。そうして僕が冷や汗を流していると今度は終人がニヤリと笑いながら口を開いた。

「カップルの痴話喧嘩みたいですね」

「ち、違うよ!!」

見事にシンクロしてしまった。

「フフフ……ではデート楽しんでくださいね」

そう言い残すと二人はさつさとその場を離れて行ってしまった。残された僕たちの間に何とも気まずい空気が流れる。そろそろ上映時間が迫ってきているので僕たちも早めに移動した方が……

そう思い歩き出そうとした時、服の裾を掴まれた。振り返ると白崎さんが小さく呟く。

「手、繋がらない?」

上目遣いで言われたせいで一瞬思考停止してしまう。そしてすぐに再起動すると慌てて返事をした。

「え!?ば、僕なんかで良ければ……」

「ありがとう」

そう言って微笑みかける彼女の手を恐る恐る握る。女の子の手を握るのは生まれて初めてなので妙に緊張する。しかし、それに反して彼女の方は随分と落ち着いているように見えた。

(あれ?もしかするとこれって僕だけ意識しすぎなのか?)

そんな疑問を抱いているうちに上映場所に着いた。周りを見ると席はほとんど埋まっており、やはり人気作品なのだ実感させられる。場内が暗くなりスクリーンに映像が映し出される。

「なんかドキドキするねー!」

「う、うん……そうだね」

正直、僕はもう心臓バクバクである。そんな僕とは対照的に白崎さんはとてもリラックスしており、まるで最初からこの映画を楽しみにしているようだった。映画の内容はよくある学園ラブコメもの。

主人公は授業では寝てばかりで不真面目、でも人一倍優しい少年、そんな彼に恋する文武両道で才色兼備の少女……といった話だった。

映画の中でヒロインの少女がある事件に巻き込まれる。少女の幼馴染が主人公と少女の関係を嫉妬して、事故に見せかけて主人公を殺そうとするのだ。もちろん主人公は死ぬはずもなく、逆に返り討ちに遭ってしまう。

そして少女は主人公の優しさに触れ、彼に好意を抱くようになる。だが、同時に彼への罪悪感もあり葛藤していた。

そして最後の選択を迫られたとき、少女は選んだ。自分の想いを貫く事を……。そこでエンドロールが流れ始めた。白崎さんの方を見てみると満足げな顔で画面を眺めていた。

「面白かったね!」

「うん、最後は感動したよ」

「私も!」

お互いに感想を言い合いながら映画館を出る。時計を確認するともう夕方になっていたので今日はこの辺で解散する事にした。

別れ際に彼女が僕の方に向き直り真剣な眼差しを向けてくる。どうしたんだろうと思っていると、急に僕の右手が温もりに包まれた。驚いて視線を落とすと白崎さんの両手が僕の手を包み込んでいた。

「ハジメ君、私は貴方の事が「香織!こんな所で会うなんて偶然だな!」……光輝くん」

白崎さんの言葉を遮るように大きな声が聞こえてきたかと思うとそこには天之河光輝が走って寄ってきていた。容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能という完璧超人。その上性格まで良くて男女問わず人気がある。何故こんな所に……そう思っていると彼

は僕の存在に気付いたのか目を丸くして固まってしまった。

「南雲、なんでお前が香織と一緒に居るんだ！」

「いや、それはこっちのセリフだよ……」

どうしてこのタイミングで登場するんだよ。

「あ、あのね光輝くん、これは……」

白崎さんが何か言おうとした瞬間、彼の表情が変わった。

怒りに満ちたような鋭い目つき。

そして次の瞬間には僕に向かって殴りかかってきた。突然の出来事に反応できず殴られそうになったその時、横から伸びてきた手が拳を受け止めた。

「まったく……いきなり暴力とは関心しませんね」

「邪魔をするな！ 恭弥！」

「そうはいきません。彼は私の大切な友人ですから」

そう言つて恭弥さんはニツコリと微笑むと、天之河君の腕を掴み軽々と投げ飛ばした。

「ぐあつ!？」

「さて……これで少しは冷静になりましたか？」

「チツ……覚えてろ！」

そう言うのと倒れている天之河君は走り去って行った。

「全く騒々しいですね。大丈夫ですか？」

そう言うて手を差し伸べてくれる恭弥さん。僕はその手を掴んで立ち上がる。改めてお礼を言うのと彼は首を横に振った。

すると今度は白崎さんが申し訳なきような表情をして頭を下げてきた。

「ごめんなさい、私のせいで迷惑をかけてしまつて……」

「い、いや別に白崎さんのせいじゃないよ。悪いのは明らかに向こうだし」

暗い表情になる白崎さん。いつも明るい彼女からは想像できない表情だった。こういう時はどうすれば良いのだろう。こういう時に限つて何も言葉が出て来ない自分が嫌になる。

「気にする必要は無いですよ」

そう言ったのは恭弥さんだった。

「え？」

「そもその原因は天之河君の勝手な行動が原因ですから」

「う、うん……」

穏やかな笑みを浮かべて語りかける恭弥さん。これが大人の余裕って奴なんだろう



か？ 恭弥さんの言葉を聞いて白崎さんは納得した様子だったが、何故か僕をじつと見つめて来た。そして唐突に口を開く。

「ねえ、ハジメ君」

「ひゃい！」

また変な声が出てしまった。恥ずかしさで赤面していると彼女は笑顔で口を開いた。

「また今度、二人でどこか遊びに行こうね」

「うん、そうだね」

二人きりで出かける約束を交わした僕たちは、それぞれの帰路についた。

『また今度』か……楽しみだなあ……」

帰り道で一人呟く。最近、僕は毎日が楽しい。学校に行つて、白崎さんと話して、零斗と恭弥に勉強を教えてもらつたり、柊人や浩介達も一緒にゲームしたり、刀華さん達と一緒に買い物に行つたりして……そんな日々がとても幸せだった。

でも、だからこそ思う。僕みたいな人間が零斗達みたいな人と関わつても良いのだろうか。もつと相応しい人が居るんじゃないだろうか。そんな事を考えてしまう。

白崎さんはきつと素敵な人だから、いつか誰かと付き合う事になるかもしれない。もしそんな事になったら、今の幸せな日常は消え失せてしまうのではないのだろうか？

そんな不安が胸を過る度に心に黒いモヤのようなものが広がっていく。

(駄目だ、今は考えないようにしよう)

余計な事は考えるな。白崎さん達との時間を楽しめばいい。それだけで十分じゃないか。

『本当にそれで満足なのか？』

そんな言葉が胸中に渦巻く。満足できるわけがない。だって、本当は……………

「みいーつけた」

「え？」

声が聞こえた方を向いた瞬間、僕の意識は闇に沈んだ。

## ゲトロロ！開けロイト市警だ！

Side ハジメ

気が付くと真つ暗な空間の中に居た。腕や足は拘束されている。上も下も右も左も全てが暗闇で塗り潰されている。ここは何処だろうと困惑していると急に目の前が明るくなった。

「あ、起きた？」

「……誰？」

そこに現れたのは一人の女性だった。見た目は二十代前半くらいに見える。顔立ちはとても整っており、スタイルも抜群だ。服装も露出の多いもので、目のやり場に困ってしまう。

「あ！今あたしの事エツチなお姉さんとか思ったでしょう！」

「思ってません!!」

「嘘つけっ、男なんて皆そういう目でしか女を見ていないんだからねっ」

そう言っつて頬を膨らませる女性。何なんだこの人は…… 状況が全く理解できない。

僕は確か……誘拐されたんだ。それなら助けが来るまで大人しくしていた方が良く

のでは…… そう考えていると女性はクスリと笑うと口を開いた。

「心配しなくても大丈夫だよ。君はもうすぐ自由になれるからね」

「どういう意味ですか?」

「そのままの意味さ。君には特に用は無いしね!用があるのは……君のお友達の湊莉零斗君だよ」

その名前を聞いた途端、心臓がドクンと大きく跳ね上がった。何故ここで彼の名前が出てくるのか。どうして僕を攫った女性が彼の事を知っていたのか。疑問が次々と浮かんでくる。

動揺する僕を見て彼女は愉快そうに笑った。すると次の瞬間、後ろの壁が吹き飛んだ。そこから姿を現したのは血塗れの零斗だった。突然の出来事に頭が付いて行かない。一体何が起きているというのだ? 混乱している間にも事態は急速に進行していく。

「また会えて嬉しいわ……クソガキイ!」

そう言いながらナイフを振りかざす女性。それを易々と避ける零斗。まるでアクション映画のような光景だった。しかし、その攻防は一瞬で終わった。

女性の腹部に蹴りを叩き込むと、零斗はそのまま彼女を壁に叩き付けた。あまりの衝撃に耐えきれなかった壁が崩れ落ちる。瓦礫の中から這い出てくると、先程までの余裕

のある表情とは打って変わって鬼のような形相になっていた。そして、懐から拳銃を取り出す。

「ふざけんなよテメエ……よくもこの私に恥をかかせてくれたなあ……ぶつ殺してやる!!」

銃口を向けて引き金を引く。だが、銃弾は全て空に吸い込まれていった。どうやら弾切れらしい。舌打ちをしながら別の武器を取り出そうとするが、それよりも早く動いた零斗によって女性は殴り飛ばされた。そして、倒れた彼女に馬乗りになって顔面に拳を叩き込んだ。

「ぐふう!?!」

鼻血を出しながらも必死に抵抗する女性だったが、圧倒的な力の差の前に為す術無く殴られ続けた。やがて抵抗を止めて無言になったところで零斗は立ち上がり、彼女の首根っこを掴むと無理矢理立たせた。

「どうした? 私を殺すのだろうか?」

今まで聞いたことの無いような冷たい声で呟く零斗。僕は恐怖で震えていた。このままだと零斗が人を殺めてしまうのではないか。そんな不安が脳裏に浮かぶ。

「こんばんわ〜京都府警察です」

そんな時、扉の方から声が聞こえてきた。薄い桜色の髪をした女性警官と大柄の男性

警官、ヘラヘラとして薄ら笑いをした男性警官が入ってきた。

「いや〜派手にやったねえ〜」

「こりやあ、現行犯逮捕だな」

二人の刑事は倒れている女性を見ると、すぐに拘束して連れて行った。残された僕達は事情聴取を受ける事になった。

「なるほど、事情はよく分かりました。ありがとうございます」

「いえ、こちらこそご迷惑をお掛けしました」

「まあまあ、無事で良かったですよ」

「ええ、本当に」

「……」

何とも言えない空気が流れる。あの後、僕は警察署へと連れて行かれた。そこで全てを話した後、解放されると思っていたのだが、何故かそのまま泊まる事になってしまった。

「とりあえず今日は遅いですし、お休みください。明日以降の事はまた追って連絡しますのぞ」

「はい、よろしくお願い致します」

(どうしてこんな事に……)

ため息を吐きたくなるのを抑えながら用意された部屋へと向かう。

「はー、疲れたー」

ベッドの上に寝転ぶと、一気に眠気が襲ってきた。明日からどうしよう……そんな事を考えながら僕の意識は深い闇の中に沈んでいった。



Side 零斗

「ハジメが誘拐された？」

『昨日から帰ってきてないの……警察にも連絡はしたんだけど……』

ハジメの母親からの電話を聞いて俺は耳を疑った。まさか、あいつに限って誘拐なんてされないだろうと思っ込んでいたからだ。

電話をしても繋がらず、スマホも道端に落ちてるのが発見されていたらしい。急いで警察に通報したが、既に犯人の姿は無くなっていたそうだ。恐らく俺の居場所を知っている奴の仕業だろう。チツ、面倒臭い事をしやがる。よりにもよって何でアイツなんだ…… 苛立ちを感じつつも冷静さを保つように自分に言い聞かせる。柊人に電話を掛け、ちよつとした頼みをする。

「柊人、都市部全体の防犯カメラをハッキングしてくれ」

『……ハジメの件？それならもう取り掛かってるよ』

「助かる」

これである程度の場所は分かるはずだ。後はしらみ潰しに探せば良い。電話を切り、今度は恭弥にかける。

「恭弥、ハジメが誘拐された時間から逆算して、どここの辺までなら逃走可能だ?」

『……県外だ、それも高速道路を使えばかなりの距離移動できる』

予想通りだった。もしも犯人が車での移動をしていた場合、その範囲はかなり絞られる。だが、そうすると疑問が残る。何故ハジメなのかということだ。身代金目的ならばもつと他に居るはずなのに。

「……とにかく今は動くしか無いな」

そう考え、バイクのエンジンを掛ける。そして、ヘルメットを被るとアクセルを回した。

『零斗、ハジメが見つかった……かなり遠くの方まで移動されてる。場所は——』

「そうか……分かった、今すぐ向かう」

バイクを走らせながら頭の中で作戦を考える。まず、今回の一件を引き起こしたのは間違いなくクソ野郎だろう。その目的は分からないが、ハジメは絶対に生きている筈だ。問題はどうかやって助け出すのか。

「……考えるだけ無駄か」



考えても仕方が無いので、ひたすらに走り続ける。

途中で終人から連絡が入り、場所を教えられた。その場所は山間部にある廃工場だった。目的地に到着すると、バイクから降りて中に入る。

「おい、ガキ……何の用だ？」

「お前、この前俺を攫った男の仲間だろ」

「ああ？ガキが何言ってるんだ？死にたいのか？」

「質問に答えろよ」

睨むと、男は少し怯んだ。だが、すぐに調子を取り戻す。そして、ポケットから銃を取り出して構えた。

「残念だけどなあ！テメエはここで死ぬんだよ!!」

引き金を引く。弾丸は真つ直ぐこちらに向かってくるが、当たる前に全て撃ち落としした。驚いた表情を浮かべた後、男はすぐに拳銃を投げ捨てると別の武器を取り出そうとする。しかし、それよりも早く懐に入り込み、腕をへし折る。

「ぐあ!!」

「悪いけど、死ぬ」

近くにあった、ガラスの破片で首を切る。血飛沫が上がり、辺り一面が赤く染まった。一先ずは片付いた。死体はそのまま放置してハジメを探す。探している間も何人か遭

遇したが、殺すか重症を負わせた。暫く進むと大きな倉庫を見つけた。中に入ろうとすると、扉の前に男が立っていた。こちらを視認すると、銃を構えて発砲してくる。それを難なくかわすと、すぐに蹴り飛ばした。

鍵のかかった扉を粉碎して中に入る。そこには以前、誘拐された時に会った妙に強かった女と縛られた状態のハジメがいた。

「また会えて嬉しいわ……クソガキイ!」

怒りに満ちた目をしながら向かってきたのを軽くいなす。そのまま顔面に拳を叩き込むと、壁を突き破って吹っ飛んでいった。トドメを刺そうとした時だった。

「こんばんわ〜京都府警察でーす」

突然現れた数人の警官が取り囲んできた。

(どうしてこうなった?)

俺は目の前の光景を見ながらため息を吐く。あの後、俺は事情を説明しようとしたが、何故か拘束されてしまった。そして、警察署へと連れて行かれた。

「君の名前は?」

「……零斗です」

「では、零斗くん。君は何をしたのかな?」

「誘拐された友人を助けに来ただけですが……」

「証拠は？何か持っているのかい？」

「……ありません」

俺が答えると、白髪交じりの男性刑事が机の上に置かれた写真を指差しながら説明を始めた……

「はい、そこまで」

「何ですか、藤田課長。これから重要な話をするところなんですが」

「分かってるよ。でも、そっちはもう終わってるんだろう？じゃあ、後はこっちの仕事だ」

「え？どういう事ですか？藤田課長」

俺を連行してきた刑事の一人が尋ねる。どうやら、この課で一番偉そうな人はこの人らしい。他の人達よりも若いのに凄いなあと思っていると、その人が口を開いた。

「あ、後君ら全員クビね。それとこれ逮捕状……理由は言わなくても分かるよね？」

「ま、待つてくください!!逮捕てどういことですか!？」

「だーかーら言つた通りだ。もう解決したから後は任せてくれつて」

「そんな無茶苦茶な……」

「さつきも言つただろう？これは僕の管轄だつて」

そう言うのと、その男性は俺の方に近づいてきて手錠を外してくれた。やっと解放され

ると思ひ、部屋を出て行こうとすると……後ろでドアが閉まる音がした。振り返ると、いつの間にか隣に居た男性に肩を掴まれる。そして、耳元で囁かれた。

「久しぶりだね。マスターちゃん」

おっとお? 嫌な予感がするぞお! とりあえず、その手を離してもらう為に振り払うと、今度は一緒にいた女性に両手で抱きつかれた。

「マスター……会いたかったです」

「ちよつ!?! 離れてください!!」

必死に抵抗するも、全く離れてくれない。それどころか更に強く抱きしめてくる。その時だった。

「まったたく君らは……やあ、久しぶりだね、マスターくん」

聞き覚えのある声に顔を上げると、そこには見知った人物が立っていた。

京都の街を一望できるホテルの最上階。そこに、俺達は集まっていた。あの後、俺は強引に連れて来られてしまった。そして、このレストランで食事をする事になり、今は料理を食べている最中である。

目の前にいるのは、腰まで伸びた長い髪と妖艶な雰囲気纏っており、まるで女神のような美しさを放っている。まるで一つの絵画の様な美貌だった。

「相変わらずだね君は……それで、あれ以来はどうしてたんだい？」

「別に何もしてませんよ。ただ普通に生活してただけですよ」

「嘘つき。本当は何かあつたんでしょ？」

「いや、本当に何も無いから」

疑いの目を向けるのは、かつて俺が働いていた場所の職員。俺を追つて来てらしい。彼女は俺が居なくなった後もずっと探してくれていたらしく、遂にはこうして再会してしまつた。正直あまり関わりたくない相手だが、色々と世話になつた手前、邪険には出来ない。

「それよりも、何故貴方達がここに居るんですか？」

「勿論、君に会うためさー！」

爽やかな笑顔を浮かべながらウインクをする。それに対して、俺は呆れたように息を吐く。すると、横にいた女性が少しムツとした表情をしていた。

「……私達の事は無視ですか」

「いや、そういう訳じゃないんだけど……」

「……いいでしょう。なら、私達と勝負をしましょう。勝つた方がマスターさんと一緒にお風呂に入る事が出来る権利を得ます」

突然とんでもない事を言われ、思わず咳き込んでしまう。しかし、二人は本気のように

で、お互いに睨み合っていた。

「いい加減にしてくれよ……沖田さん、ダ・ヴィンチちゃん……ストレスで胃に穴があくから」

そう言って俺は頭を抱える。そして、ため息を吐いてから二人を交互に見た。

「そもそも、なんで俺なんかの為にそこまで……」

「それは当然だろう? 君は私の大切な子なんだ。心配するのは当たり前じゃないか」

「そうです。それに、貴方が居ないと楽しくないんですよ」

「うーん、嬉しいけど複雑だなあ……」

そんな会話をしていると、突然背後から腕が伸びてきて抱きつかれる。誰かと思つて見ると……

「……先輩、私は寂しかったです……」

「マシユ!」

「はい、貴方の後輩のマシユ・キリエライトです!」

元気よく返事をした後輩は、そのまま俺の首筋に顔を近づける。そして、大きく深呼吸をして匂いを嗅ぎ始めた。混乱していると、今度は反対側からも抱きつかれた。そちらを見ると……金髪の少女が涙目になっていた。

「……ぐすつ」

「ええ!?ちよつ、キャストリア!?何やってるんだよ!」

「……だつて、久しぶりに会えたんだもん」

拗ねた様に呟いたキャストリアは、頬を膨らませてそつぽを向いてしまった。そんな様子に困っていると、また別の方向から声が聞こえてきた。

「あー!ずるい!!僕も混ぜてください!!」

「おいこら!抜け駆けするんじゃないぞ!マスター!オレも一緒に遊ぶぞおおおお!!!」

「お前らは黙つてろおおおおお!???」

# 説明を聞いては……ダメ?そう (泣)

S i d e 零斗

「ねえ、零斗」

「はい……なんでしょうか……」

「ハジメを助けるために一人で京都まで行って、誘拐犯を全滅させたらしいわね?」

まるで鬼のような形相で俺を見つめる刀華、今にも泣き出してしまいそうな東雲さん、ニツコリと笑っているが目が笑っていない零……やばい、これはべられるパターンだ。俺はこの空気から逃げ出したかったが、逃げる場所もないし、逃げればさらに状況が悪化するのには目に見えている。それに何より、刀華に嘘をつくことは絶対にできないとわかっているため、正直に話すしかない。

「……はい、一人でやりました」

「警察……に……任せれば良かったんじゃないの?」

「日本の警察は優秀ではありますが信用はありません。なので自ら動いた方が早いと判断しました」

日本は治安が良い方だが、それでも犯罪はあるし、事件に巻き込まれて死ぬ人もいる。



だからといって放置するわけにはいかない。その点に関しては、他の国でも変わらないだろう。

「……貴方、南雲くんを助けられたから万事解決……とでも思ってるんじゃないかしら？」

雫の言葉を聞いて思わずギクリとする。確かに、俺はそう思っていた。だがそれは間違っていたようだ。確かに今回に限って言えば、ハジメを助けたことで事件は解決したかもしれない。

「今回の件に関して言うなら、私は貴方の行動を認めることはできないわ」

「私も同じです！そんな危険なこととして欲しくなかった！」

二人の意見を聞きながら考える。確かに二人の言っていることも一理ある。

「……ごめんなさい」

ただ謝ることしかできなかった。二人の意見が正しいということは理解しているからだ。ただ自分の行動について反省するつもりはない。あの時はあれが一番最善だと今でも思っているからだ。

「……まあいいでしょう。今回は無事に終わったんだもの。それで？さつきから貴方に抱きついていてその女について話して貰える？」

「ん？私かい？……初めまして、私の名前はレオナルド・ダ・ヴィンチさ、気軽にダ・ヴィ

ンチちゃんと呼んでくれたまえ」

……はい、見た目は絶世の美女、中身はただのオツサンことダ・ヴィンチちゃんです。いやね、ハジメを連れて帰ってきた時にね、ついて来たみたいでね。

「湊莉くん……その人との関係を素直に答えて」

「し、東雲さん?」

「早く!」

貴方、そんなキャラだっけ? いつも優しい東雲さんがこんな剣幕になるなんて……ダ・ヴィンチちゃん、恐ろしい子! つーか、俺とダ・ヴィンチちゃんの関係ってなんだろうか? 仲間であり上司であるけど、家族という感じではないな……。じゃあ友人? 知り合い? うーむ……

「……二年ほど前にバイトで海外に行っていた時期があつたんですが、その時の職場の上司です」

正確には違うのだが、それを言ってもややこしくなるだけなので、適当に誤魔化すことにした。ちなみに、この時の三人の顔は忘れられないだろう。特に雫と東雲さんは般若のような顔をしていた。その後、なんとか落ち着いて話し合いが始まった。

「なるほど、事情はよくわかったわ」

「はい……」

「今後このような行動をしないと言うのであれば、この件については不問にしましょう」

こうして、何とかお咎めなしとなった。これからは少し気を付けようと思う。

「……じゃあ、海外でのバイトについて話して？」

「えつと……それはまた今度ということだ」

「駄目よ、今日中に話してもらおうわ。どんな仕事をしてたのか詳しく教えて教えてちょうだい」

くそう……許してくれると思つたらこれだよ。どうやらまだ怒ってるらしい。結局この後、俺は海外での仕事内容を説明する羽目になった。

「……主にダ・ヴィンチちゃんの助手をしていました……まあ、雑用係みたいなものでしたが……」

「……他には？」

「はい、現地の人達と交流したりしましたね。あとは、美術館の展示品を見て回ったりもしました」

思い出すと懐かしいな。まさかあんなところで再会するとは夢にも思わなかった。それにしても雫達の雰囲気が変わった気がする。なんかこう……殺伐とした雰囲気を感ずるのだ。まるで戦場にいるような感覚に陥る。

「ダ・ヴィンチさん、貴方の職場って何処ですか?」

「そうだね……芸能事務所アヴァロンさ」

その名前を聞いた瞬間、雫と東雲さんの表情が変わる。そして二人は同時に口を開いた。

「アヴァロン!?!」

「おや? 知っていたんだね」

「はい! 日本でもかなり有名ですよ!」

「彗星の如く現れて、世界中の人達を魅了するアーティストが多く所属する事務所ですよね!」

二人とも興奮気味に話す。それほど有名なところなのか。そういえば、以前テレビで見たことがあるかもしれない。確か日本には撮影に来てんだっけ?

「へえ、そうなのかい。私はあんまり興味なかったからねえ」

「でもどうして日本に来ているんですか?」

「零斗くんに会いに来たんだよ。ついでに観光しようと思ってね」

ん? ちよつと待ってくれ、なんで俺の名前が出てくる? 俺はダ・ヴィンチちゃんの言葉の意味がわからず首を傾げる。だが、雫と東雲さんはその言葉を聞いてさらに驚いた様子だった。

「……ちよつと待つてください、私に会う為だけに来たんですか？」

「まあ、そうだね。会うだけが目的では無いけれど……ね」

そう言うどダ・ヴィンチちゃんは俺の方を見る。俺は嫌な予感しかしなかったので、目を逸らす。

「君にも会いたかったからさ」

そう言つて俺の肩に手を乗せる。俺はその手を払い除けた。

「……気持ち悪いんでそういうこと言わないで下さい」

「つれないなあ、私は本心で言っているのに」

そんなこと言われても全く嬉しくない。むしろ鳥肌が立つ。そんな会話をしていると、突然部屋の扉が開く。そこには白髪で隈のこい男が立っていた。

「やつと見つけたぞ、レイト」

「カドック……」

目の前に現れた男の名はカドック。フルネームはカドック・ゼムルプスという。この男は天才的な頭脳を持つ魔術師であり、元同僚だ。

俺はカドックと目を合わせると、ため息を吐きながら話し掛ける。

「何しに来た？」

「仕事だ。お前を探していたのもそれが理由だ」

「はあ……もう少し普通に現れてくれないか?」

一応、今は一般人として過ごしているのだから、もっと気を使って欲しいものだ。まあ、無理だろうけど。

「……頼むから仕事手伝ってくれ、俺達じや収集がつかない」

カドツクは疲れ切った顔をしながら言った。相当苦労しているようだ。

「……はあ、バイトという体なら構いません。ダ・ヴィンチちゃん、俳優メンバーのリストと予定表の一覧を今すぐに持ってきてください」

「任せたまえ!」

ダ・ヴィンチちゃんは勢いよく返事をして部屋から出て行った。

「助かる、本当にありがとう。……それで、そっちの人達は誰だ?」

「ああ、紹介していませんでしたね。私の友人の八重樫雫と、東雲 一花さんです」

俺は二人に挨拶するように促す。雫達は恐る恐るといった感じで自己紹介した。その後は、雫達がカドツクに質問攻めにされ、答える度に呆れた顔をしていたので、少し同情した。そして数分後……

「待たせてすまないね……これがご所望の資料だ」

「ありがとうございます」

俺はダ・ヴィンチちゃんから資料を受け取る。そこには今回の出演予定の役者の名前

が書かれていた。俺はそれを確認していく。

「……このメイク担当の方、解雇してください。裏で売春や児童ポルノ等の犯罪行為をやった人物ですから。それと、この人も解雇をお願いします」

俺は次々と指名していた者達をクビや昇給させていった。理由は簡単、信用出来ないからだし、裏の取れている野郎共だからだ、それに何人かは正当な評価を受けられていなかった。正直、芸能界なんてろくでもない人間の巣窟と言っても過言ではないと思っている。しかし、俺の考えとは裏腹に、カドツクは感心したように呟いた。

「……相変わらず凄いな。俺はこういう世界には疎いからわからないが、これ程までの確に指示できるものなのか？」

「……別に大したことじゃないですよ」

ただ、俺は知っているだけだ。

「……よし、これで大丈夫ですね」

「え、もう終わったのか？まだ全然時間あると思うんだが……」  
「いいんですよ。どうせ暇潰しみたいなものですから」

俺はそう言って席を立ち上がる。その時、ダ・ヴィンチちゃんが何かを思い出したかのように声を上げた。俺はどうしましたかと聞くと、ダ・ヴィンチちゃんはニヤリと笑みを浮かべて言う。

「そうだ! 零斗くんにお土産があるんだよ!」

「いや、それは結構ですよ」

「そう言わずに受け取ってくれたまえよ」

ダ・ヴィンチちゃんは俺に抱きついてくる。俺はそれを振り払おうとするが……  
「ほれほれ、遠慮せずに受け取りたまえ!」

中々離れようとならない。このままでは面倒事が増えると思い、仕方なく受け取ることにした。そして、俺から離れた瞬間、今度は零と東雲さんの方に近づいていった。

「君達にはこれをあげよう!」

「これは?」

「私がデザインをした服だよ」

そう言いながら二人は服を手渡される。二人は早速着替えることにしたようだ。ダ・ヴィンチちゃんがデザインした服を着ると、二人は驚きの声を上げる。

「すごい、サイズピッタリ……」

「可愛い……」

二人は自分の着ている服を見て感動する。ダ・ヴィンチちゃんのデザインセンスは本物で、二人の魅力を引き立てていた。ダ・ヴィンチちゃんは満足そうな表情を言う。

「うんうん、似合っているじゃないか」



「ダ・ヴィンチさん、ありがとうございます」

「感謝致します」

「はっはっはっ、気にすることはないさ」

ダ・ヴィンチちゃんを上機嫌な様子で笑うと、俺の方を見る。俺は嫌な予感しかしなかったので目を逸らそうとした。だが、その前にダ・ヴィンチちゃんの手が俺の肩に置かれる。

「さあ、次は零斗くんの番だ！」

「…………え？」

「さあさあ、早くその衣装に着替えたまえ！」

「ちよ、ちよつと待つてください!!何故私がそんなこと!!」

俺は必死に抵抗するが、カドツクに捕まり強制的に更衣室へと連れていかれる。そして、そのまま強引に服を脱がされた。その後、抵抗虚しく俺はダ・ヴィンチちゃんデザインの服を着せられてしまった。

ダ・ヴィンチちゃんは嬉しそうに笑いながら言う。

「ふむ、なかなか良い出来栄えだ。やはり天才だね、私は」

「…………」

「ん?どうかしたかい?」

「いえ、なんでもありません……」

俺はダ・ヴィンチちゃんに文句を言う気力も無くなっていた。すると、雫達は俺の姿を見て感嘆のため息を漏らす。

「あまり趣味に合わない服装ですね……違和感が凄いです……」

ダ・ヴィンチちゃんのデザインした服は、白を基調としたもので袖口が黒くなっている。更に、胸元には十字架を模したようなマークが付いていた。

「いやあ、我ながら素晴らしいデザインだ。……ま、私としてはもう少し露出度が高い方が好みなんだがね」

「……」ビスッ

「あ痛ッ!?!」

俺はダ・ヴィンチちゃんの頭にチョップを食らわせる。彼女は頭を押さえて涙目になっていった。

「セクハラで訴えますよ?」

「うう……酷いよお……せつかくのサービスシーンなのにい……」

「何言っているんですか……」

俺は呆れてため息を吐く。そして、俺は改めて自分が来ている服を確認する。正直に言えば、かなり恥ずかしかった。ダ・ヴィンチちゃんの趣味は置いておいて、このデザ

インは悪くないと思う。ただ、普段こういう格好をしていないので、どうしても落ち着かないのだ。

「……あの、やっぱり脱いでもいいですか？流石に落ち着かなくて……」

「ダメ！絶対に脱がないで！」

「そうです！折角貰ったのですから、ちゃんと着ていて欲しいです！」

雫と東雲さんは俺の両腕を掴んで引き止める。俺は二人の言葉を聞いて諦めるしかなかった。

## 花見行こうぜ!

S i d e 東雲

「……よし……これで完璧!」

コットンフレアスカートと、ボーダーTシャツにカーキのアウトターを羽織って、お気に入りのカゴバッグを持って家を出る。今日は湊莉君達と一緒に花見に行く予定だ。

待ち合わせ場所は近所の公園だから歩いて行ける距離だけど、ちよつと遠回りして桜が咲く並木道を通って行こうと思う。さつき天気予報を見たら、今日一日晴れるみたいだし、絶好のお花見日和になりそうだ。

空を見上げると、水色のキャンバスに描かれたような青空が広がっていた。風も吹いていないし、気温もちょうど良い感じで気持ちが良い。私は気分良く鼻歌を歌いながら、公園までの道を急いだ。

「えっと……確かこの辺りだった筈……」

スマホを確認して待ち合わせ場所に着いたけど、まだ誰も来ていなかった。……あれ？おかしいなあ……。いつもなら私が一番乗りなのに。

そう思つて周りをよく見てみると、少し離れた場所に見覚えのある姿を見つけた。

「……………」

湊莉君が桜の木に寄りかかつて眠っている。サラリとした白髪が風に揺れている。……その美しい横顔を見て思わず見惚れてしまった……本当に綺麗だなあ……と言うかこの季節でも風邪ひいちゃうよね、名残惜しいけど起こさないきや。

「あの……湊莉くん？」

肩に手を置いて優しく揺すつた。すると湊莉君はゆっくりと瞼を開き、寝ぼけ眼のままこちらを見る。そして、暫くポーズとしてからハツと我に帰つたように目を大きく開いた。どうやらようやく状況を理解したようで、気まずそうな表情になる。

「…………寝顔見ましたか？」

恥ずかしそうに目を逸らす湊莉君。まさか見られていたとは思わなかったんだろう。湊莉君の頬はみるみると赤く染まっていくな。そんな彼を見るとなんだか愛おしくなつてきてしまう。

「ふふっ、見たよ〜」

意地悪っぽく言つてみたけど、これは嘘じゃない。だって本当に可愛かつたもんね。

「あ、あの……忘れてください……」

耳まで真っ赤にして俯いている姿がまた可愛い。こんな姿を見せられたらもつと椰揄いたくなるんだけど、流石に可哀想なので止めておく事にする。

「あー！ いたいた……おーい二人ともー」

声の方を振り向くと、そこには悠花さんと鏡華さんの姿があった。後ろには恭弥さん達も居た。

「あ、おはようございませす皆さん」

「うんーおはよう東雲ちゃんー」

挨拶を交わした後、皆で談笑しながら集合時間になったので、桜の木の下にレジャーシートを敷いて座り込む。今日の天気は快晴で雲一つない青空が広がっている。まさに花見日和といった感じだ。それにしても凄いなあ……この満開具合……。

「わあ……見てみてよ皆!! すごく綺麗だよ!!」

悠花さんが嬉しそうに声を上げる、確かにその通りだ。まるで宝石箱のように咲き誇っている桜の花達は圧巻の一言である。それから暫くの間、私たちはただひたすら桜を眺め続けた。それはとても穏やかな時間で、いつまでもこのままでいいと思っただ。だ。

「……うーあそこなんで騒いでるんでしょう?」

桜の根元に人が集まっているようだ。何かあったのかと思つて近づいて行くと、花が開いていない桜の木が乱立していた。いつもなら満開の時期な筈だけど……

『我々は今年度の開花を拒否することにした』

驚いて上を見上げると、そこに居たのは桜の木を模した仮面をつけた人達だった。見た目は完全に変質者だが、不思議と怖いとか不気味だとか言う感情は全く湧いてこない。

『まったく……人間共は毎年、桜を見ては発情し、やかんのような奇声を上げては、酒をキヤツチ&リリースする……』

よく分からない事を呟く桜の化身（暫定）たち。ええ……何これ？ どういう状況？ 困惑している私たちに構わず、桜の化身たちは話を続ける。

『更には開花が近づけば “まだ六分咲き” だと！ 人の半裸に点数つけている様なものだぞ！』

なんか怒り始めたんですけど……と言うか、この人たちって桜の化身じゃなくて、単に花見客なんじゃ……そんなことを考えている間にも桜の化身たちの愚痴は止まらない。

『しかもだ！ 年々花見に来る奴らはマナーが悪くなっている、ゴミを散らかし、騒ぎまくり、挙げ句の果てには暴れまわったり、犯罪行為に走る輩もいる！』

ええ……この人、花見に対して不満爆発させてるだけじゃん……。そんな私達の心情など知る由もなく、桜の化身たちはヒートアップしていく。

「……東雲さん、見えてますか?」

「……うん、バッチリ」

隣のいる湊莉君には見えているらしいけど、恭弥さん達は「珍しい事もありますね」みたいな顔をしてキョトンとしている。私は心の中でため息をつく。

「……もう色々と面倒ですね」

湊莉君がボソツと呟いた。そして次の瞬間、桜の化身たちが一斉にこちらを向く。突然の出来事にビツクリしたが、何故か怖さはなかった。寧ろ、なんだか親近感すら感じてしまう。

『私達が見えているんだな?』

桜の化身の一人が問いかけてくる。それに対して湊莉君はコクリと首を縦に振った。すると、桜の化身たちは次々に膝から崩れ落ち、地面に手をついた。

『おお……神よ……感謝します……』

そう言つて涙を流しながら天に向かって祈りだした。その様子を見ていた他の人たちは、呆気にとられてポカーンとしていた。

『貴様らを花見対策委員に任命する!』



「は？」

湊莉君は思わず素の声を出してしまったようだ。無理もないと思う。いきなりそんな事言われても訳分からんだろうから。

「あの………なんですかそれ？」

とりあえず疑問をぶつけてみると、桜の化身は立ち上がって説明を始めた。

『いやね、毎年この時期になると、花見をしに来た人間が暴走するんだよ。酒を飲み過ぎで泥酔したり、他人の迷惑を考えずに大声で歌ったり叫んだりするんだよ』

ああ………確かにそういう人もいるかも。でも、別に悪いことじゃないよね？それを取り締まるとかおかしくないかな………と思っていると、桜の化身は再び口を開いた。

『処置は重い方がいいな………我々桜の前で開口したものは死刑でいいだろう』

「いやダメでしょ」

「またもや反射的に突っ込んでしまった。だっておかしいもん。流石にそれはやりすぎだと思っただけ。しかし、私のツツコミを無視して話は続く。」

「あの………花見をしている人に危害を加えるのは良くないと思いますよ？」

『何を言っている？そもそも花見の席で騒ぐような輩は害悪だ、それにだ、花見会場で殺人が起きたらどうなる？血の海になるぞ』

「……………」

何も言い返せない……。確かにそうだ、もしそんな事件が起こったら花見どころではなくなるかもしれない。私が黙っている間に桜の化身たちは話し合っている。

か

『やっぱり死刑でいいんじゃないか?』

『いや、それでも軽い気がするが……』

『いや、もつと重罪の方が良いのではないか?』

『うむ……それが良いかもしれない……』

おい待て、どんどん話が物騒になつて行っているんですけど。このままじゃいけないと思い、止めに入ろうとしたその時だった。

「一つよろしいでしょうか?」

「湊莉君?」

今まで無言だった湊莉君の方を見ると、彼は桜の化身たちに鋭い視線を送っていた。その表情はいつもの彼からは想像できない程に冷たいものだった。

「確かに人類は愚かです、咎め合い奪い合う事ですか、一つになることが出来ない」

淡々と語る彼の言葉に桜の化身たちも真剣に耳を傾けているようだ。そして、一呼吸置いて湊莉君が語り出す。

「ですが逃げることは決してない……咎めあい奪い合いながらもあるかもわからない答えを探す旅から逃げない」

そう語る湊莉君の瞳は真つ直ぐ前を見据えていた。ああ……この人は強い人なんだな……

私はそんな事を思った。きつとこの人も過去に何かあつたんだろう。だからこそ、今の彼が居る。

「……だから、咲いてください。いつもグダグダな人類だから……いつも変わらず美しい、あなた方の花びらが欲しい」

そう言った後、湊莉君は桜の木に近づいていき、そつと手を当てた。すると、桜の木は一瞬にして満開になつた。

バラバラな私達を……まるであざ笑うように、一斉に芽吹く桃色の世界。

「……綺麗ですね、東雲さん」

湊莉君の言葉にハツとする。気がつくと私達は桜の木に囲まれていて、辺り一面が桜色に染まっていた。

『……ありがとう、少年よ』

桜の化身が湊莉君に向かって頭を下げる。その姿を見た湊莉君は優しく微笑みながら言う。

「いえ、僕は何もしてませんよ。ただ、桜が見たいと思っただけです」

『ふっ……謙虚な子だな、気に入った』

桜の化身が湊莉君に歩み寄ると、頭を撫で始めた。湊莉君は少し照れ臭そうな顔をしているけど、嫌がってはいないみたい。

「……やっぱり桜はいいですね」

湊莉君はうつすらと微笑みながら呟く。私もつられて上を見る。そこには、どこまでも広がる青空があつた。そして、桜の花びらは風に吹かれて舞い上がり、空へと消えていく。桜が散る姿は、どこか寂しさを感じさせる。

## 父の日には特別な感謝……

Side 一花

「父の日……どうしような……」

今日は6月15日で父の日の四日前だ。去年も同じ悩みをしたが、結局いい案は思いつかなかった。

「……こういう時は……」

私は悩んだ末、とある人物に頼んでみることにした。

翌日、私は朝早くから家を出て、彼の家に向かった。そしてインターホンを押した。すると彼はすぐにドアを開けてくれた。

「おはようございます、東雲さん」

「お、おはよう……湊莉君……」

柔らかな笑みを浮かべる彼を見てると少し緊張してしまう。

「フフフ……立ち話もいいですが、部屋でお茶でもしながらゆっくり話しませんか？」

「ふえ？あ、ひゃい……」

私は彼に言われるがまま、家が上がった。リビングに着くと、彼は私にソファアームに座るように促した。私はそれに従い、腰を下ろした。

彼はキッチンに向かい、お茶を用意していた。私はその様子をじっと見つめていた。

(やつぱり……カッコいいなあ……)

彼は私の視線に気づき、こちらに振り向いた。私は慌てて目を逸らした。彼はクスツと笑いながら、テーブルにお茶を置いた。私は恥ずかしくなり、俯きながらお茶を口に運んだ。

「!!このお茶すっごい美味しい!」

あまりのおいしさに思わず声が出してしまった。そんな私を見た彼がまたもや微笑んだ。

「フフ……ありがとうございます。その紅茶のブレンドは私のオリジナルでしょね、気温や湿度の変化によって味が変わるのですが……運が良かったみたいですね」

そう言いながら、彼も自分の分のお茶を飲み始めた。

「それで、何か相談があるって言ってましたけど……何ですか?」

私はハツとなり、本来の目的を思い出した。

「実は父の日のプレゼントについて悩んで……」

「成程……そういうことなら喜んで協力しますよ」

「ほ、本当!? ありがとう!」

私は嬉しくなつてつい立ち上がり、彼の手を握つてしまった。彼は一瞬驚いた顔をしていたが、すぐに表情を戻した。

「し、東雲さん、一旦落ち着いてください……ね?」

「ひゃ、はい……そ、それでどんなものをあげたらいいか分からなくて困っていたんです」

私は握つた手を離し、再びソファに座りなおした。彼は顎に手を当てながら考え事をしていた。

「ふむ……一般的な物で言うネクタイやハンカチと言つた小物等が喜ばれるでしょうが……それではダメなんでしょうか?」 「はい……いつも同じようなものをあげていたので、たまには違うものがいいかなと思つて……」

私は苦笑いしながら答えた。彼はしばらく考えていたが、突然口を開いた。

「……万年筆はいかがでしょう?」

「え? 万年筆……ですか?」

予想外の提案だつたからなのか、変な声で聞き返してしまつた。しかし、彼は気にせず続けた。

「はい。万年筆というものは使つていても壊れにくいですし、長く使うことができます。

それに普段使いできそうなデザインのものであれば父への贈り物としても最適ではないでしょうか？」

確かにそれは名案かもしれないと思った。実際問題、毎年同じ物を贈っていてマンネリ化しているということもあつたからだ。早速調べてみると、様々なデザインのものがあり、どれも素敵だった。

「あの……ちなみにこれなんてどうですか？」

私は一つの写真を見せた。それは持ち手が銀色になっていて、軸の色は黒だがところどころ金色のラインが入っているもので、ペン先は銀で装飾されているものだった。

「成程……いいかもしれませんね。後は値段ですが……」

値段の方を見ると、結構なものだったので私は目を見開いた。

「こ、こんなにするんですか!？」

「まあそれなりに良い品ですからね……高校生のお財布事情的には厳しいものがあるでしょう」

「うう……無理かも……」

やはりこれは諦めるべきなのだろうかと思ひ悩んでいた時、彼が優しく語りかけてきた。

「大丈夫ですよ。私に任せてください」



そう言うと、彼は携帯を取り出しどこかへ電話をかけた。それから数分後、玄関のドアを開ける音が聞こえた。

「お待たせしました、東雲さん」

そこには湊莉君ともう一人見知らぬ女性がいた。女性は淡いピンク色の髪を後ろで結び、眼鏡を掛けていた。背丈は高くスラッとしていた。

「はあ、初めまして。私はタマモヴィッチ・コヤンスカヤと申します、この度はNF Fサービスをご利用頂き「まだですか？」もう、釣れない方ですね……」

彼女は自己紹介を終える前に遮られてしまい少し不満げな様子だったが、湊莉君は気にしていないようだった。

「ね、ねえ……湊莉君」

「なんでしょ？」

「NF Fサービストって……あの？」

私が恐る恐る訊くと、タマモヴィチさんは笑みを浮かべて言った。

「フフ……勿論、私が営んでいる会社の名前ですよ」

NF Fサービスとは今巷で有名な配送会社だ。依頼すればどんな物でも配送してくれるらしいという噂を聞いたことがある。

「ええっと、どうしてそんな人がここに？」

「マスターからの御依頼で、貴方のお父様の父の日のギフトをお届けに参りました♡」

そう言つて、タママさんは手に持っていた青い箱を渡してくれた。私はその箱を受け取り、中を確認した。さっきまでスマホで見っていた万年筆が入っていた。

「え!?なんで!?!」

私は驚きの声を上げた。だって、つい先ほど諦めようとしていたところなのに……

「おや?もしかして、いらなかつたですか?」

「いえ!そんなことはありません!」

私は慌てて否定した。するとタママさんがクスクスと笑いながら、私の頭を撫でた。

「フフフ……可愛い反応ですね。それじゃあ、代金の方ですが……」

「私が立て替えます。後、領収書もお願ひします」

「え!?!」

今度は湊莉君の発言に驚いた。すると、彼はポケットからカードのようなものを出した。そのカードは黒色で、よく見るとN F Fと書かれていた。そして、その横にはV I Pと書かれている。

「い、一体どこからそのカードを……?」

「秘密です♪」

そう言いながら、彼は悪戯っぽい笑みを浮かべながら、指を口に当てた。やっぱりこ

の人はずるいよ……

「あ、あの！ やっぱ私が払いますから」「はい♪ 確かに確認しました、こちら領収書になります」……湊莉君？」

「気にしないでください。お金なら余るほどありますし、こういう時は男を立ててくださいいよ」

そう言つて爽やかな笑顔を向けられたら何も言えなかつた。私は渋々了承した。

「ご利用頂きありがとうございます♪ 今後ともどうぞご贔屓に」

こうして、私は無事に？ 父の日のプレゼントを買うことができた。湊莉君の家を出ると、空は夕焼けに染まっていた。私はプレゼントが入った袋を大事に持ちながら帰路についた。

## モデルデビュー？

S i d e 零斗

「はい、いい感じよ〜！次はちよつと色っぽい感じが欲しいわ〜」

現在、俺は剛田光という凄腕のカメラマンに写真を撮ってもらっている……うん、なんで？何がどうして、どうなって撮られる事になったの？俺も急展開過ぎて、言われるがままポーズ取ってるけどさ……色っぽいポーズってなんだよ。

————— 数時間前 —————

「代わりのモデルウ？」

「ああ、来るはずのモデルくんが遅刻してしまつてね……代わりを頼みたんだよ」

アヴァロン内にある事務所で書類仕事をしている時にダ・ヴィンチちゃんから言われた言葉に思わず聞き返してしまった。なんでも撮影予定時刻まであと1時間ほどあるのだが、そのモデルさんが遅れているらしいのだ。そこで急遽代役を立てることになったのだが……

「なんで俺なんだ？ランスロットとか燕青とか……空いてる奴ら居るだろ？それに俺は書類仕事が忙しいから無理だ」

「そう言わずに頼むよ……今度何か奢るからさ！」

「……………」

「では、じゃあ私とデートする権利をあげるよう！」

「それはいらん」

「こいつは何を言ってるんだか……まあでも確かに困ったことに変わりはない。他のスタッフもバタバタとしていて余裕がないみたいだしな。」

「……………今回だけでぞ」

「本当かい！助かるよ！」

とりあえずは、この髪色と目じや、駄目だろうしウィッグとカラコンを付けて現場に向かう。その後、スタッフ総出でなんとか撮影の準備を終え、撮影が始まったわけだが

……

「表情が硬いわよ、ほら笑顔笑顔！」

「……………」

パシャリパシャリとシャッター音が響く中、俺はただ黙々とポーズを取り続ける。正直、早く終わらないものだろうか。

「零斗君、もつとこう妖艶な雰囲気を出してみてくださいるかな？」

「……………はい」

そんな事言われても出せるもんなら出してますよ……無茶ぶりしないでくれませんかね……その後も様々な要求に応え続けていく内に時間は過ぎていき、休憩時間に入った。まあ、休憩時間が終われば、流石に元々撮影に来るはずだったモデル君も来るだろう。

「湊莉さん、すみません……弊社事務所のモデルなのですが到着にまだ時間が掛かるよう  
でして……」

マジかよ……このまま写真撮影続けるの？という、一応は一般人である俺が雑誌に掲載されても大丈夫なのか？

——— 現在 ———

そして2回目の撮影が終わると同時に何故か俺の周りに女性スタッフ達が群がってきた。そして始まる質問攻めである。

「零斗さんは普段どんな事をされているんですか!？」

「好きな女性のタイプを教えてください!!」

「連絡先を交換しましょう!!」

俺は聖徳太子じゃないから1人づつ喋ってくれませんか？なんて思いながらとりあえず答えられる範囲で答える。しばらくすると光さんがストップをかけてくれたお

かげでやつと解放された。

「ふう……助かった……」

「大変そうね……はい、飲み物」

「ありがとうございます……」

剛田さんから差し出された飲み物を受け取る。ちなみに光さんは漢女である。何処ぞのゴリマッチョと違ってTPOを弁え、良識もある出来た人間である。

「ところで剛田さん、代わりのモデルは私でよろしかったんですか？」

「あら、私は貴方の写真を見た時からずっと気になってたわよ？」

「へえ、そうなんですか……って写真ですか？」

「ええ、ダ・ヴィンチさんがよく貴方の写真を見ているもの……ウィッグとカラコンをしている訳も知っているわ」

「ああ……そういう事でしたか……」

ダ・ヴィンチちゃんには俺の写真を撮る事がある。というより、あの人が勝手に撮ったりするのだ。しかもかなりの頻度で盗撮される。

「それにしても貴方、随分と手馴れていたわね。私の見立てだと貴方にはモデルの才能があると思うのだけど」

「才能……ですか……自分としてはそんなつもりは無いですけどね」

「そうかしら？少なくとも貴方はカメラの前で自分の魅力を引き出すことが出来ると思  
うわよ」

「買い被りすぎですよ」

そんな会話をしているとスタッフに呼ばれ、次の撮影が始まる。今度はペアで撮影を  
行おうらしい。

「よろしくお願いします」

「(いち)こそ」

相手は茶髪のセミロングで清楚な感じの女性だった。歳は同じくらいか少し年上く  
らいだろう。身長もそこまで高くない。

「じゃあ、始めようか」

「はいー」

2人で並んで立ち、ポーズを取っていく。カメラマンの指示を聞き、表情を変え、時  
には身体を密着させたりする。そんな中、彼女は緊張しながらもしっかりと仕事をこな  
せているようだ。

「じゃあ、次は腕を組んでみてちょうだい！」

「腕組む……ですか？」

どうやらカッパルのような雰囲気を出して欲しいらしい。俺は言われた通りに彼女



と腕を組む。すると、彼女の体温が直に伝わってくる……うん、意外と大きいですね……はい、ごめんなさい。

「ふう……」

窓際にあつたベンチに腰掛けて息をつく。それにしても彼女は凄いな……俺とは違つてしつかりと仕事をこなせるし、周りの人達とも上手くコミュニケーションが取れている。

「お疲れ様です、お隣いいですか？」

「はい、大丈夫です」

彼女に声をかけられ、座れるようにスペースを開ける。彼女がそこに座り、俺は少し距離を置く形で再びベンチにもたれ掛かる。

「急にこんな事を頼んでしまつてすみません」

「いえ、気にしないでください」

「ありがとうございます。それと……今日は本当に助かりました！」

彼女は笑顔を浮かべ、頭を下げる。きつと、この人は真面目な人なんだろうな。仕事に対して責任感を持っていて……仕事が出来るから周りからの信頼も厚い……恐らくはそんな人だ。

「貴重な体験も出来ますし、何より結構楽しいので大丈夫ですよ」

「本当ですか！良かったあ……」

胸に手を当て、安堵する。その仕草はとても可愛らしく思えた。

「あ、ごめんなさい、お名前まだ……」

「そう言えばそうですね……私は湊莉 零斗と言います」

「私は東雲 湊月と言います、よろしくお願いします」

お互いに自己紹介を終えるとお互いの顔を見て笑い合う。初対面だが、不思議と話しやすい……つて東雲？もしかしてだけど

「……東雲、もしかして妹さんとかいらつしやいますか？」

「え？はい、居ますよ。今高校生ですけど……」

「……下の名前は一花ですか？」

「うえ!!?どうして分かったんですか!?!」

やっぱりそうだ……顔といい、髪型や体型が似ていると思っていたんだよな。

「一花さんとは、同級生なんです」

「そうだったんですね……それなら納得です」

世間って狭いな……まさか撮影現場で知り合いに会うなんて……でも、彼女に会えてよかった。その後は他愛の無い話をしたり、学校で一花さんがやらかしたエピソードなんかを話した。

「クランクアップですー！お疲れ様でしたー！」

結局、来るはずだったモデル君は到着することは無く、撮影が終わってしまった。服装を何度も変え、ポーズも同じ物が無いように工夫させられたせいでかなり疲れた。

「やっと終わったな……残業代でも請求するか」

そんな事を考えながら、一息つく為にベンチに座る。湊月さんの方を見ると撮影スタッフの人達と楽しそうに談笑していた。そこに光さんも混じって会話を花を咲かせている。

「お疲れ様、湊莉君」

「……お疲れ様です、湊月さん」

ベンチに座り何となしに湊月さん達の事を見ているとこちらに気が付いた湊月さんが微笑みながら話し掛けてくれた。

「それにしても、湊月さんは凄いですね」

「凄い……私ですか？」

「ええ、仕事に対してとても真摯で楽しみながら取り組む……そんな事をできる人はそう居ませんから」

俺はベンチの背もたれにもたれ掛かり、天井を見上げる。隣の湊月さんはクスクスと

笑ってこちらを見てくる。

「ええ！私はこの仕事が好きですから！」

湊月さゆは向日葵の様な明るい笑みを浮かべる。この人が何故、周りの人に好かれて  
いるのかが分かった様な気がした。この人は人を惹きつける天才なのだろう、まさにモ  
デルは天職なのだろう。

「ちいーす、遅れました〜」

突然、撮影部屋に気怠げな声が響いた。声をした方を見ると金髪の高身長イケメンが  
欠伸をしながら歩いて来ていた。確か……最近有名になった男性モデルだったな。な  
んなら今日来るはずだったモデル君だよな、今更来たのかよ……

「あの糞ガキイ……！」

光さんがとんでもない表情になりながらモデル君を睨みつけている。この人は仕事  
にプライドを持ってやっている……アイツみたいな人間は嫌いみたいだ。

「湊月ちゃん、今日は宜しくねえ〜」

モデル君は湊月さんに近づくこと肩に手を置いて、下卑た笑みを浮かべながら喋り始め  
た。

「これが終わったらさ、二人で食事でもどう？俺、いい所知ってるからさー！」

「ええつと……」

それを見た光さんは般若の様な形相になりゆつくりとモデル君の方に歩み寄って行った。急いで駆け寄り、落ち着く様に声を掛ける。

「光さん、落ち着ついてください。あんな奴でも殴れば悪いのはこつちになりますます」

「うるさい！もうアイツの顔をぶん殴らなきや、気が済まないわ！」

何とか光さんを落ち着かせて、再度モデル君の方を見る。未だに湊月さんにベタベタと触れて食事にしつこく誘っていた。

「とりあえずはあいつの対応は任せてください……キツくお灸を据えてやりますよ」

光さんにそう言つて、モデル君の元に歩み寄る。そして、湊月さんの肩に置かれた手を振つて、モデル君と湊月さんの間に割つて入る。

「ああん？テメエ何しやがん……」

「おや、これは失礼……肩にゴミが付いていたので」

俺の発言で現場の空気が凍り付く。ただの罵倒では無く遠回しに言う事でより、精神を逆撫でする。すると、モデル君の顔をみると赤くなつて行く。顔色は既に激昂しているのが見てわかるほどだった。

「……てめえ何？誰に口聞いてんだ？」

「貴方以外に誰が居るんです？」

こういうタイプの人間はかなり沸点が低い、低俗な煽りに簡単に乗ってくれるので扱い易い。

「……お前、舐めてんだろ」

「私はただ事実を述べただけですよ。まさか、自分より年上だから敬語を使っていると思われているなら心外ですね」

煽るように話すと、案の定怒り出した。予想通りで助かる。怒り狂ったモデル君は拳を握り……

「お前、ウザいから死ね」

そう言つて殴り掛かつて来た。動きからして格闘技をやっている様だが、モーシヨンが遅く、大振りな為避けやすい。

「おっと、ウィツグが……」

避けた拍子に付けていたウィツグが床に落ちる。そして露わになる地毛。

「気持ち悪……」

誰かの声が聞こえたが、今は気にしている暇は無い。今はこの男の処理が先だ。

「クソツッ！ふざけやがって！」

再び殴りかかつて来る男。だが、避けることは容易かった。その後も幾度となく襲ってくる攻撃を全て回避していく。

「クソが！なんで当たらねえんだよ！俺はボクシングやってんだぞ！」

「そうですか、ですが貴方の動きは素人同然、パンチの軌道は単純で単調だ。当たる方がおかしい」

相手の息が上がり始めている。そろそろ終わらせるか。大きく振りかぶった男の右ストレートを避け、そのまま腕の関節を極めて、床に叩きつける。

「……次はありません」

地面にうつ伏せになっている男の腕を解放し、耳元で囁くように話す。すると、男は怯えたような目つきになり、震えながら後退りをした。

「だ、誰か警察呼べ！暴行事件だぞ！」

「何をふざけた事を……貴方から殴り掛かって来て、その後も暴言等もありましたから正当防衛ですよ」

そもそも、先に手を出そうとしたのはこの男の方。それに対して反撃しただけだし、何の問題も無い。周りの人達も俺の味方をしてくれているようで、男を庇う人は居なかった。

「……ツチ、クソツタレが！覚えておけよ！」

捨て台詞を吐いて男はどこかへ行ってしまった。周りからは拍手喝采で、中には「かっこいいー」とか言っている人も居る。

「大丈夫ですか？東雲さん」

「え、うん、ありがとうございます……」

心配になって声を掛けると、頬が赤く染まっただけで、目は何処かを見ていた……可愛いな。

「あの、その髪って……」

「ええ、地毛ですよ」

隠す必要も無くなったため、もう普通に話す。まあ、この髪色を見た奴は大体……

「綺麗な髪ですね！」

「(やっぱりこの人も——) え？」

思っていた反応と違った。今まで見てきた人達は全員俺を見ると嫌そうな顔をして来たのに……この人の場合は目を輝かせて俺のことを見つめてくるのだ。

「どうかしましたか？」

「あ、いえ、何でもありません……」

彼女は俺の髪を褒めてくれた。しかも嬉しそうに笑みを浮かべながら。その笑顔を見るだけで俺は胸の鼓動が早くなる……気がした。

「……………」  
「ジィー」

「あの、湊月さん、そんなに見つめられると……恥ずかしいです」



「あ、ごめんなさい……」

彼女は我に返ったのか、慌てて俺から離れる。

「あの、もしかしてカラコン入れてますか？」

「ああ……はい、本当は赤と青のオッドアイなので……」

カラコンを外して、素の状態に戻る。東雲さんはキラキラとした目をしていた。

「そうなんです……綺麗な瞳です。とても素敵だと思います」

「あ、ありがとうございます……」

ここまで正面切って言われるのは初めてだった為、戸惑いながらも礼を言う。なんか調子狂うな

「……では私はこれで失礼させて頂きますね」

「あ、はい！助けてくださり、本当にありがとうございます！」

最後に軽く頭を下げてからその場を離れる。足早に去るのには理由があった。……顔が熱い。きつと今の顔は真っ赤に染まっているだろう。心臓の音がうるさいくらい鳴っていた。

「……らしくねえなあ」

苦笑いを帰路に着く。

# 夏だ!海だ!

S i d e 零斗

夏休みも折り返しに差し掛かった。今日は久しぶりの休みだ。いつものようにトレーニングを済ませ、朝食を取る。

「おつはよー!」

「朝から元気だな、お前は」

ドアを蹴破らん勢いで開けて入ってきたのは、悠花だった。ちなみにハジメを含めて、数人にはこの家の合鍵を渡してある。

「毎回言ってるが、来るんだったら先に連絡くらいはしろ」

「ええく? いいじゃん別に。私とあんたの仲だし?」

そう言いながら勝手にソファアに座り、テレビを付けて、置いてある菓子を食べ食う悠花。うーん、どつからどう見ても休日のおっさんだ。

『今年は例年より早く、海開きとなりました!』

「おお!もう海入れるんだってき!」

「ほー、そりやよかったな」

「……反応薄っ!？」

食器を洗いながら、適当に返事をする。すると、何か閃いたのか、悠花はこちらを見てニヤリとした笑みを浮かべる。

「刀華の水着見れるかもよ?」

「そいつは魅力的ではあるが、この気温じゃ、アイツも暑いだのめんどくさいだの言うぞで」

「ああ……それは確かにね」

実際、俺だって暑いものは暑いのだ。日差しが肌を突き刺すような感覚には慣れない。そんなことを考えていると、不意にスマホが鳴る。画面を見ると、着信相手は一花さんだった。通話ボタンをタップして電話に出る。

『もしもし、零斗くん』

「おはようございます、どうかしましたか?」

『その、来週の金曜日って空いてたりする?』

「金曜ですか……特に予定はないですね」

『なら、刀華さん達も誘って、海行かない?』

一花さんの誘いを聞き、少し思案する。まあ、断る理由もないしいいか。俺は一瞬だけ背後にいるであろう悠花の方に目を向ける。

「アハハっ!」

コメディ番組を見ながら、大口を開けて笑っている。嫁入り前の女の子がやつちやダメだろ……

「……ええ、良いですよ。他の方達には私から伝えておきます」

『うん、ありがとう』

そのまま通話を終了する。すると、悠花はこつちを見ながらニヤついていた。

「随分と嬉しそうな顔で電話してんじゃん」

「……うるせえ」

否定しようと思ったのだが、言葉が出てこなかった。それほどまでに、自分でも気づかぬうちに喜んでいたということだろう。

「刀華と一緒に海に行けるんでしょ?良かったねえ」

「だからうぜえって……」

「こういう時のコイツは本当にウザい。そして調子に乗るのである。」

「相変わらず素直じゃないね」

「ね」

「ほっとke……ん?」

ふと、扉の方を見やると、そこには買い物袋を手に提げた刀華の姿があった。

「毎度言うが、来るなら事前に連絡くらい寄越してくれ」

「あら、ごめんなさいね？」

全然悪びれた様子もなく、平然とした態度のまま刀華は椅子に座った。

「それで？二人とも一体なんの話をしていたのかしら？」

「今年は、いつものメンバープラス数人で海でも行こうって話だ」

「あは、良いわね……日程とはどうするの？」

「今の予定だと、来週の金曜日だ」

そう答えると、刀華はとても楽しげな表情になった。

「なら、隣の県にお父様が保有する別荘があるから、お泊まりしましょうか」

「さっすが、社長令嬢だな、俺らとは考えが違う」

「もつと褒めてもいいのよ？」

普通の学生ではなかなか実現しないようなことをさらっと提案してくるあたり、やはり財力が違うということだ。

「でも、いつものメンバーだと、かなりの大所帯だよね。移動の時とかはどうしようか？」

「私と恭弥が運転免許持つてるから、それぞれで運転して、零斗はバイクを一台お願いね。それでその後ろに一人乗れば二人分のスペースを確保できて、荷物は大分楽に運べ

るわ」

「よし、それで行くか。んじや、俺は他のメンツ誘っておくから、手配とかは頼んだぞ」  
それだけ言い残してその場を去る。リビングを出る直前、ちらりと見えた二人はとて  
も幸せそうな笑みを浮かべていた気がした。

「……連絡ついでに、他のメンツも呼んで買い物でも行くか」

「え?なんで?」

「水着ねえし、レジャー用品も買っておきたい」

「おっけー!それじゃ、早速グループチャットで声掛けてくる!」

そう言つて部屋を出ていく悠花。元氣だな……あいつは。

「海に行くのなんて何年ぶりかしら」

「少なくとも四年以上は行つてないな」

刀華と二人でソファーに腰掛ける。しかし、隣に刀華がいるというのは未だに違和感  
を覚える。なんかこう、恋人的なイベントが起きるんじゃないかと期待してしまう自分  
がいる。

「零斗はどんな水着が良いと思う?」

「なんだ急に」

「参考までに聞いておこうと思つて」

「そうだな……」

俺は基本的にシンプルなデザインが好きなのだ。派手過ぎず、地味すぎないようなそんな感じのデザインの方が好きだ。

「刀華だったらなんでも似合うだろ」

「そういうことじゃなくて……ちゃんと選んで欲しいの」

頬を少し膨らせて、ジト目を向けられる。いや、だって実際何でも着こなすからそれしか言えないのよ。

「ああ……わかった。俺の好みで良ければ選ぶけど」

「最初からそう言えばいいのよ」

そして何故か得意げな笑みを浮かべる。なんだこの子、可愛すぎる。

「2人ともー！一時間後に近くのショッピングモールに集合ねー！」

部屋に戻ってきた悠花は、俺たちに告げてから出ていった。それにしても、こんなにも心躍るのはいつぶりだろうか？

「着替えてくるから、少し待ってくれ」

「ええ、分かったわ」

それから俺は自室に戻り、クローゼットを開ける。適当に見繕い、手早く着替える。

「お待たせしました、行きましようか」

「ええ、そうね」

玄関に行き、靴を履いて外に出ようとすると、先に出て行ったはずの悠花がこちらをニヤつきながら見ていた。

「なんだよ……」

「別にいい？」

「気持ち悪いな……んじゃ、行こうぜ」

「はいはい」

そして、俺と刀華と悠花の三人で家を出て、目的地に向かう。電車に乗り、乗り換えをして、また少し歩くと、目的の場所に着いた。そこは全国展開している大手の大型商業施設である。

「零斗、こつちだよ」

「柊人」

「私達も居るわよ? 零斗」

入口付近にいた恭弥と鏡花、柊人と合流し、そのまま全員で店内に入る。中は人で溢れており、かなり賑わっていた。

「やっぱり夏休みだから、こういうところにも人がたくさん来るのね」

「とりあえず、水着コーナーまで行こう。話はそこからだ」



先頭切って歩き出す恭弥に続いて、そのあとについて行く。

「これとかどうかしら?」

刀華が手に取ったのは、無地の白いビキニタイプだ。シンプルイズベストというやつだろう。

「あ、じゃあ私はこれにする〜」

悠花が選んだのは、鮮やかな黄色のタンキニだ。なんとも悠花らしいセンスだ。

「柊人はどう思う?」

「悪くないんじゃない? 悠花らしいと思うよ」

「そっかあ」

笑顔で返事をする柊人。あいつも結構、表情豊かになったものだ。今度は鏡花の方を見てみる。すると……

「さ、貴方が選んで?」

「……………」

恭弥が固まっていた。それもそのはず、今彼の目の前にはフリルのついた黒色のセパレートタイプの水着と、黒のレースがあしらわれた白のワンピースタイプの水着が置かれているのだ。

「どうかしたのかしら?」

「あ、いや……その」

「ほら、好きな方を選んで良いわよ?」

「うぐう……」

完全に弄ばれている恭弥であった。しかし、よく考えてみると意外といい組み合わせかもしれない。

「……黒の方が好ましいとオモイマス」

「あら?どうして?」

「大人っぽさが出ていていいなあ……と思ひまして」

「そう……ならそれにしようかしら」

恭弥……強く生きろよ……。そう思いながら、水着を買うためにレジに向かったのだ。その後はレジヤ―用品を買い揃えるため、店を巡る。浮き輪、ビーチボールなどを買った。

その後、一旦昼食を取ることにし、フードコートへとやってきた。席を確保してから、各々注文した品を食べ始める。

「美味しいですね……火入れが少々甘い気がしますけど」

「それはそうでしょう、ファストフードなんですから」

「まあまあ、これもたまに食べるからこそ美味しく感じるんだよ」

そんな会話をしながら、食事を終える。

「ちよつとトイレ行つてくるね」

「私も行くわ」

「なら、私も行くわ」

女性陣が揃つて立ち上がると、俺たちに一言かけて行つた。

「先程は災難でしたね、恭弥」

「言うな……言わないでくれ」

頭を抱えて落ち込む恭弥を慰めるために、軽く肩を叩きながら笑いかける

「ドンマイ」

「君達、楽しんでるだろ！」

「まさかあ？そんなわけないじゃないですか」

「嘘つけ！目が笑つてるぞ!？」

やれやれ、恭弥は面白い反応をしくれるからつい揶揄いたくなってしまう。

「……毎度の事ながら、全員愛した女性は変わり者ですね」

「確かにね」

柀人と二人で苦笑していると、背後から視線を感じた。ふと横を見ると、そこには俺

達を見つめる鏡花の姿があつた。

「……そういえば、恭弥。鏡花の何処に惚れたんですか?」

「……何故、このタイミングで?」

「いえ、単純に気になりましたね」

俺は素直に疑問をぶつけることにした。すると彼は少し言い淀んだ後、口を開いた。

「最初は、綺麗で美人だとは思っていたよ。でも、それ以上に僕を助けてくれたあの日の彼女に惹かれたのだと思う……」

「恥ずかしいのか俯きがちで話す恭弥だが、言っていることはとても共感できるものだった。」

「そうでしたか……」

「ただ、鏡花と付き合うにあたって、一つだけ決めたことがあるんだよ」

「……どんなことを?」

終人が興味深げに尋ねると、恭弥が自信満々な顔でこう言った。

「鏡花のことを幸せにする……とね」

ちらりと鏡花の方を見ると、少し目を潤ませていた。が、すぐに涙を引っ込めて、笑顔を見せた。

「本人には、言わないでください?」

「ああ、わかっているよ」

俺達はそれから、三人が戻ってくるまで談笑しながら待った。

夏って言ったら、海だよなあ!?

S i d e 零斗

水着及びその他の品を買い揃え、その後を準備を終えて、予定通りの金曜日。全員が俺の家に集まり、レンタルした車に荷物を積んでそれぞれの車に乗る。恭弥運転する車には終人、悠花、鏡花、ハジメ、白崎。刀華の運転する車には雫、園部、中村、谷口、幸利、浩介。そして俺のバイクには一花さんが乗る。

「さてと……」

俺はバイクに跨る。後ろにいる一花さんの胸が背中に当たっていることは気にしないでおこう。

「では、行きましようか」

「そうね。皆、シートベルト締めた?」

「大丈夫です!」

全員から返事を貰い、一花さんもしつかり捕まったことを確認し、俺はアクセルを回す。後ろからは一花さんの楽しそうな声が聞こえてくる。

二時間程して、パーキングエリアに着いた。そこで予定通り休憩することになった。「疲れましたあ……」

「フフ……お疲れ様です、一花さん。でも後少しなので我慢して頂けますか？」  
「はい！全然平気ですよ!!」

元気な声で答える一花さん。今日は妙にテンション高いなあ……俺はパーキングエリアにあるレストランや土産屋の複合施設を見て回ることにした。

「うーん……どうしようかな……」

「どうかしましたか？」

「あ、零斗……」

園部がある飲食店の前で悩ましそうにメニューを眺めていた。メニューを見るとデカデカと『地域限定!』と書いてある。

「……それ食べたいんですか？」

「うん。でもちよつと値段が高くて……」

確かに……こういう所の物は微妙に高く、少し買うのをためらうが、せつかくの旅だし、いいだろ。

「すみません、地域限定のロールケーキ二本ください」

「はいよ!! 2つで840円だよ」

財布を出して代金を支払う。店を出て園部の方に歩いていくと園部は驚いていた。

「えっ?! お金払うわよ?」

「まあまあ、気にしないで下さい」

そのまま俺は歩き出す。すると園部が追いかけてきて俺の隣に並ぶ。……何か距離近くないか? そんなことを思っていると園部から話しかけてきた。

「……ありがとね」

それだけ言うと、駆け足で停車している車に行ってしまった。

「素直じゃないねえ……」

あれからしばらく走って、刀華と鏡花の親父さんが保有して別荘に着いた。中に入ると広々としており、リビングにはダイニングテーブルがあったりキッチンも綺麗だったりと、生活感のある感じになっていた。

「これは凄いね……」

「うん! そうだね、ハジメ君!!」

「こら、はしやがないの」

「あう……ごめんなさい……」

着いて早々騒ぎ始める白崎を宥める雫だったがその顔はとても嬉しそうだったので



内心とても楽しみにしてたんだろうな。

「荷物を整理して、着替えが済んだら……海に行きましようか」

恭弥の言葉を聞き、女性陣は奥の大部屋を使い、俺らはその隣にある部屋で着替えを済ませます。と言っても男なので直ぐに着替えは終わり、パラソルやビーチボール、ブルシートなんかを持ってリビングで待機している。

「……相変わらず、零斗っていい身体してよな」

そう言っ来て来たのは幸利だった。浩介も同意するように首を振る。

「そんな事ありませんよ……誰だって鍛えればこうなれますよ?」

「ウソだつ!!」

「?」じゃありませんよ、ハジメがその証拠です」

そういうと二人は納得したように俺から視線を外す。そして、ハジメをじつと見つめる。

「……僕もそこまで筋肉質ではないんだけどなあ」

「ウツソだろお前!!」

何故か驚く二人に苦笑いするしかないハジメは肩を落とした。

「でも実際さ……零斗の体つきの方が羨ましいと思うけどなあ……」

「分かる。身長高えし、体格もいいし、イケメンだしなあ……」

「褒めても何も出ませんよ?」

「いらんわ!!」

などと話ながら待っていると、準備が終わったのか女子達も出てきた。

白崎は上下白色のセパレートタイプのビキニタイプであり、スラツとした体型によく似合っている。雫は水色でシンブルなデザインのビキニタイプでスタイルの良さも相まってか少しエロく感じる。園部の方はまだ幼い感じが出ており、純情な印象を受ける。中村は腰に大きなリボンをついたオレンジ色のホルターネックタイプで露出は多めだが可愛らしい見た目と性格のせいで色気があまりない。谷口は濃い緑色のワンピースタイプの水着で清楚感があり、普段の元気さとはまた違う雰囲気を感じる。一花さんは赤と黒のボーダー柄ビキニで肌の面積が多く、谷間が見えるくらい大きい胸が強調されている。

「どう…… かしら?」

全員を代表して、雫が聞いてくる。正直に言えば全員が魅力的で目を離せないのだが

……

「……皆、よく似合ってますね」

「うん、すつごく可愛い……」

俺に続いて、ハジメや幸利達も感想を言う。すると、白崎が真っ先に反応し、飛び跳

ねた。

「本当?!良かった!!」

「よ、よかった……」

口々に喜びの声を上げる皆を見て、自然と笑みが溢れる。すると、一花さんが話しかけてきた。

「ど、どう……かな?変じゃ……無い?」

一花さんは恥ずかしそうにしながら俺に聞く。

「ええ、とても綺麗で可愛らしいと思います」

素直に思った言葉を口にする、一花さんは顔を真っ赤にした。

「ありがとう……」

それだけ言うと、白崎達の方へ駆け出した。

「そろそろ行きましようか」

「はい!」

「わかりました」

悠花を先頭に、海へ向かって歩き出し、俺らもそれに続く。砂浜に着くと既に多くの人で賑わっていた。

「早速だけど遊ぼうぜ!!」

そう言った浩介を筆頭に、それぞれ遊ぶ場所を決めていく。

「よいしょっ……と」

俺はビーチパラソルを立てて、レジャーシートを広げる。それから荷物を置くと、その隣に腰掛ける。

「ハジメ達は泳ぎに行つたみたいですね」

「……そうだな」

恭弥と用意した飲み物を飲みながら海を見つめる。目の前に広がる光景はとても美しく。

「綺麗だな」

思わず声に出る程だった。そんなことを思いつつ缶コーヒーを飲む。

「……なあ、恭弥」

「なんだ？」

「俺さ、ここにいていいのかな？」

何気なく、疑問を漏らした。それに対して、恭弥は何も言わずにコチラの言葉を待っていた。

「……どういう意味ですか？」

「そのままの意味だ。俺は、お前達に幸せになって欲しいと思つている。だから、俺が居

なくても、幸せな生活を送れるようにしてきたつもりだが……やっぱりダメだな。……心配になるんだよ」

そう言つて、遠くにいるハジメ達を見る。楽しそうに遊ぶ彼女達を見ると安心するが、それと同時に不安にもなる……本当は、自分がこの場においていいのだろうか……「……それは違いますよ」

いつの間にか、俺の隣に来ていた柊人は俺の目を見ながら話す。

「貴方は確かに僕たちの為に色々としてくれて、今もこうして付き合ってくれています。でも、今のこの状況は零斗が作ったものではありません。みんなが望んだ結果です。それに……」

そこで一旦言葉を区切ると、優しい笑顔を浮かべながら……

「僕たちは今の生活が好きですよ」

そう言つてくれた。

「……ははっ、そっか……それなら、いいんだけどな……」

「大丈夫ですつて。ほら、せつかくの旅行なんですから、楽しまなきや損ですよ?」

「ああ、分かったよ」

柊人に手を引かれながら、ハジメ達の居る方へと歩いていく。

「零斗もおいでよ!!楽しいよ!!」

ハジメが満面の笑みで俺を呼ぶ。

「……………すぐ行きます」

手を振りながら、再び海の方へ向かう。……………今はこれの良いのかもしれないな。

「今日は遊び倒すぞー!!」

「おおおおおおお!!」

男子達がテンション高く叫び、女子もそれに釣られてか、元気な声で返事をする。

「最初は どうするー!」

「ビーチバレーで どうでしょう?」

「賛成! 私もやりたい!!」

俺の提案に悠花が賛同して、他の人達もそれに賛成したので、最初の種目が決まった。

チーム分けは俺とハジメ、悠花と白崎、柊人と刀華、園部と雫、一花さんと鏡花、幸

利と浩介、中村と谷口となった。

「華が……………無い……………」

「うるせえ……………どうしろっていうんだ……………」

浩介と幸利が項垂れ、それを見ていたハジメと柊人が苦笑いをしながらコートに入る。初戦は園部、雫チームと一花、鏡花チームだ。審判役は俺と柊人になった。

「頑張りましょうね、一花ちゃん」

「は、はい！よろしくお願いします！」

一花は緊張しているのか、ガチガチになっていた。そんな中、笛の音と共に試合が始まる。

「行くわ……よ！」

鏡花チームからのサーブだ。鏡花はボールを高く上げると、助走をつけて走り出し飛び上がる。こうして俺達は楽しくビーチバレーを始めた……筈なんだが……

——十数分後——

「フッ！」バゴンッ！

「甘いッ！」

到底、ビーチバレーのサーブをやっているとは思えない轟音と共にボールが相手チームのコートに落ちる。そして、それを拾うのは刀華である。

何故こうなったかと言うと、序盤こそ、普通のバレーをしていたのだが……俺とハジメチーム、柊人と刀華チームの対戦になった途端に、こうなってしまった……

「柊人！」

「ナイス、トス……せらあ！」

「ふぐあ!!」

柊人の殺人スパイクが俺の顔面にクリーンヒットする。痛つてえ……

「ごめん、つい」

……『つい』で、人を殺せるスパイクを放たないでくれませんか？

「そちらがそのつもりならこちらも本気で行かせていただきます。ハジメ、トスは任せます」

「う、うん……」

お鬼いさん頑張ちやうぞー（殺意）！俺はボールを上投げると、タイミングを合わせてジャンプし、腕を振る。

「……フツッ！」ズドンッ！

その瞬間、砂浜に大きなクレーターが出来上がり砂煙が巻き起こる……と思われたが……

「狙いが見え透いてるわー！」

ボールの落下地点に刀華が横つ跳びで入り込み、ボールを弾き飛ばす。なんて反射神経だよ……

「柊人！決めてしまいなさい！」

「了解！」

柊人は弾丸のように飛び出すと、空中で体を捻り……



「はっ！」

放たれた凶弾は、ハジメのいる場所へと突き進む。

「ひゃあ!? えっと、えいっ！」

しかし、ハジメは慌てながらも綺麗なレシーブをして、俺の方へとしっかり飛んで来た。

「ハジメ！ 見せ所ですよ！」

「ええ!？」

ハジメは戸惑いながらも、しっかりと構えを取ると、勢いよく振りかぶった。全力のフルスイング……そして、綺麗に空振りするハジメだった。

「……ゲームセット。勝者、終人&刀華チーム」

試合終了の合図と同時にギャラリーが声援を送る。

「ドンマイです、ハジメ」

そう言つて、肩に手を置く。すると、恥ずかしかったのか顔を真っ赤にして俯くハジメ。

「さて、次はどうしましょうか？」

一度、恭弥の所まで戻り、水分補給をしながら考える。

「先にお昼ご飯にしない？ 私お腹空いちやつて……」

悠花が照れ気味に言う。腕時計を見ると、時刻は十四時を過ぎていた。そろそろ昼食の時間か。

みんなも同意してくれたようで、全員で海の家に行くことに決まった。海の家は焼きそばやイカ焼きなど定番メニューから、浜焼きなんかもあり、かなり品揃えが豊富だった。

「全員、決まりましたか？」

全員が手を挙げてくれた。それを見た店員さんが注文を聞いてくる。それぞれ頼んだものを紙に書き込むと、会計を済ませて席に戻った。

しばらくして、注文した料理が運ばれてきた。

「おお……美味しい……」

一口食べると、悠花が感動したように呟いた。

「確かに。これは中々いけますね……」

俺も食べながら呟く。ちなみに俺が注文した料理は、生シラス丼だ。魚好きには堪らない一品だと思う。

「さて、昼食も済んだ事ですし……ここから先は自由行動にしましょうか」

俺の提案に皆賛成してくれて、昼食後は各自の自由時間となった。女性陣はバナナ

ボートをやるようでそっちに行つた、恭弥と終人、浩介、幸利はサンドアートをやつていた。俺とハジメは釣り道具の貸出があつたから、海釣りをする事にした。

「釣れるかなあ？」

「まあ、やってみないと分からないです」

竿を借り、餌を付けて海に投げる。二人で並んで反応があるまで待つ。ゆつたりと時間が流れてゆく。

「……ん？なんか引いてるよ！」

ハジメの声につられて見てみる。確かに何かしらの感触を感じた。慎重にリールを巻き上げてみると……

「おお！かなりの大物ですね!!」

そこに居たのは七十センチほどもあるカサゴだった。

「すごい！こんな大きいの初めて見たかも！」

その後もハジメの協力もあつて魚を何匹か釣る事ができた。そして、時間が十七時半になり、撤収することになったのだが……

「全然釣れないじゃん……」

ハジメが意気消沈しながら呟く。

「そんな時もありますよ……」

慰めるように肩を叩き、別荘に戻る。既に俺とハジメ以外のメンバーは帰ってきていたようだった。

「二人ともおかえり〜」

「ただいま帰りました。夕食の準備するので、少し待っていてください」

荷物を置きながら言う。帰る途中で買った野菜などの下処理から初める。献立を考えながら、キッチンへと向かうが……

「私も手伝う……来る時のお礼もしたいし」

園部がやって来て、手伝ってくれることになった。園部は料理の腕が良いので、とても助かる。食材を洗い、カットしていく。

ある程度準備が終わったら、調理開始だ。

「それじゃあ、始めましょうか。よろしくお願いします、園部さん」

「うん、任せて」

園部の包丁捌きはとても綺麗で無駄がなかった。俺はその様子を見ながら、釣ってきた魚を卸していく。今日のメインは刺身盛り合わせにすることにしたので、鮮度が落ちないようにスピード勝負になる。俺達は黙々と作業を続けた。

「よし、終わりですわね」

「そうだね。結構な量になったけど大丈夫そう?」

「はい。これくらいなら余裕ですよ」

そう言つて、魚の切り身を冷蔵庫に入れていく。全ての仕込みが終わる頃には十九時になつていた。

「そろそろみんなを呼んで来てくれませんか？」

「了解。行つてくるわ」

そう言つて園部を見送り、皿の用意をする。そして、二十分ほどして全員が集まつた。

「さて、それでは食べましょうか」

『いただきます！』

全員で食事を始める。魚は新鮮なだけあつてどれも美味しかった。特にカサゴは絶品だった。

「うくん！美味しい！」

「本当ね」

悠花と刀華が絶賛している。他のみんなも満足そうにしているようだ。

『ごちそうさまでした！』

「はい、お粗末さまでした」

全員が完食したのを確認してから、片付けに入る。食器を流し台に置き、水に浸す。リビングに移動すると、ゲームをしているハジメ達がいた。どうやらみんな、夜通し遊

ぶつもりらしい。

「遊ぶのはいいですが、程々に……ですよ？夏休みだからと言って油断していると体調崩しますからね？」

注意すると、全員が苦笑いしていた。これは絶対聞かないパターンだな……  
ため息を吐きつつ、二階に上がり、ベランダに出る。そこには、月明かりに照らされている海が広がっていた。

「あれ？湊莉君？」

声をかけられたので振り向くと、一花さんが立っていた。寝る前だったのか、淡いピンク色のネグリジエ姿だった。

「こんな時間まで起きているとは……感心しませんね」

少し咎めるように言う。少し頬を膨らませながら、俺の隣まで歩いてくる。

「それは、湊莉君にも言える事でしょ？」

「……フフフ、そうですね」

言い返せなくて笑ってしまう。一花さんもつられて笑う。

「星が綺麗ですね」

「……ええ、そうですね」

あれえ？なんで、一花さん顔真っ赤にしてんです？……ああ、そういう感じのやつ？

「ひゃい！」

「……月も綺麗ですよ？」

そんな彼女に微笑みかける。俺の言葉の意味を理解したようで、顔を更に赤くする。

# 酔いに任せて……

S i d e 零斗

これを読んでいる君(成人済みの方)はお酒は好きかな?俺も前世じゃ、嗜む程度だったが呑んでいたよ。そんな君達はお酒に強い方かな?俺はまあまあ強い方だったよ……未成年の今じゃ、身体が変わったし強いかどうかは知らないけどね。

「んう〜〜れいろお……」

「……………」ポッー

「なんでさ……………」

…………お酒って怖いね。普段は絶対にこんな事しない刀華と八重樫が甘えてくるなんてさ…………ああ、もちろん呑ませてないよ?雰囲気酔いつてやつだ。

「マスター…………今世でも女難の相があるようだな…………」

エミヤが生暖かい目で見つめてくる。

「その目は辞めてください…………自分が惨めに思えてきますから…………」

なんだろう…………この居心地の悪さは…………というか、この二人は酔うとこうなるのか…………普段の様子からは想像できないくらい甘えん坊になるんだな。



「どうしてこうなっただんでしょう……」

俺は刀華の頭を撫でながら呟く。ちなみに俺が居るのは二階の自室で、一階のリビングではサーヴァント達が酒盛りしてる。

なんでこうなっただんでろうなあ……

---

数時間前

---

「坊主！一緒に呑もうぜ！」

「安珍様！わたくしがお酌致します！」

ドアがぶっ壊れるんじゃないかってくらい音を立てて開かれる。開けた張本人であるキヤスニキは両手に酒の入ったコンビニ袋をぶら下げ、清姫は相変わらずだった。

「……なんでさ」

思わず呟いてしまったのも仕方ないだろう。

「お、お邪魔します」

「失礼するぞ、マスター」

キヤスニキの後ろから顔を覗かせたマシユと、その隣にいるエミヤ。なんだこの組み合わせ。いや、エミヤなら安心だけどさあ……なんかこう、意外というか……

「おい坊主、なーんか失礼なこと考えてないか？」

「いえ全く」

勘が鋭いにも程があるだろ。

「んで？ どうしたんだ？」

俺の質問に答えたのは清姫だった。

「安珍様にご奉仕するためですわ!!」

「あ、そういうのは間に合ってるから」

そう返すと清姫は一瞬だけ悲しげな表情を見せたがすぐにいつも通りに戻った。

そんなことを気にする様子もなく槍ニキはテーブルの上に酒を置いていく。そして

そのままソファに腰掛けて、酒を開けて飲み始めた。

「すまないね、ドラマの撮影が終わったところでね、その報告を含めて打ち上げをする事

になったんだが……」

「まさかとは思うが、俺の家で打ち上げやるって事になったのか？」

エミヤの説明に俺はため息をつく。確かに撮影終わったら打ち上げとか普通にあると思うけどさあ……せめて連絡くれよ。エミヤとマシユは申し訳なさそうに頭を下げた。そんなやり取りをしているうちに他の連中も集まってきた。

「ふつ、貴様の家で飲むなど滅多に無い機会だからな。来てやったぞ！」

「別に呼んでねえんだけど……」

英雄王は腕を組みながら偉そうに踏ん返り返っている。

「センパイ、貴方のラスボス系後輩が来てあげましたよ♡」

「あ、そう……玄関は回れ右して、突き当たりにあるぞ。とつと帰りやがれください」  
「酷くないですか!?!」

B Bはぶつくりと頬を膨らませて抗議してくるが無視だ。

「主殿、拙僧も馳走になりに来たでござる」

「私も来ちゃいました♪」

「あら、賑やかな宴会ね」

次々と部屋に入ってくるサーヴァント達。もはや大所帯だ。しかも、みんな手土産持参で来るものだから余計にタチが悪い。とりあえず、キッチンから人数分のグラスを持ってきて注ぐ。

「おっ! 気が利くじゃねえか! 坊主も一杯どうだ?」

「いらん、俺は未成年だ」

「いいじゃねえか、今日は無礼講だぜ?」

「無礼講の意味わかってるか?」

呆れたように言う俺に構わず、キャスニキは勝手にコップを取って酒を入れていく。

それを見ていた清姫も負けじとお酌をし始めた。

「旦那様！わたくしのお酌で飲んでくださいまし！」

「いや、大丈夫だから……」

「まあまあ、そう言わずに飲めや」

「ちよ、待て……」

結局、無理矢理口の中に流し込まれた。

「んぐつ……げほつ……まじで無理やりすぎるだろ……」

「ほれ、もう一杯」

「もう呑まんからな……」

俺は差し出されたコップを受け取らず、手で制する。

「すまんが、俺は自室に戻るからな」

「ええくくなんでだよ」

「お前らが酔った時に何するかわかったもんじやないからだ」

酔うと性格が変わる奴もいるからな。俺の貞操が危ない後ろからはブーイングが聞こえてくるが気にしない。自室に入り、ベッドに倒れ込む。さっきの酒が効いたのか、体が熱い。

「はあ……軽く汗でも流すか……」

俺は重い体を起こして浴室に向かう。服を脱ぎ捨て、シャワーを浴びる。汗を流しながら、先程の事を考える。

「なんか妙に疲れたなあ……特に動いた訳じゃないし……まあいいや、寝よ……」

そう呟きながらも、体は熱を帯びている。違和感を覚えながらも自室に戻り、ベッドに腰掛ける。

(なんでこんなに暑いんだよ……)

そんなことを考えていた時だった。不意に扉が開く音がして振り返るとそこには刀華と八重樫がいた。二人とも俯いていて、表情は何えない。

「どうしましたか？それより何故私の家に？」

「……………」

二人は何も答えず、こちらに向かって歩いてくる。俺の目の前まで来たところで足を止め、ゆっくりと顔を上げた。

「……………え？」

二人の表情を見て思わず声が出た。目は虚ろで焦点が合っていない。頬が僅かに赤みを帯びている。

「ど、どうしたんですか…………？」

俺の声には反応せず、ただじっと見つめてくる。

「あの……ちよつと……怖いですよ？」

俺がそう言うのと、二人は何かをブツブツと呟いている。何を言っているのかわからないが、あまり良いことだけはわかる。すると突然、刀華が俺を押し倒してきた。

「え？ちよ、まつ……!!？」

抵抗するも、完全に組み伏せられてしまった。俺の上に馬乗りになっている刀華の表情はどこか色っぽいものを感じるが今はそんなことを考えている場合ではない。

「あ、あのですね？これはどういう状況なのか説明して欲しいのですけど……」

俺の言葉を無視して、彼女は首筋に顔を近づけてきた。そしてそのまま、顔を埋めて匂いを嗅ぎ始めた。

「……くん……くん……すうーはあー」

「んっ……くっふっ……」

生暖かい吐息が肌にかかり、背筋がゾクツとする。

「あ、あの……本当に止めてください……」

「……石鹸の……いい香りがします……」

「ちよつとたげ……汗の匂いが……残ってるけど……この匂い好きかも……」

俺の話など聞く耳を持たず、トリップし続けている。やばい、このままだとまずい……なんとかしてこの状況から抜け出さないと……しかし、両腕はガッチリ掴まれて

おり身動きが取れない。必死にもがくも、ビクともしない。

「マスター、こちらに二人組の——失礼した!」

助けが来た!と思つた矢先にすぐに引き返そうとするエミヤ。

「ちよ!?!見捨てる気ですか!?!」

「すまない!私にはどうすることもできないんだ!」

俺は渾身の力を振り絞つて拘束から逃れようとするも、やはりビクともしない。はあ……しやーない……

「刀華」

「……何かしら」

「離れてくれないかな?」

「いや」

即答されてしまった。

「いや、離れてくれないと困るんだけど……」

「私は困りません」

……ダメだこいつ早く何とかしないと……今度は俺の膝に頭を置き、頬ずりし始める  
刀華。

「んっ」

「ちよ、やめ……」

俺は慌てて彼女を引き剥がそうとした時だった。

「……むう」

刀華とは逆の方から声が聞こえたのでそちらを見ると、八重樫がいた。彼女は俺の顔を見上げている。

「えつと……八重樫さん？」

「なに？」

「どうして私の背中に抱き着かれていらつしやるのですか？」

「こうしたかったから」

俺は助けを求めるようにエミヤを見るが目を逸らされた。

「あの……出来れば離れて欲しいのですが……」

「嫌」

「ホントにどうしましょう……」

——現在——

と、こんな感じで今に至る訳だが……どうすりゃいいんだ？無理矢理引き剥がすのは危険やし、かと言って説得するのは絶望的だし……こうなったら最後の手段だ……

「刀華、こちらに顔を向けられないかい？」



「なに?」

彼女は素直に従ってくれたのでその隙を突いてキスをした。

「んっ…………ちゅ…………」

「んぐっ?!んう…………んっ…………」

舌を入れて歯茎をなぞったり、彼女の口内を犯していく。少ししてから口を離すと、唾液が糸を引いていた。刀華は顔を真っ赤にして……

「…………キュー」

気絶してしまった。刀華はこれでいいとして…………とりあえず、八重樫をどうにかしないとな…………

「八重樫さん、一度離れて頂いてもよろしいでしょうか?」

「…………（フルフル）」

無言で首を横に振る八重樫。

「あの…………そうされると動けないのですが…………」

「…………（フルフル）」

まともや黙ったまま首を振る。…………仕方ないか。あまりこういうことはしたくなかったが…………俺は彼女の肩に手を置いてグッと引き寄せた。簡単にバランスを崩した彼女が倒れ込んでくるのを抱き留め、そのままベッドに押し倒した。

さっきまでの俺と同じ体勢になったところで、俺は彼女に覆い被さるような形になる。彼女は驚いたような表情を浮かべていた。

「私だって、男なんですから……あまり派手な行動をするようなら……襲っちゃいますよっ。」

そう言つてニヤリと笑うと、八重樫は顔を赤くして視線を泳がせ始めた。しばらくすると観念したのか小さくコクリと首肯する。

「れ、れいとになら……襲われても……いいよ」

「……そういうことを軽々しく言わない。じゃなきや……」

ゆつくりと顔を近づけ、八重樫の唇に指をあてがう。その上から自分の唇を重ねる。

「こうして、本気にしてしまいますよ?」

「ひう……」

恥ずかしくなったのか顔を両手で隠してしまった。まあ、これで大人しくしてくれるだろう。俺は彼女から体を離し、ベッドから降りて立ち上がり、自室を出る。

「相変わらずだな、共犯者（マスター）よ」

「見てたのかよ……趣味悪いだな……」

影からエドモンがぬるりと現れて話し掛けてきた。俺はそれに苦笑いで返すことしか出来なかった。

「それで？二人を酔わせたのは？」

「検討は付いている筈だろう？あの数学者だ」

「あの腰痛持ちの老害ジジイ……エド、客室に二人分の布団敷いといてくれ」

俺がそう言うのと彼は一瞬目を見開き、すぐにいつものキザったらしい笑顔に戻り、客室に向かって行った。

(勝手に動かんでくれよ……俺の体……)

飲まされた酒の影響なのか、理性が軽く飛び、普段じゃ絶対にしないであろう行動を取ってしまったことに心の中でため息をつく。

## Happy Halloween!!

Side 零斗

『10月31日』……それはハロウィン。子供たちがお菓子を貰いに家々を回るイベントである。カルデアのメンバー達からは大量のお菓子とイタズラ(○)を貰ったせいかし疲れたが……

「トリック・オア・トリート!」

明るく快活な声が耳に届く。どうやら来たみたいだな。玄関を開けると可愛らしい衣装に身を包んだ子供達がカボチャモチーフのカゴを持って笑っていた。

「いらつしやい、今年もかわいい仮装ですね」

そう言つて俺は子供たちの頭を撫でる。この子たちは毎年来てくれる常連さんの子供達だ。

「二人一つですよ」

「はい!」

俺からお菓子を受け取つた子供達は嬉しそうな表情を浮かべて走つていった。扉を閉じて、一度リビングまで戻る。さてと……もう少ししたら次の客が来る時間かな?

コンコン「噂をすればなんとやら……だな」

キツチンに行き、渡す用のお菓子を幾つか持ち、玄関まで向かう。

「トリック・オア・トリート……なんーて……」

「一花さん？」

そこには魔女の衣装を着た一花さんがいた。露出は少ない方だが、その分ボディラインがはつきりしていて目のやり場に困ってしまう。

いつもより大人っぽい雰囲気の一花さんに少しドキマギしながら平静を装って話す。  
……まあ、こんな美人が目の前に現れたんだ。仕方がないと思う。うん。

「……どうですか？ 似合ってますか？」

くるとその場で回り、衣装を見せてくる一花さん。

「はい。とてもお綺麗ですよ」

素直な感想を伝えると彼女は頬を赤らめて微笑みながら言った。

「ありがとうございます！」

頬を僅かに赤らめながら、言う一花さん。うーん、いい笑顔。……つと、そうだ忘れる所だったな。俺は手に持っていた袋からお菓子を取り出した。

「どうぞ……ハッピーハロウィンってやつです」

「わっ！ 嬉しいです！ じゃあ私からも……ハッピーハロウィン！」

一花さんから渡されたお菓子を受け取る。中にはカヌレが入っていた。

「ありがとうございます」

「じゃあ、私はこれで失礼しますね」

「ちよつと待つてもらえませんか？」

「え？」

俺は咄嗟に彼女の手を掴む。いきなり手を掴まれた一花さんは驚いたような表情をしている。

「この後……大体八時頃からいつもの方達でハロウィンパーティーをするんですが……良ければいいのですが、参加しませんか？」

「ふえ!？」

なんか変なこと言ったか？俺？ 一花さんの顔を見ると、顔が真っ赤になっている。

「えつと……あの……その……」

俯きがちに視線を泳がせる一花さんを見てるとなんだか申し訳なく思えて来る。

「すみません。急にそんなこと言われても迷惑ですよね……」

「いえ！全然大丈夫です！寧ろ行きたいくらいですけど……」

「本当ですか！よかったです……」

安堵のため息をつく。断られたらどうしようかと思つたよ……

「でも、なんで誘ってくれたんですか？」

首を傾げて聞いてくる一花さん。可愛い……じゃなくて。理由か……正直特にこれといった理由はないんだよな……強いて言えば……

「日頃の感謝と……せつかくの催し物ですし、仲のいい人達と一緒に過ごしたいと思  
いまして……」

「そっか……嬉しいなあ……」

そう呟くと一花さんは笑った……うん、やっぱりこの人には笑って欲しいな。

「じゃあ、お言葉に甘えて参加させてもらいます」

その言葉を聞けて安心した。そして、時計を確認するともうすぐ七時になるところ  
だった。

「後一時間ほどで開始時間ですし、家の中でお話でもしていきましょうか」

「いいですね！」

「フフフ……元氣ですね……それでは、少し準備してきますね」

一花さんをリビングに案内して、俺は部屋に戻り、仮装はする予定ではあったのだが  
……如何せんなあ……

ベッドに放り投げられているホッケーマスクとポロポロの衣服を見やる。はあ……  
ミスクレーンさん、クオリティ高いのは良いけど……これはなんでもよお……

「これじゃ、子供達にトラウマ植え付けかねんぞ……」

とりあえず、服だけ着替える。ホッケーマスクは服の内側にしまい込み、部屋を出る。  
「湊莉……くん？……その格好……」

「……何も言わないでください……」

リビングに戻ると一花さんは目を丸くしていた。俺は自分の仮装が恥ずかしくなり、思わず顔を手で覆う。

「ごめんなさい！変な意味で驚いてるんじゃないんですよ！すごく似合ってます！カット  
コイイと思います！」

「ああ……そう言ってくれるとありがたいです……」

少し気を取り直したところで、テーブルに飲み物を置きながら座っている一花さんの  
向かい側に腰を下ろす。

「今更なんですけど、その衣装って……」

「ええ……まあ、簡単に言えばジ○イソンです」

そう言うのと一花さんは苦笑いを浮かべた。あれ？なんかマズかったかな……

「もしかして……何処かおかしい所ありますか？」

「いえ！そういうわけじゃないですよ！ただ……なんと言いますか……その……私としては……湊莉君なら吸血鬼とか、狼男の方が似合うんじゃないかなあって思いました



……」

「ああ……なるほど」

「一花さんの言葉を聞いて納得する。確かに、言われてみると……うん、そっちの方がいい気がしてきた。」

「……よし、ちよつと買つてきます」

「え!？」

「冗談ですよ」

慌てる一花さんを見て笑う。本当に面白い反応してくれるよな。

「……なんか酷いです……」

頬を膨らませながら拗ねる一花さん。可愛い。

(ピンポーン……)

玄関のチャイムが鳴る音が聞こえてきた。誰か来たみたいだな。まあ、多分いつものメンバーだろう。玄関のドアを開けるとそこには予想通り、仮装をした皆がいた。

「トリック・オア・トリート〜!お菓子を寄越せー!」

「はいはい……」

相変わらずの悠花である、ちなみに服装は黒猫モチーフの魔女だ。その後ろにはフラケンシュタインに扮する恭弥に、ペスト医師の格好の柊人、ゾンビシスターの鏡花、

キョンシーの格好のユエ、全身黒タイツでカボチャ頭の浩介？が居て、何故かクラシカルタイプのメイド服のハジメに、ドラキュリーナの刀華が居る。

「うう……なんで僕がこんな格好なんだよお……」

「右に同じく……」

「仕方ないじゃん！くじ引きで決まったんだからさ！諦めなよ！それより早く！お菓子！ちようだい！」

嘆く二人を他所に、悠花は俺に向かって手を差し出してくる。

「お菓子は後で渡しますから……他の方達は？」

「香織ちゃん達は少し遅れるってさ……なんでも道中で、騒いでた人達が軽トラを横倒しにして問題になったらしくて、交通規制が入っちゃたみたいで……」

それを聞いた俺は頭を抱える。またか……最近こういうの多いんだよな……ちなみに今日来るはずの他のメンバーは白崎、雫、谷口、園部、中村、幸利の六人だ。

「了解しました。とりあえず、中に入ってください。準備は出来ているので」

「お邪魔しまーす！」

全員をリビングに通す。

「あつ、いつちゃん！」

「悠花さん、こんばんわ。衣装とっても似合ってます可愛いですね」

「フフーン、そうでしょ?」

そんな会話をした後は、皆ハロウィンパーティーを楽しんだ。作った料理に舌鼓を打ち、ゲームをしたり、写真を撮ったりと、賑やかな時間を過ごしていたんだが……

「……電車止まってますね」

「復旧の目処は立って無いってさ……」

どうやら、先程の事故で電車の運行にも影響が出てしまったらしい。そして、現在時刻は午後十時三十分になる、復旧したとしてもここから駅までは少し遠いので、終電には間に合わない。

「じゃあ、お泊まり会に変更だね!」

悠花が元気よく宣言する。それを見た一花さんは、嬉しそうに笑っていた。

「フフツ……では、今夜は皆で楽しみましょうか」

ふと、外を見れば、綺麗な満月が夜空に浮かんでいる。この季節の夜はとても冷え込むが、その分月がずっと綺麗に見える。

「ふう……」

自室のベッドに座り込み、一息つく。結局あの後は、皆でゲームしたりして盛り上がった。それから少し経った今は、各自の部屋に戻って寝る支度をしているところだ。

(コンコン……)

部屋の扉がノックされる音が聞こえる鍵を開けて、部屋に招き入れる。

「……こんばんわ」

「刀華……どうした？こんな夜更けに」

入ってきたのは刀華だった。さっきまでの衣装とは違い、今はサキュバス風な露出の高い黒いドレスに身を包んでいた。妖艶な雰囲気の彼女に見惚れてしまう。

「貴方なら分かるわよね？恋人が夜更けに部屋を訪れる意味が……ね？」

「……」

彼女の言葉を聞いて無言のまま抱き寄せると、そのまま唇を重ねる。お互いの存在を確かめ合うように、何度もキスを交わす。

「んっ……」

「……いいのかわ？」

「ええ、もちろんよ」

その返事を聞くと同時に彼女をベッドに押し倒す。

「お菓子はいいから悪戯させて  
Trick yet Treat」

耳元で囁きながら、首筋に顔を埋めて噛み付き、痕を付ける。今夜は長くなりそうだな……

## そのウサギ、異郷から来たりて

Side 零斗

「ああ……疲れた……」

家に帰ると、俺はすぐにソファに倒れ込んだ。

「なんで休日にこんな疲れなきやいけねえんだよ……」

今日は休日だった。それがどうして、アヴァロンの書類仕事に追われていた。他にもドラマ撮影のスケジュールの調整に雑誌の撮影をするモデル達のメイクに付き添い、撮影スタジオの片付け等々……

まあ俺がやらなくてもいいような仕事も任されたが、そんなことより休日を潰されたことの方が問題だ。

しかし、もう既に夜9時。流石にこれ以上仕事をする気にもならないし、風呂に入つて寝――

(ピンポン……)

インターホンが鳴る音が聞こえてくる。多分、例の奴等だろうな。俺は玄関に向かう。

「零斗！よかった……ちよつと力貸してくれる?!」

扉を開けると、生傷だらけのハジメがバニーガール？らしき格好をした少女を背負っていた。少女の意識は無く、身体には目立った外傷は無いが、酷くやせ細っていて骨が浮いて見えてしまう程だった。

「……分かりました、事情は後程聞きます。まずは、その方を二階の客間に運んでください」

「うんー！」

ハジメは女の子を背負ったまま、階段を上がっていく。暖かいお湯を入れた桶とタオルを持ってハジメのいる客間に向かう。

「それで……何があつたんですか？」

ハジメが連れてきた女性を見て、俺は眉をひそめる。明らかに何かしらの事件に巻き込まれているのは間違いない。だが、今はそんなことを気にしてる場合ではない。まずはこの人をどうにかしなければ。

俺は彼女の首元に指を当てて脈を測る……まだ生きてはいるが、かなり衰弱している。にしても……

「随分と露出度の高い格好をしていますね……」

正直目のやり場に困る。それに、よく見るとこの人、頭に兎のような耳がついている。

「かなり完成度は高いですね、特にこの耳……ん？」

女性の頭についている耳をよく観察すると、微かに動いているように見えた。まさかと思いい、俺は彼女のウサミミに手を伸ばす。そつと、優しく触れてみる……本物だ。

付け根の部分まで辿っていくと、そこには確かに人の肌があり、しっかりと血が通っていることがわかった。

「……とりあえず命に別状はなさそうですね」

「その子……大丈夫なの？」

「ええ……怪我とかもしてないみたいですし、重度の疲労と軽い栄養失調状態ですね」

「……良かった」

ほつと胸を撫で下ろすハジメ。しかし、そうなるとこの人一体なんなんだ？

「……とにかく、暫く安静にしていれば目を覚ましますよ。それまでゆつくり休ませましょう」

「そうだね……ありがとう零斗」

それから、彼女をベッドの上に寝かせてからリビングに戻り、テーブルを挟んで向かい合うように座る。

「……それで？今回はどんな面倒事に首を突っ込んだんですか？」

「うっ……やっぱり怒られるよね……」

当たり前である。いつもの事ながら無茶ばかりするからこうなるのだ。少しくらい反省して欲しいものである。

「と言つても、路地裏であの子が倒れてるのを見つけて、つい……」

『『つい』じゃないでしょう……』

まあ、でも今回に限つて言えば仕方がないかもしれない。目の前で倒れている人が居たら助けようとする気持ちはよく分かる。

「……はあ、もういいですよ。次からは気をつけて下さいね」

「ごめんなさい……」

しゅんとするハジメを見てると何故かこつちが悪い事をした気分になる。俺は小さくため息をつく。

「もう夜遅いですし、泊まっていった方が良さそうですね」

「……そうだね」

時刻は既に午後十一時を過ぎており、終電も逃してしまった為、今日はこのままここに泊まってもらふことにした。

「私は彼女の着れそうな服を見繕つて来ます、その間彼女についてもらえますか？」

「うん、分かったよ」

俺の部屋を出て、自室に向かい、クローゼットの中から適当な服を取り出して再び少



女の眠る部屋に向かう。

（あの子は一体なんなんだ？明らかにこちらの世界の者じゃねえし……それこそユエも人間じゃないみたいだし……）

そんなことを考えつつ、未だに目を覚まさない少女の顔を見る。

「大丈夫かな……」

「命に関わる様な怪我はありませんから、心配する事はありませんよ……まあ、目覚めた後、どうなるかはその時になってみないとわかりませんけどね」

スヤスヤと寝息をたてて眠っている少女を見ながら考え込んでいると、少女がゆつくりと目を開く。そして、俺の顔を見ると驚いたような表情を浮かべた。

「お目覚めですか？体調の方はどうでしょう？どこか痛むところとかありますか？」

少女は身体を起こすとキョロキョロと辺りを見渡す。その瞳には不安の色が浮かんでいて、今にも泣き出してしまいそうだった。そんな少女の頭を優しく撫でるハジメ。

「大丈夫だよ、大丈夫……」

（まるで母親みてえだな……）

少女はハジメの言葉を聞いて安心したのか、少しずつ落ち着きを取り戻していく。

「……ここはどこですか？あなた達は誰？」

「私の名前は零斗、こちらは私の友人のハジメ……君を助けた張本人です。さて、ここが

何処なのかという質問に関しては貴女の望む答えはあげられませんが、少なくとも貴女が思っている場所ではありませんよ」

その言葉を聞いた瞬間、少女の目つきが鋭くなり警戒心を強めるが、すぐにその目は弱々しいものへと変わる。俺はなるべく優しい口調で話しかける。

「まずは落ち着いてください、何も取って食おうなんて思っていないですから……ただ、いくつか聞きたい事があるんです」

「……はい」

「ではまず、お名前を教えてくださいませんか？」

「……名前……は……」

名前を聞かれると、彼女は顔を俯かせる。やはり、何か事情があるようだ。俺は彼女の手を取り、そっと握る。すると、彼女の身体が小さく震える。

「大丈夫……大丈夫です」

「……はい」

もう一度、今度はしっかりと手を握り直す。そうして暫くの間待っていると、彼女がポツリポツリと話し始めた。

「……私はシア・ハウリアと言います……それ以外は何も覚えてません……」

彼女の話によると、目が覚めたら路地裏に倒れていて、そこからの記憶が無いらしい。

「……なるほど、分かりました。ありがとうございます」

「いえ……あの、それで、私はこれから……」

「……とりあえず、暫くはここで暮らして貰います。行く宛も無いんでしよう?」

「は、はい……」

そう言うと、また下を向いてしまう彼女。ハジメはそんな彼女を抱きしめる。いきなりの行動だったので少し驚いてしまった。

しかし、それ以上に驚きなのは彼女の反応である。最初は戸惑っていたが、次第に肩を震わせ嗚咽混じりの声を出しながら泣いていた。

「うっ……ぐす……ひっく……」

それから暫く経って、ようやく落ち着いた彼女に改めて自己紹介をする。

「では、改めて……これからよろしくお願ひしますね、シアさん」

「はい、ええーつと……零斗……さん」

「呼び捨てで構いませんよ」

そういうと、少し照れた様子を見せる。

「わ、わかりまひた！」

……嘸んだな。俺は苦笑いをしながら、ハジメと顔を見合わせるのであった。

「さあ、もう遅いですし寝ましようか。明日は色々と忙しくなりそうですしね……」

「そうだね、じゃあ僕はソファア借りてもいいかな？」

「ええつと……私と一緒にベットで寝ますか？」

シアがボソリと呟き、それを聞いていた俺とハジメの動きが止まる。まさかの発言である。

「いやいやいや！流石にそれはダメですよ!!」

（何言ってるんだよコイツ……）

「じよ、冗談ですよ……」

「そ、そそ、そうだよね」

シアが少しだけ残念そうな顔をする。俺は何も見えない……うん、そういう事にしよう……その後、軽くシャワーを浴びてから眠りにつく。今日一日で色々な事がありすぎて疲れていたのか、布団に入るとすぐに睡魔に襲われる。

（あの子は一体なんなんだ？それにユエも……）

そんな疑問を抱きつつも意識は闇に落ちていった。

## 転校生はよく知る二人

Side 零斗

今日の学校は一段と騒がしかった。なぜなら、転校生が来るからだ。まあ、転校してくるやつ知人なんだけどな……俺が連れてきた訳だし。

(上手くやれるといいんだが……)

そんな事を考えながら教室に入ると、皆は転校生の話題で盛り上がっていた。

「ねえ！今日来る子ってどんな子かな？」

「可愛い子だといいいね！」

「イケメンとか来たらどうしよう……」

などと楽しそうに話しているのを横目に席に着く。そして担任の愛ちゃん先生も入って来て、いつも通り朝のホームルームが始まった。

「もう知ってる人もいると思いますが転校生を紹介します！」

愛ちゃん先生の言葉を聞いた瞬間クラス中から歓声が上がります。うるさい……耳が痛い……。

「それではどうぞー！」

その言葉と共にガラガラと扉を開ける音が聞こえた。すると二人の女子生徒が入ってくる。すると男子生徒達は興奮したように騒ぎ始めた。

「おおお!!」

「うわつめつちや美人じゃん!!」

「え? 何あの髪色……」

「すげえー綺麗……」

「モデルか何かじゃね!?!」

などという声があちらこちらから聞こえる。それもそうだ。入ってきた二人はどちらも超がつくほどの美少女なのだから。

「皆さん静かにして下さい」

愛ちゃんに注意されてやっと静かになる。でもそれでもまだざわついているのは仕方ないだろう。

「それでは自己紹介をお願いします」

二人のうちの片方が前に出て口を開く。

「……ユエ。よろしく」

それだけ言うとそのユエは半歩後ろに下がる。もう一人の方も同じように名乗った。

「ええつと……シア・ハウリアです。よろしお願いします……」

シアは緊張しているのか少しオドオドしていた。しかしそれがまた良いと言うやつもいるだろう。現にクラスの一部の男子達がニヤけている。

「はい。ありがとうございます。座席は……南雲君の隣空いてるんでそこに座ってください」

愛ちゃんの言葉を聞きユエとシアは顔を見合わせて小さくガッツポーズを取っている。

「わかりました」

「……わかった」

それまで呆然としていたハジメがものすごい顔をしてこちらを見ている。そりや自分の隣の席に来たのが自分の知り合いだと知ったらそうなるか……その後の授業は特に変わったことはなく進んでいった。

「ふう……」

昼休みになり俺は屋上へと来ていた。別に一人になりたい訳ではない。刀華は家の用事で居ないし、鏡花と恭弥はそれの付き添いで居ないし、柊人は風邪引いた悠花の看病で居ない。

(さて……シアとユエはこの環境に順応出来たかな……)

そんな事を考えながら空を見上げる。ちなみにこの学校の屋上は基本的に入内禁止になっている。まあ、普段は鍵掛かっているし……え？なんでそんな屋上に入れるのかって？俺が鍵を拝借してるからだ。

(……いい天気だな。陽当たりも良いし、眠くなってくるな……)

そんな事を考えていると、ガチャッとドアが開く音がする。

「やつと見つけた……」

「おや、ハジメ。こんな所に来るとは珍しいですね」

息を切らせていることから急いで探して来たことが分かる。ハジメはそのまま俺の横まで歩いてきて座ると、一呼吸置いてから話しかけてきた。

「なんでユエさん達がここに？」

「そうですね……貴方と一緒に過ごす時間を増やしたいそうです。それと彼女達も『青春』を味わってみたいそうなので連れてきました♡」

可愛らしくウインクをしてみるが特に反応はなかった。ちよつと寂しい。

「それにしたって……シアさんの耳とかはどうしたの？」

「私の能力を使えばちよちよいですよ」

ハジメの顔が引き攣っている。多分とんでもない事を聞いた気がするが理解出来ない



いといった感じだろう。

「まあ、それは置いといて……クラスの方々とは仲良くやっていけそうですか？」

「うん。大丈夫だと思うよ。クラスの人達とも打ち解けたみたいだし」

「それなら良かったです」

まあ、多少問題はあるかもしれないけど……そこは頑張ってもらおうしかない。

——数日後——

シアとユエはクラスにも馴染み始め今ではすっかり人気者になっていた。

「ねえ！ユエちゃん！今日の放課後一緒に遊ばない!？」

「あーずるい!!私も混ぜて!」

「じゃあ私はシアちゃんと遊ぶ!」

などと、よく遊びに誘われている。それだけでなく他のクラスからも誘われたりと、

かなりの人気ぶりだ。

「うう……皆ごめんなさい。今日は先約があるんです……」

「ん。私も」

だが当の本人達はどうとあまり乗り気ではないようだ。

「ええー……」

「じゃあ明日は!？」

二人は申し訳なきさそうにしながらも首を横に振る。すると女子生徒の一人が思いついたように言った。

「あつ！わかった！彼氏さんとデートなんだ！」

その言葉を聞いて教室が騒がしくなる。男子達は「マジか……」と言いながら肩を落としていく。

「ちつ違いますっ!!」

シアが慌てて否定をする。しかしそれが逆に周りには肯定しているように見えたよううで、「うそっ!!」「誰々!!」などという声があちこちから聞こえてくる。

「そりゃ、彼でしょ」

一人の生徒が指を指したのは……

「え?私?」

何故か俺だった。あまりに突拍子の無いことにキョトンとしてみると、背後から凄まじいプレッシャーが放たれた。

振り向くとそこには…… 笑顔を浮かべながらも額に青筋を立てている刀華がいた。

「……ねえ、零斗。どういうことか……説明してくれる?」

「……何もやましいことはありませんよ、彼女と私はそういった関係では無いです」

俺は冷や汗を流しながら答える。説明を聞いた刀華はシアの方に視線を向ける、シアもシアで首が引きちぎれん勢いで縦に振る。

「……そう。わかったわ」

そう言うのと俺の頭をガシツと掴む。そのままギリギリと力を込められる。

「いたいいたい!!ちよっ!!?本気で痛いのですが!?!」

「ふん。自業自得でしょう?」

そして刀華は最後に力を込めてから手を離す。俺は頭を抑えながら刀華を見る。

目が合った瞬間俺はゾクリとした。まるで獲物を見つけた肉食獣のような目をしていたのだ。

(……これはまずい。非常にまずい)

俺はこの場をどうにかするためにシアに助けを求める。シアはこちらを見ると小さく微笑みながらサムズアップして教室から逃げ出していた。

(シアアア!!貴様裏切ったなあああ!!)

そんなことを思っていると刀華が話しかけてきた。ちなみに周りにいたクラスメイト共は空気を<sup>怖気付いて</sup>読んで既に退散済みだ。

「それで?何があつたのかしら?」

「いえ、あのですね……」

「言い淀んでいるところ悪いけど、私は怒ってるの。正直に話さないと……わかるわよね?」

「はい。わかっております……」

俺は事の経緯を説明した。その間刀華は一切口を挟むことなく、ただ黙って聞いていた。

(怖い……めっちゃ怖い……)

それから一通り話し終えると、ようやく解放されると思ったがそうではなかった。

「……なるほどね。大体の事情は分かったわ」

「分かって頂けたようでありがたいです……」

「……でもまだ許したわけじゃないから」

そう言つて今度は両頬を摘まれる。

「ふおれはへど……?」

「当たり前でしょ。自分の彼氏の家に見知らぬ女が寝泊まりしてるのよ?怒るに決まってるでしょう」

「ひよへんなはい……」

謝つても解放されないため、仕方なく俺はしばらく弄ばれるのであった。

「……痛い」

「ごめんなさい。ちょっとやり過ぎたかも……大丈夫？」  
「なんとか……」

あれからしばらくの間、ずっと引つ張られ続けていたせいでかなり腫れてヒリヒリする。

「……シアちゃんとユエちゃんは一体何者なのかしら？」

刀華の顔が真剣さを帯び、声色も数段落ちる。シアとユエの正体について、俺も把握しきれてない。

「私達と同じ人間では無いのは確かですが……どんな存在なのかは確認出来ていません」

シアは兎も角ユエに関しては謎が多い。

「まあ、二人については追々調べていくしかないですね」

「……そうね。取り敢えずは様子見かしら」

そう言うのと刀華は小さく息を吐き、いつもの調子に戻る。

「さて、次は貴方への罰を考えないと……ね」

「えっ?」

俺が疑問の声を上げると、刀華はニコツと笑った。その笑顔を見て背筋が凍りつくような感覚に襲われる。

「覚悟はいいかしら？」

「待ってください!!今回は不可抗力でしょう!？」

刀華にじり寄って来る。どう逃げようかと思案していると、何故か刀華はクスツと笑う。

「フフ、冗談よ。それに元はと言えば私が勝手に勘違いしたのがいけないんだもの」

俺はホツとすると同時に少し怒りを覚えたが、そこはぐつと堪えた。

「それにしても貴方……明るくなったわよね」

突然刀華がそんなことを言ってきた。

「……そうですか？」

自分ではよくわからないため首を傾げる。

「ええ、だって前はもつと他人に対して冷たかったじゃない？」

「……言われてみると、確かに。自分から誰かに関わるなんてことはありませんでしたし……」

俺の言葉を聞いて何故か刀華は嬉しそうな顔をしていた。それがなんだが気恥ずかしくて視線を外す。

「あら、貴方そんな顔もするのね？」

「……揶揄わないで下さい」

「別に揶揄ってなんかいないわよ？ただ、前よりも感情表現が豊かになったなって思っただけ」

「……」

「ほら、また無表情に戻っちゃう」

そう言つて刀華は悪戯っぽく笑いかけてくる。俺は視線を逸らすとボソツと呟く。  
(刀華のおかげなんだけどな……)

俺は彼女に救われた。俺にとって彼女は恩人であり、大切な友人で、最愛の恋人だ。

「ワワワッ！」

「ちよっ!?! シアちゃん!?!」

「……………シアさん?」

突如、教室後方の扉が轟音と共に外れて、シアやユエ、雫他数名が倒れ込んでいた。

「ま、まさか今の見て…………」

「そ、そそ、そんなことある訳ないじゃないですか! 零斗さんが珍しく照れてるところなん…………あ」

シアは慌てて否定していたが途中で自分が何を言ったのか気づいたらしく口を両手で塞いでいた。

「…………もうやだあ…………」

俺はその場に崩れ落ちた。



## 聖夜の夜は友人と

Side 零斗

『クリスマス』それは恋人たちが愛を確かめ合う日。そう、つまりはリア充の季節なのだ……そんな季節なんだが……

「グッ……」

「踏み込みが甘いですよ」

「もう一本お願いします！」

何故か八重樫道場にて門下生と試合をする羽目になっていた。いやほんとになんか？俺なんか悪いことしたか？

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

やっと終わったぜ……かれこれ五戦くらいしてたな……もうヘトヘトだよ……  
「湊莉さん！次は俺と勝負してください！」

別の門下生がやってきた。正直言って面倒くさいんだよなあ……まあ、年内に来れそうなのは今日で最後やし相手するか。

「いいですよ。その代わり手加減はなしですからね？」

「お願いします！」

手加減なしとは言ったが本気で打ち込めば竹刀ごと彼を両断しかないな……さてどうしようかな……

「行きます！」

彼が思いつきり突っ込んでくる。だがまだ遅いな。彼の剣筋を見極めながら軽くあしらう。

「クソツ……」

「もつと腰を落としなさい」

アドバイスも忘れない。こうやってちゃんと指導しているからか少しずつ上達している気がする。

「ガッ！」

「一本！」

「返し胴かよ……」

隙を見て相手の袈裟を流し、そのまま胴を打ち込んだ。久しぶりに決まったな……この技。

「以前よりもいい動きになりましたね」

「ありがとうございます！」

彼は嬉しそうだ。しかし他の門下生たちは悔しそうにしている。やはり負けず嫌が多いようだ。

「では私はこれで失礼しますね」

「はい！お疲れ様でした！」

軽く一礼してから道場を出ようとした時に……

「湊莉君、今度は儂と勝負せんか？」

「……鷹三師範、気配を消して背後に回らないでください……普通に怖いんですよ」

いつの間にか後ろに鷹三師範がいた。マジで怖ええ……心臓止まるかと思ったわ。

「すまんすまん。つい癖になってしまったのう」

「本当に勘弁してください……」

「それで、どうじゃ？一手死合うつてみるか？」

その言葉を聞いて思わずため息が出てしまう。

「門下生に本気の殺し合いを提案する師範が何処に居るんですか……」

「目の前のおるが？」

「そういうことじゃありませんよ……」

はあ……と溜息をつく。相変わらずだなこの人は。でも……少しだけワクワクして

いる自分もいるんだよね…… バトルジャンキーなんかねえ……

「ここに居たのね……ほら、早く行くわよ」

後ろを振り向くとそこには雫の姿があった。彼女の服装はとても綺麗だった。いつもよりメイクをしているのかとても大人びているように見える。そして何よりも服との相性が良いのだ。白を基調としており赤いマフラーを着けていてとても似合っている。

「ど、どうかしら……」

彼女は頬を赤らめ、それを隠すかのようにマフラーを口元まで上げながら聞いてきた。

「ええ、凄く綺麗だと思いますよ」

素直に思ったことを口にする。するとさらに顔を赤く染める雫。

「そ、そう……なら良かったわ……」

彼女は照れた様子のまま道場を出て行った。

「……じゃあ、そう言う事なので失礼します」

「うむ。またいつでも来るといい」

俺は鷹三師範に挨拶をして道場を出る。周りの人達からの怨嗟の声を聞きながら道場を出る。

「お待たせしました」

「別に大丈夫よ。それより……はいこれ」

そう言つて手渡してきたものは手袋であつた。しかも暖かい素材で出来ているため防寒対策はバツチリである。

「……八重樫さん、左手出して貰えますか？」

「ん？ どうかしら」

彼女が出した手を掴んで指を絡めながら自分の手と一緒にポケットに入れる。

「ふえ!? ちよつ、ちよつと零斗!」

「こうした方が暖かくないですか？」

彼女の顔を見ると耳まで真っ赤になっている。

「そ、それはそうなんだけど……これは流石に恥ずかしいわ……」

確かに周りからは恋人同士に見えるだろう。現に俺達を見ながらニヤついている連中がいるしな。しかし……今更こんな事で狼突くような俺ではない。伊達に修羅場を経験していないからな。

「まあいいじゃないですか」

「もう……仕方ないわね……」

結局は折れてくれたみたいだな。やっぱり優しいな。そんなことを考えているうち

に家に着いた。

「お！おかえり〜！」

リビングに行くのと悠花がソファアの上で寝転んでいた。お前は何してんねん……  
とりあえず上着を脱いでコートハンガーにかける。

「他の人達は？」

「料理で使う材料の買い出し〜」

悠花はテレビで流れているホー○アローンを見ながら答えた。

「それならこちらである程度の準備はしておきましょうか」

「私も手伝うわ」

俺達はキッチンに行き、早速作業に取り掛かる。

「よし……始めましょうか」

「ええ」

俺達がやるのはチキンなどの肉類の下処理や野菜を切ること。まあ大体の準備はこの二つだからな。しばらく時間が経ち、ある程度の下ごしらえが終わった頃……

「ただいま〜！」

「どうやら帰ってきたようですね」

ちやうどその時、玄関から声が聞こえてきた。おそらく食材を買いに行っていた面々

が帰って来たようだ。

「湊莉君、手伝うよ」

「ありがとうございます、助かります」

白崎さんが手伝いを申し出てくれてとてもありがたいな。俺と八重樫さんだけだと手が回らなかつたからな。

「じゃあそつちの大きい器にある具材をこの鍋に入れていってください」

「うん、わかつたよ」

テキパキと動いてくれる白崎さん。こういう時に手伝ってくれたりするととても助かる。さて……そろそろメインの調理に入るとしますか。

「よっ……と」

冷蔵庫から牛ヒレと牛ももの塊を取り出す。この二つが今日のクリスマスパーティーのメインディッシュ……ローストビーフだ。ちなみに昨日から仕込みをしていたので味の問題はないはず。

「あら、今日は豪華ね」

「まあ、クリスマスですからね……これだけ豪華にしてもバチは当たりませんよ」

肉自体は火入れをするだけで終わるから、まず最初にするのはソースを作ることだ。ポウルに入れた醤油と酒とみりんと砂糖を混ぜていく。それをフライパンに少量入れ

ながら熱していく。この時、あまり煮詰め過ぎないようにするのがポイントだ。ある程度火を通してアルコールを飛ばす。

この段階で香りが出てきたらOK。次にそこにオリーブオイル、みじん切りにした玉ねぎを入れて炒める。これでソースの材料は全て完成した。そして先程作ったソースを加えて再び炒る。ここで塩コショウを忘れずしておく。

そしてここからが本番。牛肉の表面に焦げ目がついたら裏返して、また弱めの中火にしつつ、全体に焼き色をつけていく。この時に包丁を使って表面を削ぎ落とす。

そこから15分くらいかけてじっくり焼いていき、最後はアルミホイルに包んで完成。我ながら会心の出来栄えだと自負できる。

「相変わらずの腕前ね……女の私なんかよりもずっと上手よね……」

「そんなことはないですよ。八重樫さんだって十分上手いと思います」

「そう……かしら……?」

八重樫さんが少し照れくさそうな表情をしている。いつもクールな感じにいる彼女だが、こういう時はとても可愛いらしい。

「あつ! 零斗、雫ちゃんに何デレデレしているのかな?」

いつの間にかキッチン来ていた悠花から指摘された。いかん……無意識のうちに口元が緩んでいたのか……?



「……なんのことでしょうか……?」

俺は悟られないように平然を装って答える。しかし……

「零斗って分かりやすいんだから嘘つく時は絶対右眉が上がるんだよ?」

悠花にはあつさり見抜かれてしまった。そんな癖があるとは……気づかなかつた……

「別にそういうつもりではないのですが……」

「……まあそういうことにしといてやろう」

悠花に生意気な口を利かれたので軽くデコピンしておいた。痛いと喚いていたけど無視した。

「後は私一人で出来ますから、二人はリビングで他の方達と楽しんできても大丈夫ですよ」

「……じゃあお言葉に甘えて……行きましょ香織」

八重樫さんは白崎さんの手を引いてリビングに向かっていた。さて、後は……  
「さて、こちらも仕上げといきましょうか!」

冷蔵庫から生クリームの入ったボウルと昨日のうちに焼いておいたスポンジケーキを取り出す。

「ふふふ、今年はどんな風にしましょうか?」

やっぱりクリスマスといえばショートケーキだよな。というわけでスポンジ生地の上クリームを乗せ、イチゴを乗せていく。これを何度か繰り返していると、だんだんホールの形になってくる。うん、いいんじゃないかな。最後に上から粉糖をかけて飾り付けが終わり。

「むふふ……やはりこういつた作業は楽しいですね」

作り終えた料理を盛り付けながら呟く。誰かのために料理をするって楽しいし、食べて貰えるのは嬉しいよな！君達もたまには料理してみたらどうだ？案外ハマるかもしれないぞ？

「皆さん、料理が出来ましたよー」

リビングに呼びかける。すると全員が集まってきた。さて、では始めようじゃないか！聖なる夜を祝う宴を!!

「ハグツ！うーん！美味しい!!」

「そんなに急に詰め込むと「んぐ!」ほら、言わんこっちゃない……」

急に食べるもんで喉を埋まらせる悠花とそれを見て呆れながら水を差し出す終人。相変わらずだねえ……

「このお肉……ヒレよね……火入れもそうだけど何より香草の香りが凄い……」

「あはは……」

幸せそうな顔をしながら完璧な食レポをする優花、それをみて乾いた笑いを零す一花さん。

「ハジメ君！この料理とつても美味しいよ！」ズイッ

「う、うん。ありがとう」

「クツツツツソ……羨ましい……」

料理をハジメの口元に持っていく満面の笑みの白崎さんにそれに嫉妬する浩介と幸利。

「……フフ」

そんな騒がしい光景に思わず小さく笑う。こんな時間が何時まで続けばいいのにと思ってしまう。

「おや？」

ふと、窓の外を見ると雪が降り始めていた。今年はホワイトクリスマスか……なかなかいいものだな。

# そうだ、デートに行こう

S i d e 零斗

今日も今日とて、八重樫道場で雫と模擬戦をする。今はある程度打ち合った後の軽いクールダウン中だ。そういや最近、癒しがねえな……

「よし」

「ん？どうかした、零斗」

「八重樫さん、デートしましょう」

「……ふえ!？」

俺の突然の提案に彼女は目を丸くして驚いていた。まあ当然の反応だな。いきなりそんなこと言われても困るだろうし。

「ここ最近ずっと道場の方に入り浸っていますよね？」

「うっ……それはそうだけど……」

「たまには息抜きがてら遊びに行きませんか？」

雫は少し考え込むような仕草を見せる。そしてしばらくしてから口を開いた。

「じゃあ、お言葉に甘えて行こうかしら」

頬を赤く染め、はにかみながら答える雫。うーん、可愛い。

「それにしても、なんで急に誘ってくれたの？」

「別に理由なんてないですよ。ただ、一緒に出掛けたいと思っただけですよ」

俺は特に意識することなく思ったことを口にする。すると雫はさらに顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「そっか……ありがとね……」

小さな声で呟くように言う彼女。その声はとても嬉しそうなものだった。

雫とのデート当日。待ち合わせ場所には既に彼女が待っていた。いつものように綺麗だが、今日の服装は一段と可愛らしい。

白を基調としたブラウスの上に紺色のカーディガンを着ており、下は黒のロングスカートを履いている。彼女の美しさをより引き立てていると思う。

「ごめんなさい、待たせちゃいましたか？」

「ううん、私も今来たところだから大丈夫よ」

雫の言葉を聞いてほっとする。よかった、これで待ったと言われた日には男として立つ瀬がない。

「じゃあ行きますか」

「ええ」

こうして俺たちは街へと繰り出した。まず最初に向かったのは映画館だった。なんでも見たい映画があるんだそうさ。

『あなたへの想い』……恋愛ものですか？」

「ええ、この映画がとても評判いいみたいで気になってたの」

なるほど、確かに雫が好きそうな感じの映画ではあるな。俺は特に見たかったものもなかったの、雫と一緒に見ることにした。

内容は高校生同士の男女の恋を描いた青春ラブストーリーといった内容だった。終始切なく胸を打つシーンが多く、観客全員が涙を流していた。

そしてラストシーンで主人公役の俳優がヒロイン役の女優に告白をしたところで映画の上映は終了した。

「どうでしたか？」

「すごく良かったわ！特に中盤の——」

興奮冷めやらぬ様子で感想を語る雫を見て自然と笑みがこぼれてしまう。やっぱりこの人はこういうの好きだなあ。

「あつ……ごめんさい、つい夢中になっちゃって……」

恥ずかしそうに謝る彼女に気にしないでくださいと言う。むしろそれだけ楽しんで

くれたなら連れてきた甲斐があったというものだ。

「次はどこに行くんですか？」

「ちよつと服を見に行きたくて……ついてきてくれる？」

もちろん断るわけもなく了承する。雫に連れられてやってきた店は服屋だった。

「ほら、早く入りましょ？」

強引に腕を引っ張られて店内へ入ってしまった。店内には若い女性向けの服が数多く並んでいた。正直居心地が悪い……

「これなんかどうかしら？」

そう言つて見せてくれたのは白のトップスと黒のベストだ。どちらも雫によく似合  
いそうである。

「そうですねえ……こっちの服と合わせると良いと思いますよ」

「そうね……試着してみるから少し待つてもらえるかしら」

「わかりました」

雫は店員さんを呼ぶと試着室に入つていった。数分後、カーテンが開かれ中にいた彼女は先程までとはまた違った雰囲気醸し出していた。

トップスは黒のシャツになっており、首元からは鎖骨が見え隠れしている。ベストは羽織る形となつており丈が長めのものを着ているため全体的にゆつたりとした印象を

受ける。普段とは違う格好をしているせいか大人っぽく見える。

「どうかしら……? 変じゃない……?」

不安げに見つめてくる雫。俺はそんな彼女を素直に褒める。

「凄く似合ってますよ」

「ほんと? ありがとう!」

嬉しそうな表情を見せる彼女。俺はその後しばらく雫が着替えるたびにその都度褒め続けた。

「もうっ……そんなに言わなくていいわよ……」

照れながらそんなことを言う彼女だったがその顔はとても嬉しそうなものだった。

「じゃあ次は零斗の番ね」

「……はい?」

「私が選んであげる」

俺は半ば強制的に連行され、雫によるコーディネートが始まった。俺は抵抗を試みたものの無駄に終わり結局されるがままとなった。

数十分後、俺は鏡の前に立っていた。全身をチェックする。上は黒のVネックのTシャツの上にグレーのジャケットを着ている。下もデニムパンツを履いており、靴は



オックスフォードタイプの革靴になっている。

「うん、よく似合っているわね」

満足そうな顔をする雫。俺は自分の姿を見てどこか違和感を覚えていた。

「なんか……慣れないですね……」

「そのうち慣れるわよ」

そういうものだろうか……まあ雫が言うんだし間違いないだろう。

「御会計お願いします」

「はい……合計二万四千円となります」

かなりの量買ったが……案外安いもんだな。

「そろそろお昼時ね」

「そうですね……何処にしましょうか？」

「そうですね……」

雫は考え込むような仕草を見せる。不意にこちらを見上げてきて目が合う。すると彼女はふわりと微笑みかけてきた。

「私のお気に入りの場所があるの。そこに行きましょ？」

「ええ、いいですよ」

こうして俺たちは次の目的地へと向かった。歩くこと数分ほど、彼女が立ち止まった

場所はお洒落な雰囲気のお店の前だった。中に入るとそこはアンティーク調の雰囲気漂う喫茶店であった。

「ここは紅茶とケーキが美味しいのよ」

席に着くなりメニュー表を開きながら楽しげに話す雫。その目はキラキラと輝いていた。

「私は決まったけど……零斗は決まった?」

「そうですね……又ワラエリヤのストレートティーとフルーツタルト、ショートケーキでお願いします」

「いいチョイスね! すいませーん」

しばらくして注文した品が届く。早速一口飲んでみると、なるほどこれは美味しいな。しっかりと茶葉の特性を理解した淹れ方だ。

雫の方を見ると幸せそうな表情でケーキを食べている。本当に甘いものが好きなんだな。

「どうしたの?」

じつと見つめていることに気づいたのか首を傾げる雫。

「いえ、なんでもありません」

俺は誤魔化すように視線を外す。すると雫はフォークを置いて、何かを思い出したか

のような様子を見せた。そしてゆっくりと立ち上がり、俺の隣へと移動してきた。

何事かと思っていると、雫の手が頬へと伸びてくる。そのまま優しく撫でられる。突然の出来事で思考が止まる。

「クリームついてるわよ?」

クスツと笑い、指についた生クリームを見せつけるように舐める。そして妖艶な笑みを浮かべた。

「間接キス……ね?」

心臓が跳ね上がる。顔が熱くなるのを感じる。雫は悪戯に成功した子供のように無邪気な笑顔を浮かべる。

「やっぱり、ここのケーキは最高ね」

「ええ、そうですね……また来たいくらいです」

何とかポーカーフェイスを保ちつつ答える。まあじで心臓に悪いわ……普段攻めると顔真っ赤にしてアタフタすのにこんな時に限って小悪魔になるのやめてくれませんかね……?

「……それはデートの誘い?」

「そう受け取ってもらって構いませんよ」

「そう……なら楽しみにしているわ」

その後も二人で談笑しながらゆったりの時間を楽しんだ。

日が傾き始め空が赤く染まり始めた頃、俺たちは帰路についていた。あの後、ゲームセンターで遊んだり、買い物をしたりして楽しい時間を過ごした。

「今日はありがとう。とても充実した一日になったわ」

「私もすごく楽しかったですよ」

自然と笑みがこぼれてしまう。柄にもないことを考えてしまったな……まあ、たまにはいいか。

「ねえ、最後に一っだけ寄り道してもいいかしら？」

「もちろん大丈夫ですよ」

雫は俺の返事を聞くと、ある場所へ向かって歩き出した。着いた先は高台にある公園だ。人気はなく、静寂に包まれている。夕焼けに染まった街並みを一望できるこの場所はとても綺麗だった。

「いい景色でしょ？」

「ええ……とても……」

しばらく二人並んで街を眺める。この時間がずっと続けば良いのに……そんなことを思ってしまう。

「今日ありがとう、とても楽しかったわ」

「こちらこそありがとうございました」

少しの間沈黙が流れる。

「……あなたに伝えておきたいことがあるの」

雫は真剣な表情をしてこちらを向く。俺は黙って彼女の言葉を待つことにした。

「私はあなたのことが好きよ」

「……………」

「初めて会った時からずっと惹かれていたわ」

雫は一歩ずつ近づいてくる。

「でも、これが恋愛感情なのかは正直わからなかった……」

彼女はさらに距離を詰める。俺はただ見ていることしかできない。

「だから確かめることにしたの……」

雫はもう目の前にいる。

「雫斗、私はあなたを愛してる」

その瞳は真つ直ぐこちらを捉えており、決して目を逸らすことができない。

「……八重樫さん……私には刀華が居ます。だから、貴方の気持ちに答えることは――」

「それなら問題無いわ」

雫は言葉を遮るように言った。そして次の瞬間……

「ん……」

「んっム!？」

唇に柔らかい感触を感じた。目の前に雫の顔があり、自分の身に起きていることがようやく理解できた。

「んっ……ちゅ……はあ……」

長い口づけが終わり、お互いの口から銀色の糸を引く。

「これで証明は完了ね」

彼女はふわりと微笑む。その笑顔は今まで見たどの表情よりも美しく見えた。

「それに刀華さんからは『零斗は共有財産だから分け合いましょ』って言わてるから大丈夫よ」

「なんですか、その理屈は……」

「ふふっ、いいじゃない。細かい事は気にしないの」

そう言って再び抱きついてくる雫。今度は優しく包み込むように抱きしめてくれる。

「これからよろしくね、彼氏さん」

耳元で囁かれる。その声音はどこか甘く感じられた。

「ええ、こちらこそ」

こうして俺と雫の交際が始まった。ちなみに、後日このことを刀華話したら、ものすごい形相で迫られ、質問責めにされ……絞られたのは言うまでもない。

## 鞭（一割）と飴（九割）

S i d e 零斗

「零斗！俺と勝負しろ！」

八重樫道場にて後輩門下生達と打ち合っていたところ、いきなり天之河がやってきて  
そう言った。

「お断りします」

俺は即座に断った。だが奴は諦めずさらに続ける。

「お前が雫を脅して、無理矢理付き合ってる事は知ってる!!」

「は？」

俺は耳を疑った。今コイツなんて言った？雫を脅した？無理矢理付き合った？

「……何を言っているんですか？」

「とぼけるつもりか!?雫の気持ちも考えずに好き勝手やってるくせに！」

俺はその言葉を聞いて、怒りを通り越して呆れ果てた。そして同時に理解した。つまりあれだろ？天之河は自分の思い通りにならないからって嫉妬しているだけなんだろ？



くだらないにも程があるわ。だからそんなしよもない事を言つて、俺に恥をかかせて嘲笑いたいわけだ。だってそうだろ？ そうでなきや……

「狂つてる……」

門下生の誰かがボソツと言つた。消え入る様な声で、俺と言つた張本人以外には聞こえていないだろう。しかし、その一言で十分だった。

(ああ、そういうことね)

何となく分かつた。要するにコイツは「自分の理想通りに動かない俺」が許せないんだ。それで俺をどうにかして屈服させて、優越感に浸りたいのだ。実に人間らしい思考回路だ。

「はっ！ 何か言つたらどうだ!! 負け犬め!」

「……………」

俺は無言のまま、天之河の方へ歩み寄る。そしてそのまま鳩尾を殴りつけた。

「ぐえつ……」

情けない声を出してその場に倒れ込む天之河。俺はしやがみ込んで話しかける。

「勘違いしてる様ですから言つてあげましょう……もちろん丁寧に、そして簡潔に……ね」

「ゴホツ・ヴ・ゲホ」

「私と雫さんは両者共に合意の上で交際を開始しています。それを赤の他人である貴様にとやかく言われる筋合いはありません」

言い終わると同時に立ち上がり、未だに地面に伏したままの天之河に向かって告げる。

「せいぜいそこで這いつくばっていてください。貴方にはお似合いですよ」

そう吐き捨てて、俺はその場から立ち上がり歩き出す。後ろから聞こえる悲鳴の様なものは無視しながら、道場を出ようとした時……

「湊莉先輩！危ない！」

門下生の声と共に後頭部に衝撃を受け、少しよろめく。すぐに振り返るとそこには木刀を持った天之河が立っていた。

「ハア……ハア……よくもやってくれたな！」

どうやら先程の一撃は完全に不意打ちだったという訳ではなさそうだ。恐らく最初から狙っていたのだろう。本当にどこまでクズなのか……

「いい加減にして下さいよ……」

道場の床にポタポタと赤い液体が落ちていく。それが自らの血だと気づくまでに数秒の時間を要した。

（なんか……こんな怪我したの久しぶりかもな……）

そんな呑気な事を考えていると、俺が怪我をした事に気がついた門下生達が駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか!?! 湊莉先輩!」

「ああ、平気だよ……この程度怪我なら問題ないさ」

心配そうな顔を浮かべている彼らに笑いかけながら言う。実際そこまで深い傷でもないため全く痛まない。それよりも今は目の前にいる男の方が優先度が高い。

「おい天之河! お前自分がしたことわかってるのか!?!」

「うるさい! 黙れ! 皆騙されてるんだ! あの男に!」

天之河は門下生達の静止を振り切り、再び襲いかかってきた。

「零斗オオオオ!!!」

大振りの上段斬り。軌道が見え見えの攻撃など当たるはずもなく、手を剣筋に添えて往なす。

「なっ……」

天之河の顔に初めて焦燥の色が見える。それもそのはずだ。彼は剣道において県大会上位の成績を修めるほど実力者だが……

「遅い……」

「なっ!」

劍速も遅ければ、踏み込みの深さも浅い。これではとてもじゃないけど話にならないレベルだ。はつきり言えば雑魚である。

「良い機会ですし、自己流ではありますが相手をほぼ確実に仕留め方法を教えてあげます」

そう言つて俺は天之河の懐に潜り込み、木刀を握っている手を軽く捻る。すると天之河の手からは簡単に木刀が落ちた。

「一、初撃は必ず意識外からの必ず当てる」  
今度は天之河は腹に掌底を入れる。当然これもダメージにはならないように調整してある。

「二、相手が困惑している間に足元を狩る」

続いて足を払い転ばせる。これは流石に転ばないように威力を調整したが、それでもバランスを大きく崩すには十分なものだったようだ。バランスを崩した天之河はそのまま、尻もちをつく。

「三、確実に仕留めるために首を狙う」

落下している木刀を拾い上げ、天之河の首元に当てる。

「これができれば体格差のある相手でもある程度渡り合えます」

天之河の首元から木刀を離してやると、周りの門下生達から感嘆の声が上がる。

「騒がせて申し訳ありませんでした。私はもう帰りますので皆さんは稽古を続けてください。それじゃ……」

それだけ言つて俺は道場を後にして、帰路に就こうとしたが……

「……（フラッ）ッ……」

少々派手に動いたせいとか、出血量が増えた様で、貧血を起こしてしまった。視界が歪む中、必死で踏ん張り壁に寄りかかるようにして倒れるのを防ぐ。

「これは……ちよつと……不味いかも……ですな」

段々と気が遠くなっていく。しかし、まだ完全に気絶するわけにはいかない。

（まずいな……もう手足が動かかねえや……）

頭もボーツとしてきて上手く回らない。そしてついに身体を支えることすらままならず、その場に崩れ落ちる様に倒れた。

「——し——か——斗——」

誰かがこちらに近づいてくる足音が聞こえた。俺の意識は闇へと沈んでいった。

「……ん……ん……ん……」

目が覚めるとそこは見知らぬ天井だった。辺りを見渡すと窓の外に盆栽らしき物やしし落としが見えた。

（あれ？俺って確か道場でぶっ倒れて……ああ、そのまま発見されてこうなった訳か……）

自分の置かれた状況を理解した俺は、身体を起こし、部屋を観察し続ける。

（にしてもかなり古風だよなあ……割と落ち着くな……）

そんな事を考えつつ観察を続けていると部屋の扉が開かれた。そこにいたのは雫だった。

「あら、起きたのね」

「あ……はい……今しがた……」

雫の顔を見ると、般若の形相をしていた。どうやら相当ご立腹の様だ。背中に冷や汗が伝うのを感じる。

「私がどれだけ心配したと思っているのかしら？」

雫はベッドの隣まで来ると、腰を落として座った。そして優しく頬を撫でてくれる。

「すみません……迷惑をかけましたね」

雫は呆れた様な表情を浮かべると……パン！という音を立てて俺の頬をピンタしてきた。

「本当に心配したんだから！」

雫の目には薄らと涙が溜まっている様に見える。恐らく本気で怒ってくれたのだろ

う……それがとても嬉しかった。

「零斗!!無事!?!」

部屋のドアが勢いよく開かれ、息切れを起こした刀華が入ってきた。

「大丈夫ですよ。ちゃんと生きてますから」

「良かった……本当によかった……」

俺の言葉を聞くと彼女は安心した様に床にへたり込んでしまった。余程心配させてしまっていたみたいだ。

(後できつちりお礼をしないといけないな)

心の中で反省しつつ、そんな事を考える俺を見て、何かを言いたそうにしている刀華がいた。

「……貴方、私との約束破ったわね?」

「な、なんの事でしょうか……!?!」

刀華からドス黒いオーラが立ち昇る幻覚が見える……

(でも、今回は流石に心配かけたしな……仕方ないか……)

俺は覚悟を決めると目を瞑る。その数瞬後、左頬に痛みを感じたと思ったら、次の瞬間、口内に甘い感覚が広がる。それと同時に刀華の方からも甘い声が漏れ出る。

「んっ……フフ」

ゆつくりと顔を離すとそこには恍惚とした表情をした刀華の姿があった。

「やっぱり零斗の舌は甘いわね……」

ペロリと唇を舐めてそんな事を言う刀華からは艶美な雰囲気しか感じなかった。顔に熱が集まっていくのを感じながら俺はそっぽを向く。

「あの……刀華………人前で……やるのは勘弁して……ください」

「いいじゃない、別に減るものでもないでしょう？」

「私のSAN値が減るんです……」

口元を覆い隠しながら、ボソツと言った言葉だったが、バツチリ聞こえていたらしく。「クフフ……照れちゃって可愛いのね♪」

と、言われてしまい、また恥ずかしさがこみ上げてきた。そして、刀華は俺の頬に手を添えて唇を近づけてくる。

（これ以上されると、ホントに理性が持たない……）

そう思った直後、俺と刀華の間に雫が割って入った。

「ストーツプ！何二人で良い雰囲気になろうとしているのよ！」

刀華は不満そうな表情をしながらも渋々引き下がる。

「……それで零斗、体調の方はどうかしら？」

少し真面目になった声でそう尋ねられたため、布団から出て立ち上がろうとするが、



足に力が入らずに倒れかける。

「回復にはもう少し時間が掛かりそうです……少なくとも今日明日は絶対安静ですね……」

苦笑い気味になりながらも答える。実際問題こんな状態じゃ何もできないわけだし……

「それなら今日はここで泊まっていきなさい」

「ええ……流石にそれは悪い気が……」

「病人は黙って言うことを聞いておきなさい」

キツパリと言い切られてしまったため、反論する事を諦める。

「……分かりました」

俺の返事を聞いた二人は安堵の笑みを見せる。そこまで不安がらせてしまったのだろうか……

(なあんか嫌な予感がするな……動けないし、何かされても抵抗出来る気がしねえ……)

「スウ……スウ……」

「……………」

「……………フニユ……………クウ……………」

ええ、予感的中しました……いや、まあ腕を枕がわりにするのはいいんだけどさ……キャミソール姿で寝られても困るといっつか何とか……目のやり場に困るんですよ。

「寝れる気がしねえ……」

二人の規則正しい呼吸音が聞こえる中、悶々としながら過ごす夜が過ぎていくのだった。

## ゆつたりとした時間を共に

Side 零斗

ある日の夜、家事が一通り終わりリビングで寛いでいると、スマホに一通の着信が入る。

「はい、もしもし。湊莉です」

『ええつと……こんばんわ、湊莉君』

『一花さん？こんな夜更けに何か御用ですか？』

電話を掛けてきた相手は一花さんだった。時刻は既に23時を過ぎている。この時間に電話をかけるという事は急用かもしれないと思い、気持ちを引き締める。

『その……私の事……どう思ってる？』

「……はい？」

思わず素つ頓狂な声を上げてしまう。まさか、そんな内容だと思わなかったからだ。

「……『仲のいい異性の友達』……でしょうか？」

『そっか……そう……だよね……ごめんね？いきなり変なこと聞いちゃって……』

俺が答えた瞬間、明らかに落胆している様子が伝わってきた。

『……は………わ………あ………』

電話の向こう側から微かに聞こえる言葉を聞き取ろうと耳を傾ける。声質的には女性……それも複数……

『ホント！にぶちんマスターは分かってないわね！こんなにも健気なアプローチを平気でスルーするなんて！』

『マジで可笑しくない?!こんだけわつかり易いアプローチしてのに気づかないなんてにぶちん過ぎしょ！』

『本当に先輩はにぶにぶでしゅー！』

小声で叫ぶという器用な真似をする恐らくはメイヴと鈴鹿、マシユ……他にも数名程度の声が電話越しから聞こえてきた。

(サーヴァント達と仲良くなってるのは俺としても嬉しいが……こんな事になるとはなあ……)

心の中で苦笑いしつつ、状況を把握する。これはあれか……所謂、女子会ってやつか。『………一花さん』

『ひゃい！なんでひようか！』

サーヴァント達の会話に気を取られていたのか、声を上ずらせながら返答してくる一

花さん。

「今度の日曜日、予定って空いていますか？」

『え？あ、うん。特に予定はないけど……』

「では、その日にデートしませんか？」

そう伝えると、電話口から物音一つ聞こえなくなった。そして数十秒後にやっと理解が追いついたのか慌ただしく動き出す気配を感じる。ドタバタと暴れるような音やら悲鳴のような叫び声が聞こえてくる。

「……大丈夫ですか？」

『ふえ!?う、うん！全然問題無いよ!』

そう言いつつも、どこか落ち着きがない様子の一花さん。

「返事はOK……という事でいいんですね？」

『も、もちろんだよ!』

「それは良かったです……では、10時に駅前の広場で待ち合わせしましょうか」

『う、うん！楽しみにしてるね……／／／』

恥ずかしそうに返事をした後、通話が切れた。俺は小さく息を吐き、ソファに深く腰掛ける。

「……何着て行くか考えるか」

ソファから立ち上がりクローゼットを開ける。中に入っている服を見渡しどれが良  
いかを真剣に吟味する。

(緊張のせいか、あんまり眠れなかったな……寝みい……)

欠伸を噛み殺しつつ待ち合わせ場所に向かう。

(服装も結局は普段通りになっちゃまったしなあ……)

今日のコーデは白シャツに黒ジャケット、下には濃いめの青ジーンズといった感じ  
だ。

(待ち合わせ場所に着いたはいいいものの……少し早過ぎたかな……)

スマホを取り出し時間を確認する。現在9時30分、約束の時間まではまだ30分ほ  
ど余裕がある。スマホを軽く弄りながら待っていると……

「ねえねえ、お兄さん。もしかして今暇？」

「……何か御用ですか？」

声を掛けられた方向に視線を向けるとそこにはギャルっぽい雰囲気的女性2人組が  
いた。1人は茶髪ロングヘアで、もう1人の方は金髪ショートヘアだ。茶髪の方が馴

れ馴れしい口調で話しかけてくる。

「もし暇ならさくあたしらと一緒に遊ばない？奢ったげるしさー！」

「いえ、結構です」

間髪を容れずに断りを入れる。すると、今度は金髪の方からも誘いの言葉を掛けられる。

「ちよつとだけでもいいんで遊びましょーよおー」

「すみませんが遠慮させていただきます……」

2人を振り切るように歩き出そうとするが腕を掴まれる。振り払おうと思ったところで後ろから聞き慣れた声が届く。

「湊莉君？待たせちゃったかな？」

「いえ、丁度来たところ——」

そこまで言った所で言葉を詰まらせる。何故ならば目の前にいる女性は見知った顔ではあるがいつもの格好ではないからだ。肩出しニットにフレアスカートの組み合わせで清楚感を出しながらも可愛らしい印象を受ける。髪型もサイドテールになっており活発なイメージを感じさせる。

「どうしたの？そんなにまじまじと見つめてきて？」

「あ、いや……なんでもないですよ。とても似合っていますね」

咄嗟に思った事を口に出してしまい頬に熱が集まる感覚を覚える。それを隠す様に顔を逸らす。

「そっか……ありがとう……／＼／＼」

俺達はお互いに照れたような表情を浮かべる。その様子を見ていた茶髪と金髪の女達が不満げな表情で近づいてくる。

「ちよつとー！無視しないでくんない？」

「そーそー！折角ナンパしてあげてんだから感謝してほしいんだけど？」

鬱陶しげに思いながらも、どうやってこの場を切り抜けようか思考を巡らせていると

……

「あの……私達これから用事があるんで失礼しますね」

一花さんが俺の手を取りその場から離れる。

「ちよつ！待ってって言ってんじゃん！」

慌てて後を追って来る女達……めんど……

「一花さん、ちよつとだけ失礼しますよ」

そう言うのと同時に彼女の膝裏に手を回しそのまま抱きかかえる。そう、お姫様抱っこである。突然の出来事に目を丸くしている彼女を抱えて走り出す。

「えっ!?ちよ……まつ……ひゃあつ！速い！速すぎるよお!!」



俺の腕の中でジタバタともがく一花さんを他所に足を動かす。

「……………ここまで来れば、大丈夫ですね」

暫く走った後、路地裏に入り込む。抱えていた彼女を地面に降ろした。彼女は若干涙目になりながら此方を睨んでいる。

「……………怖かったんだからね！急にあんなことするなんて！びっくりしちやっただじやない！もう少しで落ちるところだったんだよ!?!」

ぷくつと膨らませたほっぺが可愛いと思いつつも、素直に謝る。ごめんなさいと頭を下げると、許してくれたのかクスリと笑う声が聞こえてきた。

「でも……………ありがとね。助けてくれて」

「……………当然のことをしただけです」

そう答えると、またもやクスツと笑われる。そして、いきなり俺の左腕をギュツと抱きしめてきた。柔らかいものが当たり理性が削られていくのを感じる。

「今日はデートなんだから……………これぐらいは……………良いよね?」

上目遣いをしながら、そう問いかけてくる。俺が無言のまま首を縦に振ると、嬉しそうな笑みを向けてきた。

(心臓に悪い……)

バクバクとなつてゐる鼓動を必死に抑え込み、平静を装う。そして、デートがスタートした。

「何処に行きましようか」

「……零斗君は何処に行きたい？」

質問を質問で返されてしまった。うーむ……行きたい所か……正直、特にこれと言つていきたい場所もない。強いて言えば……

「水族館……でしようか」

「じゃあ行こうか！」

即答された……というか拒否権無かつたな……まあ、特に嫌な訳でもないから別にいいか。

「あ、その前に……はい、手繋いで行こう？」

差し出された左手に右手を乗せる。そして、恋人繋ぎをする。お互いの顔を見合わせ微笑み合う。そして、二人で並んで歩き始めた。

電車に乗り揺られること数駅、目的地に着いた。チケットを購入し中に入る。

「うわあ〜！凄く綺麗だね！湊莉君！」

はしやぎながら水槽の中を眺める一花さんの姿はまるで子供みたいだなと思う。その姿を見ていると自然と頬が緩んでしまう。

「……………どうかしたの？」

「いえ、何でもありませんよ」

不思議そうに首を傾げる彼女にそう答えた俺はゆっくりと歩みを進める。その後ろをトコトコとついて行く彼女。

「……………楽しいですか？」

「うん、勿論だよ！」

満面の笑顔で言う。それを見た俺は心が暖かくなるのを感じた。

「……………それは良かったです」

その後も様々な種類の魚を見て回った。ペンギンやアザラシなどもいたが……………何故かペンギンがこちらをじっと見つめてくる。

（え？俺、仲間だと思われてんの？そんなペンギンっぽい？）

自分でもよくわからない疑問に頭を悩ませつつ、隣にいる一花さんを見ると、瞳をキ

ラキラとさせある一点を見ている。そちらの方に視線を向けると……そこには、『ペンギンの餌やり体験』と書かれた立て看板があった。

「……………」

「湊莉君、あれやろうよ。絶対楽しいよ！」

「……………そうですね」

係員のお姉さんにお金を渡し、餌を貰い、近くにいた一匹のペンギンに食べさせる。すると、一斉に集まってきた。

「……………多すぎませんか？」

「あはは……………」

苦笑いを浮かべるお姉さん。足元にはぎつと数えても十数羽のペンギンがエサを求めて群がって来ている。

「痛い……………」

太ももの辺りを嘴でツンツンと突かれる。地味に痛い。

「はい、どうぞ」

取り敢えず、エサを与える。すると、今度は肩や腕などを狙って突いて来る。結局、全てのペンギンにエサをあげ終わるまで、突かれまくった。

「楽しかったね！」

満足げに言う一花さん。まあ、本人が喜んでくれたならそれでいいだろう。そんな事を思いながら足を進め、クラゲが沢山展示されているエリアに来た。

色とりどりのライトによってライトアップされているクラゲ達を見ると、何となく癒される気がするのは何故だろうか。

「……綺麗だね」

「そう……ですね」

少しだけ、見惚れてしまった。薄暗い空間に漂う無数の光、その光に照らされて浮かぶ彼女の横顔。その姿はとても幻想的で美しいものだった。

「……そろそろいい時間ですね。名残り惜しいですが帰りましょうか」

「うん……そうだね」

彼女の返事を聞き、出口に向かって歩き始める。外に出るとすっかり日が落ちており、空はオレンジ色に染まっていた。

「もう夕方なんですね……時間が経つのは早いですね」

「ほんと……あつと言う間だったね」

「はい……今日一日、とても充実していました」

本当に充実した一日だったと改めて思う。こんなに幸せな気持ちになったのはいつ以来だろうか。そんな事を考えながら歩いていると、突然袖を引っ張られた。

「……どうかしましたか？」

「……最後に……一つお願いがあるんだけど……聞いてくれる？」

頬を赤らめながら上目遣いで此方を見る。その瞳からは不安の色が伺えた。

「内容にもよりますが……可能な限り叶えてあげたいと思います」

「……ありがとう」

俺の言葉を聞いた彼女は深呼吸をし、意を決した表情で此方を向く。

「……キス……してほしい」

「……へ？」

突然の告白に動揺してしまう。

「……ダメ……かな……？」

悲しそうに俯き、消え入りそうな声で呟く彼女。彼女の願いを叶えてあげる為、顔を

近づけようとした瞬間……グウ〜とお腹が鳴る音が聞こえてきた。音の出所は……

俺じゃない。

つまり……恐る恐る彼女の表情を確認する。彼女は耳まで真っ赤にしながら、プル

プル震えていた。

「クフフ……少し早めではありませんが夕食にしましょうか。今回は私の奢りです」

恥ずかしさでいっぱいな彼女を落ち着かせる為に、なるべく優しい声音を意識して話

しかけた。

「……………うん……………ありがとう」

「そうそう、一花さん」

「な、何かな!?!」

俯いていた一花さんが顔を上げた瞬間に腰に手をまわし、抱き寄せる。

「わわっ!ちよっ!?!今何を!!」

さらに紅くなつた彼女が言葉を発そうとした瞬間……………チュツつと軽く触れるだけの口づけをした。不意の出来事にポカんと口を開け固まる一花さん。

「今日、付き合ってくれた御礼です。喜んでくれた様で良かったです」

「な!…なななな／＼／＼」

やつと今の状況を理解できたのか、慌てる一花さんを見て微笑む。

(……………我ながら良いものが見れたな)

夕焼けの様に綺麗に染まっている彼女のほっぺに触れながら俺はそんな事を思った。

# 女子会といえは恋愛話!

Side 東雲

「お、お邪魔します……」

「そんなに畏まらなくてもいいのよ?」

刀華さんがクスクスと笑いながら、手を引いてくれる。私は慌てて靴を脱ぎ揃えると彼女の後ろについて行った。

(やっぱり……綺麗な人だなあ……)

こうしている今も彼女の周囲にオーラのような何かを感じてしまう程だった。その立ち居振る舞いには気品があり、姿勢はピンと張った一本糸のようにまっすぐで美しい。

一挙手一投足も美しく整っていて、見ているだけで心を奪われてしまう。

「そんなに熱い視線を向けられると少し恥ずかしいわね……」

刀華さんの困り顔を見てハツとする。私どれだけ凝視してたんだろう!? でもしよ  
うがないよね!こんな美人なんだもん!!

「……………や、ハハハ」



案内された部屋はとても広くてすぐくオシャレな雰囲気の部屋だった。そしてそこには――

「お！来た来たー！やつほー、いっちゃん！」

明るい笑顔を浮かべた可愛い女の子が……私の友達である悠花ちゃんがあった。彼女はテーブルに置かれたケーキを手に取り美味しそうに頬張りながら手を振っている。

「貴方が先輩が話していた、東雲さん……ですか？」

「は、はい！そうですけど……貴方は……」

「私はマシユ・キリエライトと言います。先輩の……零斗さんの頼れる後輩です！」

悠花ちゃんの隣にいた薄紫色の髪で眼鏡をかけた子が声を上げたかと思うと、なぜかドヤつと胸を張るような仕草を見せた。

「つと、そろそろ来るかしら……」

刀華さんが何事かを呟いた瞬間扉が開いく音がした。

「こんにちわ、一花さん。自分の家の様に寛いでくれていいのよ？」

「ねえねえ、刀華ちゃん……この子が例の子？」

「ふーん？中々可愛いじゃない！」

入ってきた人達はクラスメイトの鏡花さんに、現役JKモデルの鈴鹿御前さん、グラビアアイドルの最高峰と名高いメイヴちゃんさん……アヴァロンに所属している人達

が勢揃いしている。

「と、刀華さん?これは……一体どういう事なんですか?」

状況がよく飲み込めない私が混乱したまま尋ねると、にっこりと笑って。

「女子会を開催するのよ!」

楽しげな声でそういった。それと同時に周りのみんなも同じ様に笑みを浮かべる。私は突然の展開に追いつけないまま流されるように席に着いた。

……隣に座ってきた刀華さんから凄く良い匂いがするんですけどお……心臓の音うるさいくらいなっています……

「そして……女子会と言えばあ?」

悠花ちゃんやニマニマと笑いながら質問を投げかけると、周りにいる女性陣全員がこちらを見てきた。

「それは……」

「もちろん?」

「あれ……しかないわよね?」

「え?え?え?」

置いてけぼりになっている私を周りの人達が意地悪そうな目付きで見つめてくる。

「恋バナ……よ!」

一斉に手が挙げられたと同時に刀華さんの口から飛び出た言葉を聞いた瞬間……耳まで真っ赤になるのが分かってしまった。

「……まあ、女子会と言いつつも本当は零斗をどうやって墮とすのかを相談する為に集まっているのよね……」

鏡花さんが呆れた表情で溜息をつくとお茶を一口飲む。それを横目に鈴鹿さんが目を輝かせた。

「それでそれで？ いっちゃんは何処が好きなのかな？」

完全に酔っぱらいのような口調になって顔を近づけてきた彼女の迫力に押され思わず身を仰反らせた後ちチラツと周りを見ると……すでにニヤついた顔で囲まれている事に気が付いてしまう。

(だ、誰か助けてえ……)

助けを求めるように周りを見渡すが皆さんの顔を見る限り話さないと帰さないといった感じだったので諦めることしか出来なかった。

「零斗くんの瞳が好きなんです……南雲くん達も見ると優しそうな目が、微笑んだ時に薄っすらと細まる目が、時々寂しそうな目が……」

ずっと眺めていたくなるほど魅力的なあの人のことを思い出して少し俯きがちになりながらも一生懸命伝えようとしてみるが上手く言葉にすることが出来なかった。そ

れに途中で恥ずかしくなり段々と声が小さくなつていく。

「確かに、あいつはそういう男よね」

「何時も私達が困つているときに優しく手を差し伸べてくれるんですよ……」

私の拙い言葉を真剣に聞いてくれた彼女たちが口を開く。その顔は全員恋する乙女のように可愛らしく優しいものだった。

「……でも! あんな人たらしなのは絶対に許せないわ!!!」

先程まで紅茶を飲んでいたメルトさんはカップを置くと語気を強めながらそう言った。

「そうでしゅー! いつもいちゅも私達の好意に気づいてながら焦らすなんていけないと思いましゅー!」

何故か顔を赤くして、舌足らずになつてしまつているマシユさん。

「……これウイスキーボンボンね。ほら、マシユお水飲みなさい」

「ありがとうございましゅー!」

刀華さんがマシユの食べたチョコレートの包み紙を確認し、マシユさんに水の注がれたコップを渡し、席に戻つた。

「……まあ、確かにあれは頂けないわよね」

鏡花さんがポツリと呟いた。その表情は少し複雑そうだったが、それも一瞬のことで

直ぐに慈愛に満ちた顔付きになる。

「でも、誰にだつてそんなんでしよう?」

「……はい、困つてる人を絶対見逃したりしないと思います」

苦笑いを溢しながらそう言つた刀華さんを見て、ふと一つの疑問が思い浮かんだ。

「刀華さんつて……何時ぐらいから零斗君と付き合い始めたんですか?」

「……中学に上がる前くらい……かしらね?」

頬に手を当てながら懐かしむような表情を見せた刀華さんが、ぽつりと呟いた。

「じゃあ結構長いんですね?」

「そうねえ、彼との関係を表すとしたら……一番合う言葉は『家族』かしら?」

クスツツと笑つた刀華さんが悪戯つぽい笑顔を向けてくる。なんだか見ているこつちが幸せな気分になつてしまう。幸せとはこういう事なんだろうな……なんていう事を思つてしまう程だった。

「ホントに幸せそうだよねえ……まあ、四六時中イチャコラしている姿を見せられるのは勘弁して欲しいけどね」

「……私からすれば貴方も大概だけどね?」

悠花ちゃんの一言を聞いて鏡花さんが深いため息を吐く。

「いいもん!私は一途だから!」

悠花ちゃんは口を尖らせて不満な態度を見せるが、鏡花さんからはそれ以上何も言われなかった。

「二花さんは先輩と何処まで行ったんですか? キスでしゆか? それとももつと先の事までしたんでしゆか???」

眼鏡をきらりと光らせぐいつと詰め寄ってきたマシユさんに思わずたじろいでしまふ。

「そして、そんな事はしてないですよ!?!……まだ……はず……した事ありません……」

想像しただけで身体が熱くなったような感覚を覚え慌てて否定するが最後の方では自信が無くなってしまい声はどんどん萎み、ついに聞こえなくなる。

「へえ? そんな事言われちゃったらア……意地でも聞き出したくなつちやうなあ!」

「ちよ、ちよつと、くすぐらないで……ふひゃ!」

抱きついてきた悠花さんに抵抗出来ずなすがままにされてしまい、恥ずかしさで死にそうになる。

「そ、そういう悠花ちゃんは鹿野君と何処までいったんですか!」

悠花ちゃんの手を必死に引き剥がそうとするけど、この細い体のどこにこんな力があるのかと思うほど離れようとしなかった。

「ふえ?」

「…………え？」

悠花ちゃんがキョトンとした声をあげた瞬間力が抜けたのを感じ咄嗟に身を離す。悠花さんの顔を覗こうとすると突然歯切れが悪くなり、明後日の方向を向いてしまう。

「まあ、えーと、あれだ…………うん、まあまあ、かなあ？」

「はい？」

悠花ちゃんが急にもごもごと何かを喋り始める。だが、うまく聴き取れず問い返すように聞くと、彼女は観念したのかはあと息を吐いてからポツリと零す様に…………

「行くとまでは…………行つたよ？」

「あらあら、初々しいわね？」

それを聞いていた鏡花さんが口元を隠しながらクスクスと笑う。

「そ、そういう鏡花はどうなのさ！ 恭弥と何処まで行つたの！」

顔を赤く染めたままの悠花さんが叫ぶと、鏡花さんは口元の笑みを深め…………

「婚約」

とだけ言った。その言葉の意味を理解するのに数秒の時間を要したが、理解してからも驚きが勝る。

「…………おおう…………」

悠花ちゃん達も似たような反応だった。正直そこまで進んでいるとは思って居な

かったので、まさか婚約者になっていたことに心底驚く。

「……………つてことはもう……………」

「その先は言わせないわよ?」

刀華さんが言い終わる前に鏡花さんが手で遮るようにして止める。これ以上踏み込んだら殺すといった威圧感が放たれていた。

「……………いいなあ」

そんな言葉が自然と口から出てきた。他の三人も同意するように強く首を縦に振る。羨ましい。そう素直に思った。お互いを尊重し合い、愛し合うことが出来る人達が……「私って零斗君にとつて……………どんな存在なのかな……………」

自分で言つて少し悲しくなる。自分は彼の隣に立つてもいいのだろうか……………きつと相応しく無い。もしそうなら皆んなのように彼を好きで居る資格が無い。

「なら、直接聞けばいいじゃない」

首をコテンと横に傾けてそう問いかけて来たメルトさん。その顔は不思議そうにしていた。

「それもそうね……………はい、電話掛けたから聞いてみなさい」

「え?! もうちよつと考えさせ『はい、もしもし。湊莉です』」

鏡花さんがポケットからスマホを取り出し画面をこちらに向けてくる。あまりの展



開に頭が付いていかないが、それでも反射的に通話を開始してしまう。

「ええつと……こんばんわ、湊莉君」

緊張で一瞬詰まるが何とか言葉を紡ぎ出す。

（あれ……これって結構ハズカシイ……）

何時もと同じ挨拶なのに酷く心臓がバクバクと音を鳴らして痛い。顔が燃えているんじゃないかと思うぐらい熱い。

『一花さん？こんな夜更けに何か御用ですか？』

機械越して聴く普段よりもどこか優しさを含んだ声で名前を呼ばれる度に嬉しさや切なさが入り交じり複雑な感情が心に渦巻く。やっぱり好きだ。彼に対する思いがどんどん膨れ上がっていく。

「その……私の事……どう思ってる？」

『………はい？』

思わず口に出して言ってしまった言葉。それに対して、返ってきたのは疑問の声だった。胸の鼓動が早まり息苦しくなりながらも、返答を待っていると……

『………仲のいい異性の友達』………でしょうか？』

帰ってきたのは拒絶の言葉。心の奥がズキンと大きく軋む。わかっていたはず、彼の周りには可愛い女の子が……綺麗な女性がいっぱいいるんだもん。私なんかより魅力

的な子が……

「そっか……そう……だよね……ごめんね?いきなり変なこと聞いちやって……」

震えそうになる声を抑え平静を装いながら必死に絞り出したが、今自分の表情はどのような物になってしているだろう。涙が出そうになる目頭にギュツと力を入れ、必至に堪え、無理やりにでも笑顔を作る。

「私の初恋……終わっちゃったなあ……」

ボソリと小さく呟いた筈の独り言は、まるで死刑宣告を言い渡された罪人のような重い雰囲気にも包まれた部屋の空気をさらに重くしてしまふ。

「ホント!にぶちんマスターは分かかってないわね!こんなにも健気なアプローチを平気でスルーするなんて!」

メイヴさんがバンとテーブルを叩き立ち上がる。彼女の言っていることがよく分からず呆然としてしていると……

「マジで可笑しくない!?こんだけわっかかり易いアプローチしてのに気づかないなんてにぶちん過ぎしょ!」

「本当に先輩はにぶにぶでしゅ!」

鈴鹿さんやマシユさん……他の人達まで立ち上がり、口々に彼に悪態をつく。私は訳がわからないままその様子を眺める事しか出来なかつた。

『……一花さん』

「ひゃい！なんでひようか！」

突然呼び掛けられ思わず舌を嚙んでしまう。恥ずかしさの余り消えてしまいたい衝動に駆られていると……スピーカーモードに設定されていたスマホの向こう側から彼の声が聞こえてくる。

『今度の日曜日、予定って空いていますか？』

「え？あ、うん。特に予定はないけど……」

突然の事に驚き戸惑ってしまうが、慌てて肯定すると彼はいつも通りの優しい声音のまま更に質問してくる。

『では、その日にデートしませんか？』

その瞬間、時間が止まった様に感じられた。周りの刀華さん達の動きも止まり、こちらを凝視していた。

「零斗から……お誘い？」

「私達のお誘いは断るのに？」

「自分からデートの提案？」

その場に居た全員が信じられないと言わんばかりに口をポカンと開けながら固まっていた。

「メイヴ、鈴鹿！今すぐこの家にある服のカタログを持ってきてコーディネートするわよ！」

いち早く硬直状態から抜け出した鏡花さんが大慌てで部屋を出て行く。

「刀華、メリュジーヌ、メアリー、ボニーは一花さんにデート中のアプローチの仕方を教授してあげて！」

鏡花さんの指示のもと、それぞれの女子達はこちらに向かって駆け寄ってくる。キヤー!!という歓声が部屋に響き渡る中……

『……大丈夫ですか?』

「ふえ!?う、うん!全然問題無いよ!」

耳元に届く湊莉君の心配そうな声で我に返り、返事をする。そして、もう一度スマホからは零斗君の声が聴こえてきた。電話越しに聞こえる彼の低い安心するような声で胸の内が温かくなっていく。

(……ちよつとだけ期待してもいいのかな……)

そんな淡い願望を抱きながらも、今夜は眠れないだろうと思いつつ、着ていく服装について盛り上がる皆んなの声を聴いていた。

## 不運（ハードラック）と踊（ダンス） っちまった

Side 零斗

「ふわ……」

今日も今日とて学校へ向かう、週の初め……月曜日ということもあり、学校へ向かう足取りが僅かに重く感じる。

「お！零く斗！おっはー！」

「朝から元気ですね……貴方は……」

背後からやかましいくらい元気な声を発しながら、こちらに駆け寄ってくる悠花に呆れつつ、後方から走ってきている柀人に声を掛ける。

「おはようございます、朝から大変ですね？」

「ああ……おはよう」

二人と合流したところで、再び歩き出す。世間話をしつつ通学路を進む。

「あ、そういうえば零斗。刀華達はどうしたの？」

「家庭の用事等で今日は休みだそうです……鏡華も同様の理由で休みで恭弥は二人の付き添いだそうです」

「なるほどね〜」

何か言いたげな雰囲気ですぐ返事をする彼女に溜息をつくも特に気にしている様子はなく、何気ない会話を続けていく。

しばらくして校門が見えてきた頃になって唐突に話題が変わる。

「あー！ そうだ零斗！ これ見てー」

悠花がスマホの画面に映っている一枚の写真を指差して楽しそうな表情を浮かべていたので視線を落としてみるとそこには……

「……何がご所望なんですか？ 大体の要求なら飲みましょう」

俺が一花さんの額に口付けをしている写真だった……というかいつの間にかそんなものを撮っていたんだこいつは……

「よし交渉成立っ！」

悠花はニヤリとした笑みを深め、心底満足そうな顔をしていた。

「まあいいでしょう……ではそのデータは消しなさい」

「嫌だよ！ せっかく零斗を脅せるモノを手に入れたんだからもう少し有効活用しないと！」

こういう時だけ賢いんだよなあ、こいつ……いつもその聡明さを見せてくれれば……とも思うのだが生憎彼女の思考回路の大半は下衆さと悪戯心に偏ったようなものなの

で無理だろうな。

「まったく……」

ため息混じりの言葉とともに肩を落とす。そんなこんなしていると自教室の前に到着した。

「じゃ、私たちは自分のクラスに行くね。またお昼休みにねえ」

はしゃぐ子供をあやす様に告げると手を振り合いながら悠花と柊人は自分のクラスに入って行った。

「……今日は厄日ですね」

憂鬱な気分を押し込めつつ俺は1限目の準備に取り掛かるために自身のクラスの扉を開く。

「あ、おはよう零斗」

「おはようございませす、ハジメ。今日は珍しく早いですね？」

席につくと同時に隣の席である親友にしてクラスメイトでもあるハジメに声をかけられ返答する。

「珍しくとは失礼だな……僕だって早起きすることぐらいあるよ」

不貞腐れたように言う彼に苦笑いしながら謝りつつ授業開始を待つ。

「ハジメさん、おはようございませす」

「ハジメ、おはよう」

少し遠目の席に居た、ユエとシアが俺達の元にやって来た、二人とも学校生活に大分慣れたのか家ではよく学校の話を楽しそうにしてくる。

やがて朝のホームルームが始まり担任からの連絡を聞き終えてから1時限目の授業が始まった。

「——以上になります。これで四限目の授業は終わりです、お疲れ様です」

教師の声と共に起立・礼をして各々昼食を食べ始める者や弁当箱を取り出す者など様々だが、大半の者が仲の良い者たちと一緒に机を寄せ合って食べ始めたりする光景が見られる。

「零斗く、ハジメく！お昼一緒に食べよう！」

元気よく声をかけてきたのはやはりと言うべきか悠花で、その後ろには当たり前のように終人が立っていた。

「ええ、構いませんよ」

「ありがとう！それじゃ早速だけど行こうか」



四人で屋上に向かう道すがら談笑をしながら歩く。

「ねえ、零斗……なんか感じない？」

「……ええ、何だが胸騒ぎがしますね……」

校舎内に入ったあたりから妙な感覚を感じる。まるで誰かに見られているような気配を感じて落ち着かない。

「……警戒だけはしておきましょう」

「了解……」

そのまま階段を上り、屋上のドアを開けて外に出る、穏やかな風が頬を撫でる。

「んー、やっぱりここで食べるのが一番だよね」

悠花が気持ち良さそうに伸びをする横で、俺は柵にもたれかかりながら街を見渡す。

確かに心地良い場所だ、だが同時に先程から感じる違和感が拭えないことも事実であり、それがどうも不安を掻き立てる要因となっている。

「零斗、早くお昼ご飯食べようよ」

「わかってます……今行きますので……」

悠花に急かされながらそれぞれに自作の弁当を手渡して、食事を始める。味わう余裕もなく、黙々と箸を動かす。

「ふう……美味しかったね！ごちそうさま！」

いち早く食事を済ませた悠花は満足そうな顔を浮かべている。しかし、相変わらず違和感が消えない。すると校舎内に続く扉が開き、そこから一人の男子生徒が姿を見せた。

「ここに居たんだな……湊莉」

「何か用ですか？天之和……」

彼を見て一瞬、不快感が込み上げてきたがそれを堪えて要件を聞く。

「……畑山先生が呼んでいたので」

俺の態度が気に入らないのか若干苛ついた様子を見せながら答えた。

「そうですか……要件が済んだのでしたら、さっさと何処かに行ってください」

これ以上こいつと会話をする気は無い。そう思い言葉を投げかけるも、相手はなおも食いが下がる。さらに距離を詰めてくる彼に、俺の中の嫌悪感が増していく。

「どうしてお前はそんなに偉そうなんだ……？」

「貴方には関係ないでしょう……さあ、早くどこかへ行つて下さい……」

「……っ！なんだその言い方は！」

ついに我慢の限界が来たのか、彼は声を荒げて怒りの形相を浮かべると、こちらに向かって歩み寄ってくる。だが、その時だった。

「ッ!？」

突如として、背筋を走る悪寒を感じ、その場から急いで飛び退く。次の瞬間、さつきまで自分の立っていた場所に……正確には対面にいた天之河の足元に光り輝く円環と幾何学模様が現れていた。

「早く！ 離れなさい！」

咄嗟に叫ぶ。何故この魔法陣が現れたのかは不明だが、このままでは不味い。直感的にそう思った。だが遅かった。眩い光が視界を埋め尽くした。

「……チツ」

思わず舌打ちが出る。辺りを見回すが、すでに天之河の姿は無くなっていた。おそらく転移させられたのだろう。

（あの野郎……面倒事を増やしやがって……）

そんなことを考えながら、先程の状況について思考する。

（俺の知っている魔術、魔法の術式と一切の類似点が無かった……別次元もしくは他の世界線からの物だろうが……それにしても術式が荒い……）

仮にそうだとしたら、そもそも何故、この世界に干渉できたのか……疑問は尽きない。

「……零斗？」

思考の海に浸っていると、いつの間にか傍に来ていたハジメに声をかけられた。

「大丈夫？」

「ええ、問題ありませんよ」

「ならいいんだけど……」

心配そうな顔をしているハジメを安心させるために微笑みかけてから、未だに残っている魔方陣に視線を移す。

「……とりあえずこれは調べておく必要がありますね」

嫌な予感が当たってしまったことに、俺は小さくため息をつく。

「零斗……これってもしかして……」

「……まあ、十中八九面倒事に巻き込まれましたね」

悠花の質問に答える。正直、予想通りの展開すぎて頭が痛くなってきたが、ここであんなに呆然としても意味が無い。

「ひとまず教室に戻りましょう、昼休みもそろそろ終わりますし」

「あ、うん、わかった」

悠花たちに告げてから校舎内に入り、そのまま自分たちのクラスに入る。そして、適当な言い訳をしてから早退する旨を伝えて学校を出た。

「先輩？どうしてこんな時間にアヴァロンに？平日のこの時間は学校でしたよね？」

「……まあ、色々あつてな」

家に帰る前にアヴァロンに寄ると、マシユが不思議そうに問いかけてきた。簡単に事情を説明すると納得してくれたようで、それ以上深く追及されることはなかった。

「それで、今日はどういったご用件で？」

「俺がカルデアに居た時の荷物って持つてるか？あれば幾つか引き取りたいんだが……」

俺の言葉を聞いて少し考え込むような仕草を見せると、しばらくしてから思い出したように口を開いた。

「確か保管してあるはずですよ。ちよつと待っていてくださいいね……」

そう言つて奥の部屋に入つていくと、程なくしていくつかの段ボールを抱えて戻つてきた。

「ありがとうございましたよ」

「助かるよ、ありがとう」

礼を言いながら受け取り、中身を確認する。愛用していた礼装にサーヴァント達からの贈り物、霊基グラフのコピーなどを確認していく。

「……お、あったあった」

その中から目当てのものを見つけ、ほくそ笑む。俺が手に取ったのは真っ黒なUSBだ。この中にはとあるプログラムが入っている。

その他にもいくつか必要なものを回収して、帰路に付く。

家に帰ってからすぐにパソコンを立ち上げる。起動するまでの時間を利用して、先程手に入れたUSBの中に入っているプログラムをインストールしていく。すると、画面が暗転して中央にホログラム映像が投影される。

『お久しぶりです、レイト様』

「ああ、久しぶりだな……ルード」

映し出されたのはモノクロの仮面がふよふよと浮いている姿だ。こいつは俺が前世で作り上げた追跡と情報解析に特化したAIだ。

「早速で悪いんだが、お前の力を借りたんだが……大丈夫か？」

『ええ、問題ありません』

俺の頼みを快諾してくれる。まず、天之河の足元に発生した魔法陣の術式を分析してもらい、それを記録してもらおう。

「……よし、じゃあ頼む」

『了解しました……分析完了、記録します……』

ルードに頼んで数分後に、そのデータが転送されてきた。それを見ながら、今度は自分の記憶にある魔法陣と照らし合わせてみる。

「……やつぱり違うな……」

やはり、俺の記憶に無い術式が使われていた。だが、それでも類似点はあるはずだ。そう思つて、しばらく作業に没頭していると、突然ルードの声が聞こえて意識を現実に引き戻された。

「ん……終わつたのか？」

『はい、終わりましたよ。それと一つだけ忠告を……あまり深追ひしない方がよろしいかもしれませんよ？』

「……どういうことだ？」

『それは私が言うべきことではありませんので、後は自分で考えて下さい。では、私はこれで失礼致します』

それだけ言い残して姿を消す。ひとまず、ルードからの報告を整理する。天之河の足元に出現した魔法陣は、俺の知識と照合しても一致するものは無かったが、ルードの分析によると、この世界のものでは無いらしい。

「つまり、この世界とは別の異世界の産物つてわけか……」

そこまで考えたところで、不意に疑問が湧き上がってくる。何故、別の世界線……もしくは別次元の魔法陣が現れたんだ？ 考えれば考えるほど思考は淀んで行く……

『汝が久しく深淵を見入るとき、深淵もまた汝を見入るのである』……本格的に調べるならそれなりの準備をしないと……」

誰に向けるともなく呟く。俺の勘が正しければ、面倒事が近いうちにまた起こるだろう。その時までに来る限りの準備をしておかなければ……



## ある少女の神隠し

Side 東雲

「暑い……溶けるう……」

茹だる様な熱気に耐えながら、悠花ちゃんとの待ち合わせ場所に向かう。現在の気温は30℃を超えていて、しかも湿度も高いから、ジメツとした空気が余計に不快感を煽ってくる。

「なんで、今日に限って猛暑日なんだよ……」

額から汗が流れ落ちるのを感じながら、私は思わず愚痴った。ふと空を見上げると、太陽がキラキラと輝いていた。ああ……眩しい……

『チリーン……チリーン……』

「ん？」

何処か遠くの方から鈴の音が聞こえてきた気がした。でも、周りを見ても誰もいないし……

『チリーン……チリーン……』

やっぱり聞こえる……何処から……？ 私はその音に導かれるようにフラフラと歩

き出した。しばらく歩くと寂れた神社に辿り着いた。

「おや、こんな寂れた神社に客人とは珍しい……」

神社の階段を登ろうとした時、後ろから声をかけられた。振り返るとそこには青い着物を着た男の人が立っていた。

「あの……あなたは？」

私がそう聞くとその人はニツコリ笑って答えてくれた。

「私かい？私……この神社の宮司……になるのかな？」

「なんだか曖昧な言い方をする人だなと思ったけど、それよりも今は聞きたいことがあった。」

「あの……さつきまでここで鈴の音を聞いたんですけど……貴方が鳴らしていたんですか？」

私がそう言うとその人の表情が変わった。まるで面白いものを見つけた子供のような笑顔だった。そして、ゆっくりと口を開いた。

「そうか……君が私の花嫁なのか……」

「え？」

突然言われた言葉の意味がわからなかった。私が困惑していると、男の人が私の方に歩み寄ってきた。

「ちよっ！来ないで下さい！」

本能的に危険を感じた私はその場から離れようとした。だけど足が動かない!?よく見ると足元には白いモヤのようなものが広がっていた。

「なにこれ!?!」

「大丈夫だよ。怖くはないからね……」

男の人は優しい声で語りかけてくる。怖いはずなのに何故か安心感があるような不思議な感じがする……

「さて、行こうか……」

男の人はそう言つて手を差し出してきた。不思議と恐怖心は無くなっていた。むしろ差し出された手に自分の手を添えたいという気持ちになっていた。

「は……い……」

私は素直に手を取つた。すると急に眠気が襲つてきてそのまま意識を失つた。

「ようやく手に入れたぞ……我が花嫁よ……永遠に愛してるぞ……我だけのモノよ……」

最後にそんな声が聞こえてきた気がした。



side 悠花

「ああ……暑いい〜」

私は今待ち合わせ場所に着いているんだけど、まだ来てないみたいだから近くのコンビニでアイスを買って食べているところです。

「それにしても遅いなくいつちゃん……どうしたんだろ？」

もう30分くらい待っているけど一向に来る気配がない。電話にも出ないしLINEも返ってこないし……何かあったのかと思っただけで心配になっただけ。

「仕方ないか……ちよつと探してみようかな……」

私はそう呟いて立ち上がった。その時、ふと視界の端に見覚えのある姿が見えた気がした。

「あれ？あそこにいるの……いつちゃんじゃ……？」

遠目から見てもわかる。間違いない、あれはいつちゃんだ。私は慌てて駆け寄ることにした。

「いつちゃん!!」

走って近づきながら声をかけると、向こうも気づいたようで振り向いた。でも、様子がおかしい。

「ねえ、どうしたの？何があつたの？」

肩を掴み揺すりながら聞いてみるけど返事が無い。顔を見ると目は虚ろで焦点があつていないように見える。

「え？ちよつと？本当にどうしちゃつたの？」

少し不安になりながらも再度問いかけた瞬間、私は背筋に冷たいものが走つた感覚に襲われた。

「ひっ!？」

思わず悲鳴を上げてしまった。だって、目の前にいる女の子の顔はまるで人形のように無表情なのだから……

「悠花ちゃん……一緒に行くコウ？」

「え？なに？どういうこと？」

いきなり言われても意味がわからない。

「悠花ちゃん……一緒に行くコウ？」

そう言いながら私に向かって手を伸ばしてきた。その様子はまるで獲物を狙う狐のように思えた。

「ッ!!」

私は反射的にいつちゃんの腹部に拳をめり込ませた。すると、ガクンと糸が切れた

操り人形のように崩れ落ちた。

「ごめんね、いっちゃん……」

私はそう謝ると、いっちゃんを背負ってその場を離れた。

（ここからだ……アヴァロンより零斗の家の方が近い……そつちに運んでから診断して、それから——）

この後の事を考えながら、零斗の家に向かって走る。

走ること約二十分、ようやく零斗の家に着いた。玄関の扉を力技でこじ開けて、中に入る。

「零斗！ いる!?!」

「……ハア、悠花何度言えばわかるんだ？ 来るならせめて連絡を……」

玄関先で声を張り上げて、零斗を呼ぶ……すると、気だるそうにしながら現れた零斗。だが、私の背中で気絶しているいっちゃんの姿を見て、険しい表情に変わった。

「……何があつた?」

「詳しいことは後で話す。とりあえず、診て欲しいの。お願い!」

真剣な眼差しで見つめると、零斗はため息をついて私達についてきた。リビングに入ると、ソファアーの上に寝かせた。

「……これはまた厄介な奴に目をつけられたようだな……」

いっちゃんの様子を見て、顔をしかめる零斗。厄介なやつってなんのことだろう？  
そう思い、聞こうとした時だった。

「っ!？」

いっちゃんから凄まじいプレッシャーが放たれ、思わず後退ってしまった。

「……威嚇……か」

零斗はいっちゃんを見ながら、ポツリと呟いた。

「い、威嚇って……そんな野生動物じゃないんだから……」

「似たようなものだ。コイツは自分のモノに近づく者を排除しようとしている」

零斗がガシガシと頭を掻きながら言った。そして、再びいっちゃんの方を見た。

「あの子はこの土地の土地神に魅入られたみたいだな……」

土地神……確か、神様のことだったよね。それなら、あの異様な雰囲気にも納得がい  
く。でも、そんな存在が何故いっちゃんに？

「説明は端折るが、このまま放置すれば一花さんは『向こう側』に連れて行かれる」

零斗は淡々と事実だけを述べた。そして、こちらを見据えて口を開いた。

「それで、どうするんだ？」

「もちろん助きたい！」

即答する。だって、大切な友達が攫われそうになっているのよ。ここで黙っていたら女が廃るもの！

「……そうか」

私の答えを聞いて、零斗は小さく笑みを浮かべて言った。そして、そのまま立ち上がる。

「何処に行くの？」

「決まってだろ？土地神のところだ」

零斗はそう言って歩き出した。私はその後を追っていった。



Side 東雲

「んう……ううん？」

私は布団の中で目を覚ました。あれ？ここはどこ？私はさつきまで何してたんだっけ？

「……知らない部屋……」

キョロキョロと見渡すけど全く記憶にない場所。なんだか頭がボーとする。何が



あつたのかを思い出そうとしてみるが、記憶に霧が掛かった様に朧げになっている。

「目が覚めたかい？」

不意に声をかけられて、声の主を見る。そこには青い着物を着た男の人が立っていた。

「貴方は……？」

「私かい？私は君の夫となる男だ」

優しく微笑みながらそう言う男。その言葉の意味を理解するのに数秒かかった。

「え……？あ……ええ!？」

驚きのあまり変な声が出てしまう。男はそんな私の様子をニコニコと笑いながら見ている。

「今日は私と君の婚礼の日だ……忘れたのかい？」

男が手招きをする。私は何故か逆らうことができず、フラフラと近づいてしまった。

「いい子だね。おいで……愛しい花嫁……」

そう言つて、私を抱きしめてくる。その抱擁はとても温かくて心地よくて……冷たくて心地が悪いものだった。

「ずっとこうしていよう。永遠に私達は離れることは無いんだよ……」

耳元で囁かれる甘い誘惑の言葉。私はそれに抗うことなどできず、ただ受け入れてし

まった。

「はい……わかりました……」

「そうだ。良い子だね」

私は素直に返事をして、さらに強く抱きつく。すると、身体から力が抜けていくような感覚に襲われた。

「これで君も我がもの……もう誰にも渡さないぞ……」

そう言いながら、男は私の首筋に顔を埋めてきた。チクツとした痛みが走ったけど、すぐに気にならなくなった。

「これからよろしく頼むよ？我だけの花……永久に共に生きよう……」

そう言いながら、私の頬を撫でる手つきは壊れ物を扱うように優しくかった。

『失礼します、旦那様。お召し物の準備が出来ました……奥方様の方も完璧に整っています』

部屋の外から使用人らしき人の声が聞こえてきた。すると、男は舌打ちをしながら立ち上がった。

「チツ……興醒めな……まあ、仕方ないか」

そう言いながら、手を差し出してくる。私はそれを無意識に掴んでしまった。

「フツ……可愛いねえ」

嬉しそうな表情で私を見つめる。その瞳には狂喜の色が浮かんでいた。

(ごめんね……■■■君)

心の中で誰ともわからない人に謝った。自分でも誰に向けての謝罪なのかも分からない……でも、自分にとってかけがえの無い人なのはわかる。そんな事を考えていると……

『失礼致します』

襖が開き、狐の面を付けた女性が入ってきた。私は何も考えず、その女性に着いて行った。

『この部屋になります……旦那様は二つ隣の部屋でございます』

そう言つて、案内してくれた人は去つていった。私は中に入って、ゆつくりと襖を閉じる。

『奥方様、こちらへどうぞ……着付けは私共がやりますので楽にしてください』

言われるがままに座ると、数人の女性によつて服を脱がされた。そして、化粧や髪結いなど、色々とやられた。最後に白無垢を着せられ、準備が完了した。

『とても綺麗ですよ』

『はい、本当に』

「……ありがとうございます」

私は小さく会釈をした。そして、立ち上がると、今度は別の部屋に通される。そこは、この世のものとは思えないほど美しかった。床の間には桜の花が生けてあり、池には鯉が泳いでいる。

「……まるで、絵の中にいるみたい」

思わず呟いてしまう。それほどまでに、この場所は現実離れしていた。

「……私、ホントに結婚しちゃうのかな……」

そう呟くと同時に涙が溢れ出てきた。なんだろう……胸が苦しい……締め付けられる様な……辛い感情が胸に渦巻いてくる。

「……嫌だよ……こんなの……」

ポロポロと流れる雫。止まらない……止めどなく流れ出てくる。

「……誰か……助けてよ……」

そう願っても、誰も助けに来てくれないのはわかってる。でも、そう言わずにはいられなかった。

「助けてくれなくてもいいから……せめて……」

その先を言う前に後ろの襖が開かれた。そこには、あの男が立っている。

「ああ……美しい……やっと私のモノになったんだね……」

男はうつとりとした様子でこちらを見ている。そして、そのまま近づいてきた。

「さあ、いこうか……」

男に手を差し出される。私はそれを掴みそうになった。だけど、ハツとして思い留まる。

「……触らないで！」

パシンツ！と音を立てて、男の手を弾いた。男は驚いた顔をして、私を見ている。

「ふむ……君は面白いな……ますます気に入ったよ」

そう言いながら、私の頬に触れようとしてくる。私はそれを払い除けた。すると、男はニタアつと笑みを浮かべた。

背筋に悪寒が走る。本能的にヤバいと感じるが、身体が言うことを聞かない。そのまま近づいてくる男。

「もう一度眠って貰おうか……なあに、起きる頃には全て終わっている、安心して眠ってくれ」

その言葉を最後に意識がプツリと途切れた。

# 神様にマトモな奴はいない

S i d e 零斗

「あぢいー……」

「焼け死ぬう……」

茹だる様な気温の中、市内を駆け回る事約三十分。目的である神社は一向に見つかる気配がない。現在は小さな公園のベンチに腰掛けている。

「件のクソ神は認識障害の術使ってるのか？」

額の汗を拭い、スマホで地図アプリを開き、古い地図と見比べて、スマホの地図と照らし合わせて神社の位置を確認する。

「この辺りの筈なんだが……」

ガリガリと頭を掻きながら呟く。思考をフル回転させて、何故見つからないかを考える。

（可能性としては、さっき言った認識障害の術……それもかなり高位のものを使用して、もしくは神社自体があつた世とこの世の狭間にあるか……それか何かしらの条件を満たした者だけが認識できるのか……）

考えれば考える程、分からなくなっていく。ただ一つ言えることがあるとすれば……  
「土地神つてのは随分と肝が小さい野郎だな」

思わずため息が出る。そして、そのまま立ち上がる。

「ん？ねえ、零斗」

「どうした？」

「何か……鈴の音？みたいなものしない？」

言われて耳を澄ますが、特に何も聞こえない。唯々セミの音が五月雨の様に降り注ぐだけ。

「そんな音は聴こえ——」

急に視界から悠花の姿が消える。慌てて探すが見当たらない。

「おいおい……冗談キツイぜ……」

首筋に嫌な汗が流れる。流石に焦りを覚えるが、直ぐに冷静になる。

「悠花は『鈴の音を聴いた』後に消えた……なら、それが条件の一つ……だが、俺は聴こえなかった……」

頭の中で必死に情報を整理する。今起きている事象と自分の持っている情報を基に仮説を立てる。

「モスキート音の様に一定の周波数に乗せ、聴いた人間を攫う物か……」

仮説を立てた所で現状が変わる訳でもないので、とりあえず行動を開始する。

「タネが分かれば、後は簡単だ……」

ゆつくりと目を閉じ、神経を研ぎ澄ませる。すると、先ほどまで煩かった音が嘘のように消え去り、静寂が訪れる。

——チリーン……チリーン……

遠くの方で微かに聞こえるその音を聴き逃さない様に集中して聞き入る。そして、次第に鈴の音が大きくはつきりとしてくる。

「……こつちか」

ゆつくりと目を開けて歩き出す。少しずつではあるが近づいてくる鈴の音を聞きながら歩みを進める。

「みいつけた……」

少し歩くと目の前には古びた鳥居があった。恐らくここに一花さんと悠花も居るのだろう。

「……先ずは二人の搜索だな」

鳥居を潜るとそこは広い境内だった。神社の本殿に続くであろう道があり、周りにも何やら祠の様なものが並んでいる。階段を上がると、そこには古風な屋敷が見える。

「侵入はバレてそうだな……」





気配を消し、屋敷の内部へと進んでいく。廊下を歩いていくと、襖の隙間から部屋の様子が見えたので、覗いてみる。

「……第一目標発見」

部屋の中には、白無垢を身に纏った一花さんとそれに寄り添っている男性がいた。その光景を見た瞬間、心臓を鷲掴みされたような感覚に陥る。

しかし、動揺している暇はない。すぐに気持ちを切り替えて、二人を観察する。

(あれが土地神か?)

見た目的には普通の人間にしか見えないが、明らかに異常な雰囲気を放っている。

「ああ……堪らなく愛おしい……」

土地神は、愛おしそうに一花さんの頬を撫でる。その表情は何処までも歪んでいて、見ているだけで吐きそうになる。

「……」

そんな土地神に対して、一花さんは無言のまま俯いている。その姿からは生気が感じられない。

怒りで我を忘れてしまいそうだ。拳を強く握り締め、今すぐ飛び出してやりたい衝動を何とか抑え込む。

(……ふうー……落ち着け……今は我慢しろ……)

深呼吸をして、冷静になるように努める。ここで感情的になってもいいことは無い。(連れ出すにしても、土地神の意識をどうにか逸らさないとなんだが……)

どうしたものかと考え込んでいると、突然背筋に悪寒が走る。警戒度を最大にし、部屋内の様子を見ようとするが大量の足音が近ずいて来る。

「あー零斗、みーつけたッ！」

廊下の曲がり角を曲がってきたのは、満面の笑みでこちらに全力疾走してくる悠花と薙刀やら刀やらを持ち、狐の面を付けた人間？が大量に居た。

「……は？」

予想外過ぎる展開に思わず素っ頓狂な声が出てしまう。屈んだ体勢のまま固まっていると、悠花に担がれてそのまま逃走する。

「……おい、悠花……ここから出た説教な？」

「……ごめんなさい……」

「ま、過ぎたことだ。仕方ない……」

反省した様子の悠花を見て、肩の力を抜いてため息をつく。

「とりあえず、降ろしてくれ……俺がお前を抱えてが走った方が速い」

悠花の背中を軽く叩いて、降ろす様に促す。悠花は頷くと、俺を前方に投げ飛ばした

……ん？

「ちよ!?! お前!?!」

受け身を取り、体勢を整える。後ろを見ると、既に奴らが追って来ていた。

「アツハツハ! わーい! につげろー!」

「てめえ、ホントに覚えてろよ!?!」

ケラケラと笑っている悠花を小脇に抱えて、全速力で逃げる。こんなところで捕まる訳にはいかない。

「とりあえずは外に—— ツ!!」

屋敷の外に出ようと曲がり角を曲がろうとした時、急に身体が自由が効かなくなる。

「クソ……マズイ……」

「あちやく……ここまで来て見つかつちやたか……」

いよいよ立っているのもしんどくなり、その場に倒れ込む。背後からは無数の足音。目の前には先程見たものと同じ姿の土地神。完全に詰みである。

「貴様達が我が領域に土足で踏み入り、あまつさえ我が花嫁を奪おうとした野蛮人だな?」

一歩ずつ此方に近づいてくる土地神。その瞳は濁り切っており、視線が合う度に体中に悪寒が走る。

「……だ……め……」

土地神の前に立ち塞がる影があつた。それは紛れもなく、先ほどまで俯いていた一花さんだった。

「……………ふんっ！」

軋む身体を無理矢理動かし、一花さんと悠花を回収して、土地神の側頭部に蹴りを入れてから逃げる。

「ねえ……のままで追いつかれるんだけど！」

確かに土地神以外にも沢山の気配を感じる。だが、此方もこれ以上土地神の近くにいたら動けなくなってしまう。

「うるせえ！黙って抱えられてろ！」

半ばヤケになりながら走り続ける。しかし、土地神はお構いなしに追いかけて来る。しかも徐々に距離を詰められている。

「……………クツッ……………」

限界が近いのか視界が霞む。今にも倒れ込みそうだが、絶対に倒れるわけには行かない。

「……………！出口か……………！」

遠目に鳥居が見える。あと少しだ。そう思った矢先のことだった。

「グッ……………オオ……………」

右足の脹ら脛に左肩に強烈な痛みと熱さが広がる。痛みの走った部分をみると矢が刺さっていて、血が滴っていた。

(チィ……射られたか……)

今までの疲労も相まって、遂に足を止めてしまった。それを見た土地神達は好機と思っただろう。一気に距離を取ってきた。

「悠花ア！一花さんの事……任せるぞ！」

「ええ!?ちよ……まさか!？」

小脇抱えていた悠花を鳥居の向こう側に投げて、同時に一花さんも投げる。手荒なやり方ではあるが、これ以外に方法が無い。

「さて……やっと二人きりになれたな……」

土地神の方に振り向き、睨みつける。もう動かなくなった足を庇いながら構える。

「……ハア、もう良い……全員屋敷に戻っている」

土地神がそう呟くと、周囲の気配は消えた。どうやら他の連中は屋敷に戻ったらしい。そして、この場に残っているのは俺達だけになった。

「その傷ではもう長くは持たんだろう……この短刀で自らの首を掻き切るれば、楽に逝けるだろうさ……」

何処から出したのか分からないが、土地神の手に握られていたのは朱塗りが施された

短刀だった。土地神の言う通り出血が酷いせいで意識が飛びそうだ。

「……最後に言い残すことはあるか？」

土地神の言葉を聞き、俺は目を閉じて小さく息を吐く。

「そうだな……強いて言うなら……」

ゆつくりと目を開き、目の前にいる土地神をしっかりと見据えて告げる。

「せいぜい吠え面かきやがれ、ロリコン野郎……」

その言葉と同時に短刀を土地神に向かつて投げ、直ぐさま鳥居まで全力で走る。土地

神の方は見ずに全力で駆け抜けていく。

「ふう……なんとか逃げ切れたか……」

鳥居を潜り抜けた瞬間、身体が効き始める。やはり、あの空間は異常だったようだ。後ろを振り返ると、当然のことながら追ってくる様子は無かった。

「ア、ア……しんど」

大きいため息をついて、空を見上げる。まだ夜明け前なのか辺りは暗いままだ。

「とりあえずは家帰って、傷の治療しなきゃだな……」

痛む身体に喝を入れながら、自宅を目指すのであった。



S i d e 東雲

『……………』  
『!?』

聞き覚えのある声がある……それも二人分の声がある……一人は男の人の声で怒っているみたいで、もう一人は女の子で謝ってる……のかな？

(あれ？私何してたんだった……確か……)

重い瞼を開けて状況を確認しようとする。ぼんやりとした視界の中に二人の姿が見えた。

「大体、貴方は何時も何時も……」

「うう……ごめんなさい……」

こちらに背を向けている方の男性に叱られている女の子。私のよく知っている人物だった。

「零斗君？悠花ちゃん？」

名前を呼ぶと二人は振り返り、驚いた顔をしていた。どうしてそんな顔しているのか分からず、小首を傾げると二人が慌てて近寄ってきた。

「二花さん、大丈夫ですか？身体に違和感とか無いですか？」



「うん……多分……?」

「一花、良かったあ〜! 本当に心配したんだよ!」

悠花ちゃんが抱きついてきたので受け止めると、悠花ちゃんは直ぐに離れる。すると、今度は零斗君が私の前で視線を合わせるようにしてしゃがみ込んで、まじまじと見つめてくる。

「えつと……なに?」

「……いえ、何でもありませんよ。無事で何よりです」

そういうと零斗君は優しく微笑んでくれた。それだけなのに凄く嬉しくなって自然と笑顔になる。

『熱中症で倒れた』と聞いた時はヒヤヒヤしましたよ……」

「……え?」

思わず呆けた返事をしてしまう。それに反応したのは何故か零斗君の方だった。その後、私が倒れていた経緯を教えてくれたのだが、全く身に覚えがなかった。

「……ねえ、それって本当なの?」

「ええ、勿論。嘘なんて言ってますんって」

「……そっか……」

先程からずっと気になっていた事がある。それは倒れていた時の記憶が全くと言っ

ていいほどないことだ。

「……………あれ？」

何かを思い出しかけたその時、一通の封筒が服の袖からパサリと音を立てて落ちた。

「これは……………手紙……………ですね……………」

「誰からの……………」

「差出人の名前が書いてないわね……………」

宛名を見ると、『東雲 一花様へ』と書かれていた。すると、零斗君が手紙を私の手から取って、封を破って中身を取り出した。

「……………」

零斗君の顔から笑顔が消えて、感情の無い表情をしている。それを見た瞬間、胸の奥が苦しくなるのを感じた。

「……………一花さん、この御守りを肌身離さず持つていてください」

「え？あ、うん」

そう言われて渡されたのはよく見るお寺のお土産の御守なんかじゃなくて、もつと神聖な雰囲気があるものだった。

「一花さん、貴方の身に何か常軌を逸した出来事が起きたら……………それを握って私の名前を呼んでください。例えどんな場所に居ようと必ず助け出しますから」

そう告げて、彼はいつものように優しい笑みを浮かべる。それが何だかとても淋しく感じてしまった。